

博士学位論文

日本語の会話における接続詞「で」について

令和 7 年 05 月 26 日

劉洋

75D22108

岡山大学大学院

社会文化科学研究科

社会文化学専攻

第1章 序論.....	1
1.1 はじめに.....	1
1.2 研究史.....	2
1.2.1 接続詞研究の展開.....	2
1.2.2 接続詞「で」に関する研究史.....	11
1.2.3 文法化研究と接続詞「で」.....	14
1.2.4 研究史における本研究の位置づけ.....	17
1.3 本研究の目的及び研究方法.....	18
1.3.1 研究目的.....	18
1.3.2 研究方法.....	19
1.4 本研究の構成.....	21
1.5 本研究の意義.....	22
第一部 通時的な記述.....	23
第2章 近世後期および明治期における「そこで」「それで」の意味の拡張からみた「で」の成立.....	23
2.1 はじめに.....	23
2.2 先行研究とその問題点.....	23
2.2.1 「それで」「そこで」「で」の意味について.....	23
2.2.2 「で」の成立に関する先行研究.....	25
2.3 調査の方法と用例の分類.....	26
2.4 「で」の成立について.....	33
2.4.1 文法化とは.....	33
2.4.2 「それで」の文法化.....	34
2.4.3 「それで」の文法化のプロセスと「で」の成立.....	43
2.4.4 「そこで」「それで」「で」の使用ジャンルと男女差.....	44
2.4.5 まとめ.....	46
2.5 接続助詞「で」を起源とする仮説の検討.....	46
2.6 結論.....	49
第3章 大正・昭和前期における接続詞「で」の拡張について.....	50
3.1 はじめに.....	50
3.2 先行研究とその問題点.....	50
3.3 調査方法と分類.....	51
3.4 調査結果.....	52
3.5 「で」の拡張実態.....	55
3.5.1 「で」の意味の.....	55
3.5.2 「で」の連続使用と統語的位置の変化.....	55
3.5.3 出現のジャンルおよび男女差からみた「で」の拡張.....	60

3.6 結論	61
第4章 近代日本語の会話における「で」の文脈展開機能.....	62
4.1 はじめに	62
4.2 先行研究とその問題点	63
4.3 調査対象とその結果	64
4.4 各時期における「で」の文脈展開機能の特徴	68
4.4.1 明治期	68
4.4.2 大正期	69
4.4.3 昭和前期	69
4.4.4 まとめ	69
4.5 「で」と他の接続詞との比較およびその位置づけ.....	70
4.5.1 「で」と「それで」「そこで」の比較.....	70
4.5.2 「で」の位置づけについて.....	72
4.5.3 まとめ	74
4.6 結論.....	74
第5章 現代日本語の会話における接続詞「で」の文脈展開機能.....	76
5.1 はじめに.....	76
5.2 先行研究とその問題点.....	76
5.3 調査データの概要と分析方法.....	77
5.3.1 データの概要.....	77
5.3.2 分析方法.....	78
5.4 結果と用例の分析.....	78
5.4.1 結果	78
5.4.2 用例の分析.....	79
5.4.2.1 話題開始機能	79
5.4.2.2 話題継続機能	81
5.4.2.3 話題終了機能	87
5.4.2.4 まとめ.....	88
5.5 近代日本語における「で」との比較.....	88
5.6 結論.....	89
第6章 現代日本語の会話における「で」のフィラー的な使用について.....	91
6.1 はじめに	91
6.2 先行研究とその問題点	91
6.3 使用したデータと「で」の出現位置	94
6.4 「で」は接続詞かフィラーか?	104
6.4.1 会話における「で」の用法	105
6.4.2 まとめ	111

6.5 結論	112
第一部のまとめ	114
第二部 日本語教育への応用	116
第7章『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS) から見た会話における「で」 の使用実態について-日本語母語話者との比較を通じて-	116
7.1 はじめに	116
7.2 先行研究と問題点	117
7.3 調査方法	118
7.4 調査結果	118
7.4.1 母語・学習環境別にみる「で」の使用状況	118
7.4.2 日本語のレベル別にみる「で」の使用状況	120
7.4.3 まとめ	122
7.5 日本語学習者による「で」の使用について	122
7.6 結論	127
第8章「文脈展開機能」の観点からみた日本語学習者による「で」の使用	129
8.1 はじめ	129
8.2 先行研究とその問題点	129
8.3 調査対象と分析方法	130
8.4 調査結果とその分析	131
8.5 原因の分析と指導上の留意点	136
8.6 結論	138
第二部のまとめ	139
第9章 まとめと今後の課題	140
9.1 研究の総括	140
9.1.1 「で」の成立と初期の機能	140
9.1.2 機能の拡張と多様化	140
9.1.3 文脈展開機能の発達	140
9.1.4 フィラー的用法の出現	141
9.1.5 日本語学習者による使用実態	141
9.2 本研究の意義	141
9.2.1 理論的貢献	141
9.2.2 実践的貢献	142
9.3 今後の課題	142
9.3.1 理論的課題	142
9.3.2 実証的課題	142
9.3.3 教育的課題	142

9.4 結語.....	142
<参考文献>.....	144

第1章 序論

1.1 はじめに

本研究は、日本語会話における接続詞「で」の通時的変遷および日本語教育への応用という二つの側面から総合的に検討するものである。接続詞は文と文、さらには談話の各部分を有機的に結びつけ、文章・談話の構造や論理的関係を明示する重要な言語要素である。中でも「で」は現代日本語の会話において高頻度で使用される接続表現であるにもかかわらず、その言語学的特徴や歴史的変遷に関する包括的研究は未だ十分になされていない。

接続詞の持つ重要性は、言語コミュニケーションの本質と深く関わっている。人間のコミュニケーションは単一の文の羅列ではなく、複数の文が有機的に結びつき、一定の論理的関係や談話構造を形成することによって成立する。接続詞はこの結びつきを言語形式として明示化する役割を担い、円滑なコミュニケーションを支える基盤となる。特に口頭コミュニケーションにおいては、話し手の思考の流れや談話の組織化、さらには話者交替の管理にも関わる多機能的な要素として機能している。

現代日本語における「で」の使用頻度の高さは、複数の調査研究によって裏付けられている。石黒(2007)は11本の大学講義における接続詞の使用実態を分析し、文頭に接続詞を持つ文が全6717文中2481文、すなわち36.9%を占めると報告している。また、萩原(2012)は異なる会話場面(初対面の相手、友人、親しい友人、親しい男性同士、教師と学生)における接続詞の使用傾向を調査し、すべての場面で「で」の使用率が高いことを示した。これらの研究は、「で」が話し言葉において不可欠な要素であることを示唆している。

にもかかわらず、「で」は日本語学においてこれまで周縁的な位置にとどまってきた。その背景には、「で」が「それで」の単なる省略形として捉えられ、その起源が不明のままであり、かつ独立した接続詞としての地位が十分に認められてこなかったという事情がある。しかし、近年の研究によって、「で」は「それで」とは異なる独自の機能や用法を持ち、特に会話において重要な役割を果たしていることが明らかに becoming なる。

また、日本語教育の観点からも「で」の研究は重要な意義を持つ。深川(2007、2009)や石黒(2017)の調査によれば、日本語学習者による「で」の使用は母語話者に比べて著しく少なく、習得の困難さが指摘されている。さらに筆者の調査によれば、多くの日本語教科書では「で」が含まれる会話文は存在するものの、その用法に関する明示的な解説はほとんど見られない。このように、日本語教育における「で」の扱いは十分とは言えず、学習者の効果的な習得を支援するための基礎研究が求められている。

こうした状況を踏まえ、本研究では接続詞「で」の成立過程から現代にいたる機能、

さらには日本語教育への応用までを包括的に検討する。歴史的変遷と現代的機能を統合的に捉えることで、「で」の位置付けをより深く理解し、日本語学と日本語教育の双方に貢献することを目指す。

1.2 研究史

1.2.1 接続詞研究の展開

日本語の接続詞研究は、1900 年代初頭から現在に至るまで多くの研究者によって取り組まれてきた重要な研究分野である。馬場俊臣(2024)の「接続詞関係研究文献一覧」には 1434 件もの研究が収録されており、この分野の研究蓄積の豊かさを示している。これほど多くの研究が行われてきた背景には、接続詞が文章・談話の構造へ貢献することに果たす役割の重要性があり、文法論、文章論、談話分析、日本語教育など多様な領域から関心が寄せられてきた。

接続詞研究は、大きく文章論的研究と談話分析的研究という二つの視点に区分できる。この二つの視点からの研究は、接続詞を単なる品詞分類の一要素から、文章・談話を構造する機能的要素へ、さらには対人的・相互行為的機能を担う談話標識へと捉える視点の拡大を示している。

文章論的研究

日本語文法研究における接続詞への本格的な着目は、山田孝雄(1970:535-538)(初版 1902)の『日本文法論』に始まる。山田は接続詞を副詞の一種「接續副詞」に分類し、「下に来る語又は文を装定するのみならず、必上にあるものと下にあるとを仲保媒介して以て動詞又は文に關係を有せしむるものなり」と定義した。山田によれば、「接續副詞」は「語と語との媒介をなすものと文と文との媒介をなすものあり。又一の詞にして二様に用ゐらるゝものもある。その代表例としては、「ただし」「もっとも」「また」「かつ」「すなわち」などがある。

同じように、松下大三郎(1928:305-309)の『改撰標準日本文法』では、接続詞は独立した品詞として認めず、「前の語の意義を借り之を自己の意義に利用して後語の意義を修飾する副詞であって、恰も前語と後語とを接続する」ものと定義されている。「また」「すなわち」「故に」「しかし」「けれども」とった表現が含まれている。その用法を四つに分けられる:「相関係する二動詞の中間に在って前の動詞の意義を借りて次の動詞を修飾する」用法、「相関係する二名詞の間に在って前の名詞の意義を借りて後の名詞を修飾する」用法、「相関係しない二語の間に在って、前の語の意義を借りて後の語を修飾する」用法、「断句の下に在って、断句の意義を借りて後の語を修飾する」用法である。

一方、橋本進吉(1959:110-122)『國文法體系論』では、接続詞は「副用言」の下位

分類であり、詞の一種として位置づけられた。橋本は説接続詞を「前の語を承けて、後の後につづけるもので、それ故、一文節をなすものである」と定義し、「對等の關係を表はす一語と語の間にあり(連用と連體とあり)」(例えば、「及び」「又は」など)、「從屬の關係を表はす一文の初めにあり(連用)」(例えば、「その上」「それに」など)という二種を分けた。

続いて、保科孝一(2001:168-174)(初版 1911)は『日本口語法』では、接続詞をひとつの品詞として位置付けており、「語句あるいは文を結びつける語」とし、「獨立し得るものと、得ざるもの」と定義している。前者には「又」「又ワ」「ソレダカラ」「ソレデ」「ソコデ」「トコロデ」などが挙げられている。「語と語を結びつけるもの」と「句や文を結びつけるもの」がある。意味から分類すると、「原因結果の關係を有する事柄」「全く相背反する事柄」「單に上の事柄を受けて下の事柄」「意義の上からはあまり必要でないが、修辭上から軽く思想」を接続するものが見られる。後者には「接続の用を為す」助詞「シ」「テ」「ガ」「ノニ」「ト」などが含まれる。この区分は、現在の接続詞と接続助詞の区別につながる視点を提供した。

以上の説と異なり、文章論を提唱した時枝誠記(1950:162-178)の『日本文法口語篇』では、「言語過程説」の立場から接続詞は辞として捉えられ、「一般に、語、句、文を續ける語」と定義されている。また、接続詞は、話し手が二つの事柄をどのように関係づけ、自らの思考をどのように展開していくかを示すものと指摘した。これは、接続詞の機能をよりダイナミックな文脈の中で捉えようとする試みであり、後の談話分析などにも通じる視点と言える。さらに、時枝は接続詞と接続助詞の違いについて、それらは単に形式上の違いだけであって本質的な違いではないと主張している。時枝のこれらの見解はその後の文字資料を対象とした研究に大きな影響を与えた。

この以降も多くの接続詞の研究は、時枝誠記の研究を受容しつつ、接続詞の接続の種類や役割など、より詳細な分析を進めきた。

阪倉篤義(1952:239-248)は『日本文法の話』において、接続詞を辞に分類される品詞とし、「文章の構造」における「さきの文を受けて後の文の展開をはかるという上に重要な役割を果たすものである」と指摘した。阪倉は接続詞が因果關係(「だから」)、並列(「また」)、逆接(「しかし」)などの關係を示すことができ、話し手の態度や立場によって表現の仕方が変わることであると指摘している。例えば、「電車が動く。だから人が走っている。電車が動く。それに人が走っている。」(p. 239、下線は筆者によるもの)という用例が示しているようである。

永野賢(1959:84-90)は『学校文法文章論:読解・作文指導の基本的な方法』において、時枝誠記に始まる文章論の立場を継承・発展させ、接続詞は文と文の「連接關係の類型」を示す要素として捉え、それを具体的な読解指導・作文指導の方法論として学校教育の文脈に落とし込もうとした。永野は接続詞を接続語の下位分類とし、「接続の

意味関係から」7 類に分けた。「a 前の事がらを原因・理由とする結果や結末が、次にくることを表すもの。また、事が順調に運ぶ場合のきっかけや前おきなどを表すもの」。例えば、「だから」「それで」などである。「b 前の事がらとそぐわない事、つりあわない事、反対の事、などが次にくることを表すもの。または、前とあととを対立させる意味を表すものもある」。例えば、「だが」「しかし」などである。「c 前の事がらに次の事がらを付け加えたり、また、前のと並んで存在する事がらをあげたりするのに使われるもの」。例えば、「そして」「かつ」などである。「d 前の事を、ことばを変えて説明することを表すもの」。例えば、「つまり」「すなわち」などである。「e 前の事がらに関する理由などの説明を補うことを表すもの」。例えば、「なぜなら」「ただし」などである。「f 前の事がらとあとの事がらと、どちらかを選ぶことを表すもの」。例えば、「または」「それとも」などである。「話題を変えることを表すもの」。例えば、「さて」「では」などである。

他に、塚原鉄雄(1968)の「接続詞」、塚原鉄雄(1969)の「接続の論理—接続詞と接続助詞—」、塚原鉄雄(1970)の「接続詞—その機能の特殊性—」などにおいては、時枝説を受けて接続詞を辞として見られており、「接続機能」及びその分類について詳細に議論されている。

以上の研究が示しているように、文章論的研究においては、初頭は接続詞の品詞としての位置づけと基本的用法の解明に重点が置かれていた。接続詞はどのような語彙的特徴を持ち、他の品詞とどう区別されるかという形態的・統語的側面が中心課題であった。

長年にわたる議論の、一つの到達点を示す研究として評価できる成果は、市川孝(1978)の『国語教育のための文章論概説』である。市川は接続詞を「接続語句」という広い概念の中に位置づけ、「接続詞」を「接続語句の中核をなすものである。二つの表現の中間に位置して、両者を対立させ、その関係を示すことによって、二つの表現を接続する働きをもっている」と定義した。さらに、接続詞の意味・機能を「前後の意味の関係」に基づいて体系化し、大分類 3 類、中分類 7 種、小分類 21 種という階層的な分類体系を確立した。その具体的な分類は以下のようなになる。

①二つの事柄を論理的に結びつけて述べるのに用いる

(i) 順接 前の内容を条件とするその帰結を導く

順当: だから・それで・したがって・それなら

きっかけ: すると・と

結果: かくて・こうして

(ii) 逆接 前の内容に反する内容を導く。

反対: しかし・けれども・だが

背反:それなのに・そのくせ・しかるに

意外:ところが・それが

②二つ(以上)の事柄を別々に述べるのに用いる

(iii) 添加 前の内容に付け加わる内容を導入

累加:そして・そうして

序列:ついで・つぎに

追加:そのうえ・それに

並列:また・ならびに

(iv) 対比 前文の内容に対して対比的な内容を導入

比較:というより

対立:そのかわり

選択:それとも・あるいは・または

(v) 転換 前文の内容から転じて、別個の内容を導入

転移:ところで・ときに

課題:さて

区分:それでは・では

放任:ともあれ

③一つの事柄に関して拡充して述べるのに用いる。

(vi) 同列 前の内容と同等と見なされる内容を導入

反復:すなわち・つまり・要するに

(vii) 補足 前の内容を補足する内容を導入

根拠づけ:なぜなら・というのは

制約:ただし・もともと

補足:なお・ちなみに

(市川 1978:66-67)

以上の研究が示しているように、文章論においては、接続詞はまず品詞としての地位をめぐる議論を経て独立した研究対象として確立され、その後、時枝(1950)の提唱した文章論の視点に基づき、その意味や分類が明らかにされ、市川(1978)による包括的な体系化へと結実していった。市川の分類は現在も接続詞研究の基盤として広く参照されている。

一方、文章論的研究においては、教育視点からの研究もいくつ挙げられる。栗原宜子(1968)は「それから・すると・では」では、「それから」「すると」「では」の使い方と違い、そしてこれらを教える際に注意すべきポイントについて説明している。

「それから」は「順序的用法」「付加的用法」を持つが、この二つの用法を正しく区

別して運用するため、前者は行動動詞や時間的制限を受けやすい動詞を使用するのに対して、後者は「形容詞、性状的動詞、存在を示す動詞」を使用することが推奨されている。「すると」は主に、「すると」は主に、事象の自然な進展を客観的に描写し、話者の主観性を表現しない点が注意されたい。「では」は「すると」と異なり、後文に話し手の判断、依頼、命令などの主観性を強く伝える表現がくる。

市川保子(1988)は「接続詞の用法と文脈展開—作文指導のための一読案—」では、文章を作る能力を向上させるため、初中級レベルの日本語学習者を対象として、接続詞による文脈の展開方を提案した。具体的な指導案は次のようである：「接続詞についての概括的把握」→「文脈展開についての概括的把握」→「接続詞を使つての文脈展開の指導」

加納千恵子(1992)は「読解指導の方法と過程—接続詞による予測・推測を利用した指導例—」では、米国 MIT で行った接続詞による予測・推測を利用した読解授業を報告した。加納は授業の指導手順を示しながら、「接続詞を手かりに、ある文の後に続く文の内容、あるいはある段落の後に続く段落の内容を予測・推測という技能」を学習者に身につけさせることを目的とした。その指導案はおおむね好評だった。

さらに、石黒圭(2008)は『文章は接続詞で決まる』において、接続詞の役割を説明したうえで、「論理の接続詞」「整理の接続詞」「理解の接続詞」「展開の接続詞」「文末の接続詞」に分け、接続詞の全体を比較的詳細に分析した。この研究は接続詞の理解が文章の読解力と産出力を高める上で重要であることを示した。

これらの研究は、理論研究と教育実践の架け橋となっている。さらに、現在では大規模コーパスの整備と共に、接続詞の使用実態に関する実証的研究はさらに進展している。

談話分析的研究

文章論的アプローチでは、接続詞は主に文章の統括性や結束性を高める要素として捉えられ、書き言葉における論理展開の指標としてたくさん研究されてきた。しかし、こうした文章論的アプローチの限界が徐々に認識されるようになった。従来の文章論では説明できない接続詞の多様な機能に注目し始めた。

接続詞研究は文レベルから談話レベルへと視野を拡大した談話分析的研究に関して、大石初太郎(1954)の「日常談話の接続詞」は比較的早いものである。大石は「文章において、思想展開の重要なポイントとなるものが、接続詞・接続助詞である。接続詞や接続助詞の多義ないしあいまいさは、だから、非常な困りものである」と指摘している。そこで、大石は録音したデータを分析し、接続詞の出現位置を「文頭」「文中」「話頭」、その用法を A「前の語・句・文とをつなぐ役割を果たしているもの」、B「前の語・句・文と後の語・句・文をつなぐという関係が明確にとらえがたいけれど

も、一つの意味を受けて、次の表現を導き出す役割を果たしているもの」、C「つなぐはたらきを全くもたない、すなわち、接続表現のはたらきをなさないもの。いわゆる、「遊び言葉」「場つなぎ言葉」の類で、ほとんど無意味に置かれているもの」、D「言葉の中絶あるいは不整表現のために、A・B・C・のいずれに属するかの判断の立たないもの」に分けている。また、「(1)無意味に近い「遊び言葉」としての接続詞が日常談話には多い。(2)言葉を直接に受けず、事態の意味を受ける接続詞が、日常談話には多い。これは表現構造の非論理性のゆえに、通達能率を低下させることがしばしばある。(3)文中の接続詞が日常談話には多いが、これは表現が整理されていないからである」という結論が出された。

その後、鈴木英夫(1968)の「「不整表現」の実態とその意義」、田中章夫(1984)の「接続詞の諸問題—その成立と機能—」、岩澤治美(1985)の「逆接の接続詞の用法」、多門靖容(1990)の「接続詞と談話展開についての一視点」、蓮沼昭子(1991)の「対話における「だから」の機能」などの研究では、話し言葉における接続詞の用法に目を向け、書き言葉とは異なった振る舞いを論じた。

談話的分析研究においては、もう一つの重要な研究動向は、接続詞の談話標識(discourse marker)としての機能への注目である。Schiffrin (1987:31-48) は、談話標識を"sequentially dependent"(順序依存的)という要素を定義している。Schiffrinによれば、これらの標識は"provide contextual coordinates for utterances: they index an utterance to the local contexts in which utterances are produced and in which they are to be interpreted." (発話に対して文脈的な座標を与えるものであり、具体的には、発話がなされ、そして解釈されるべき局所的な文脈へとその発話を関連付ける機能を持つ)¹とされている。この影響を受け、日本の接続詞に関する談話研究においても、積極的に談話標識の視点が導入された。

山森良枝(1990)は「接続詞の二類型と談話の情報構造—「つまり」と「だから」を手がかりに」においては、「「つまり」や「すなわち」などの使用制限が、一見結論を導入するという点で共通しているかに思われる理由文の後続節を導入する「だから」とどのように異なるかを明確され、「つまり」が結論を導入するという読みを持つという事実が談話の言語構造、及び談話を構成する」「命題間の推論の連鎖という情報構造とに起因する」と指摘した。

この後、浜田麻里(1991)は「デハ」の機能——推論と接続語」では、Schiffrin(1987)の分析法を参考にしながら、「デハ」とその類義の接続語の機能を分析した。結論としては、「「デハ」の本質的な機能は推論であるが、そこから派生して解釈、推論の確認・補充、態度表明、転換などの機能を有している」ことが明らかになった。

¹ 以下、特に断りのない限り、英語の翻訳は筆者によるものである。

また、川口容子(1992)は「接続表現の機能に関する一考察—ディスコースマーカー「but」「でも」の標すもの—」では、会話におけるディスコースマーカー「でも」について、会話者の推論による社会的相互作用の観点から分析を行った。Schiffrin (1987)の"contrastive marker"という概念で説明される逆説の接続詞"but"との対比を通じて、日本語の「でも」の特徴を考察した結果、談話の内容理解の手掛かりとなる話の展開要素と、相手への配慮を示す要素という二つの機能が確認された。特に「でも」によって導かれる譲歩の表現や謙遜した言い方に対するコメントの表現などには、日本語独特の要素が含まれていると考えられる。また、"but"が発話初めに位置する場合は話者交替が割り込みによって起こっている場合が多いとされるが、日本語の「でも」はより協力的な話者交替での使用が多く見られると思われる。

このほか、梶本総子(1993a、1993b、1994)の「会話構成単位と談話標識との関わり—「じゃ」を手がかりに」、「会話の構造から見た談話標識の機能—ソレデに関する一考察—」、「談話標識の機能について—ソレデ・デを中心として」などの研究も、談話標識分野における嚆矢的研究と言える。

談話分析的研究期における最大の変革は、佐久間まゆみ(1992、2002)による「文脈展開機能」概念の提唱である。佐久間まゆみ(1992)は「接続表現の「文脈展開機能」とは、「文章・談話の内部にある文脈を先へと展開させて、完結し、統一ある全体を形成して伝達する働き」である」と定義し、接続詞を談話の構造に貢献する機能的要素として位置づけた。佐久間まゆみ(2002)では、この概念をさらに発展させ、接続表現の文脈展開機能を「話題開始機能」「話題継続機能」「話題終了機能」の3種14類に体系的に分類した。この分類は、接続詞を単なる「接続」という視点から解放し、談話の全体構造における多様な機能を捉える枠組みを提供した。

この概念は、それまでの文法中心的な接続詞研究から、実際の談話における動的な機能分析へと研究パラダイムを大きく転換させた。「で」のような接続表現を単なる文と文をつなぐ形式的要素としてではなく、話者が談話の流れを積極的に構築・調整するための戦略的リソースとして再定義した点で革新的である。

さらに、表 1.1 が示すように、文脈展開機能の類型化（話題開始、話題継続、話題終了等）により、抽象的であった談話の組織化プロセスを具体的に記述・分析することが可能となった。これは談話分析の方法論的發展に大きく寄与し、その後の会話分析や相互行為研究にも理論的基盤を提供している。このため、本研究では会話における接続詞の機能を分析するにあたり、「文脈展開機能」という概念を援用する。

表 1.1 佐久間(2002:168)による分類

文脈展開機能	定義	接続類型 市川孝 (1978)	接続表現の例
A 話題開始機能 a1 話を始める機能 a2 話を再び始める機能	話を最初から始める. 前と違う話を途中から始める.	転換型 転換型	ソレデハ・デハ・ジャ ア サテ・トコロデ・ <u>デ</u>
B 話題継続機能 b1 話を重ねる機能 b2 話を深める機能 b3 話を進める機能 b4 話をうながす機能 b5 話を戻す機能 b6 話をはさむ機能 b7 話をそらす機能 b8 話をさえぎる機能 b9 話を变える機能 b10 話をまとめる機能	前の話を繰り返し、同じ話を続ける. 前の話を言い換えて説明する. 前の話の結果や反対の話を述べる. 話が先へ進むように相手をうながす. 一度それた話を再び元の話に戻す 前の話に関連する別の話をさし込む. 前の話を避けて、違う話をする. 相手の話を続けさせないようにする. 前の話を切り上げて、違う話をする. 前の話をまとめて、しめくくる.	添加型／対比型／補足型 同列型／補足型 順接型／逆接型／対比型 添加型／順接型 転換型 順接型／逆接型／補足型 転換型／補足型 逆接型／補足型 転換型／逆接型／補足型 同列型／順接型／転換型	ソシテ・サラニ／マタハ／ナオ タトエバ・スナワチ／ナゼナラ ソコデ／ケレドモ・ガ／ムシロ ソレカラ／ソレデ・ <u>デ</u> ・ダカラ トコロデ／サテ・ソモソモ ダカラ／ダケド・デモ／タダ <u>デ</u> ／タダ・モットモ・チナミニ デモ・ダケド・シカシ／ダッテ トコロデ・ジャ／シカシ／実ハ 要スルニ／従ッテ・ユエニ／トニカク
C 話題終了機能 c1 話を終える機能 c2 話を一応終える機能	話をすべて完了する. 前の話を途中で切り上げる.	順接型／転換型 順接型／転換型	コウシテ・トイウワケデ／ソレデハ・ジャア ダカラ・ソコデ・ <u>デ</u> ／デハ・ジャ

下線は筆者によるもの

談話分析的な研究では、接続詞を単なる文間の論理関係を示すものではなく、談話の構造や対人的機能に貢献する多機能的要素として捉え、その多様な側面を実証的に解明する方向に発展した。

同様、日本語教育の観点に基づく談話的研究も見られる。

栃木由香(1989、1994、1995)の「日本語学習者のストーリーテリングに関する一分析―話の展開と接続形式を中心に―」、「日本語の話しことばにおける接続と指示の表現―日本語中級学習者の発話分析にむけて―」、「日本語中級学習者の話しことば

のテキストの型—接続表現の使用を中心に—という一連の研究では、主に初中級の学習者を対象として研究が行われた。その結果、学習者は接続表現の使用に大きな困難を抱えており、短文の多用または長すぎる一文により発話が不連続になる問題が確認された。学習者は「あとで」の多用や不適切な「て」接続など、母語話者とは異なる使用パターンを示し、自分の言語能力範囲内で表現しようとする積極性は見られるものの、適切性に欠ける使用が頻発している。発話不連続の原因として、一文中の節数の少なさ、基本的接続形式への過度な依存、使用可能な接続詞・指示詞の種類の限定性、文頭・節頭での接続表現使用率の低さ、指示対象との関係構築の困難さなどが複合的に作用していることが明らかになった。これらの要因により、学習者の発話は断片的で不連続な印象を与える結果となっている。

金久保紀子(1993)は「大学の講義における接続の表現」では、日本語教育における接続詞の適切な使用に関する研究が進んでいないという問題を指摘した。そこで、金久保は文系と理系の講義で使用された接続詞の違いを明らかにすることを目的とした。その結果、理科系：「豊富な内容を消化するために、接続詞や接続詞相当句、あるいはその他の理解を補助する語句・発話を効果的に使用している。接続詞や接続助詞をもとの機能や意味を保持したままで使用する傾向がある」。文科系：「接続詞・接続助詞共に文科系の方が頻度は高い。言い換えや説明のための挿入句を多用し、ある事柄を様々な面から説明することを考慮した発話を行っている。もとの意味とは異なる用い方をする場合も多い」ことがわかった。

近藤邦子(2004)は栃木の研究を参考にし、「香港の大学における日本語学習者によるストーリーテリングの接続表現の問題点」では、香港の大学に在籍する学生を対象として接続表現を含む談話構成の問題点を考察した。近藤はストーリーテリングをしてもらうことによって、学習者は母語話者により、接続詞のバリエーションが少ない、「でも」「から」の使用が頻繁に見られる、「で」の使用がほぼないという問題点を見つけた。

石黒圭(2017)の「談話研究からみた話し方教育への示唆—学習者は接続詞をどのように習得するか—」では、ストーリーの説明と旅行の体験の語るという二つの課題の調査を通じて、学習者の接続詞習得過程が分析され、母語の影響や習得の困難点が明らかになった。この上で、指導上の留意点を「母語話者が「そして」をあまり使わない」、母語話者が「あと」をストーリーのあらすじを語る際にあまり使わない、「母語話者が「で」と「それで」を使い分けている」と3点提案した。

本研究の研究対象である「で」は話し言葉において使用される表現であるため、主として談話分析の研究手法に基づいて分析を進めることとする。

1.2.2 接続詞「で」に関する研究史

馬場俊臣(2024)の「接続詞関係研究文献一覧」においては、「そして」「しかし」「だから」などの一般的な接続詞に関する研究が数多く見られる一方で、「で」に特化した研究は比較的少数である。この不均衡は、「で」が「それで」の単なる省略形として長らく周縁的に扱われてきたことを反映している。しかし、1990年代以降、「で」の機能や用法に関する専門的研究が徐々に蓄積されてきた。ここでは、「で」に関する研究の展開を、意味・機能の(比較)研究、談話標識研究、歴史的研究、言語習得の研究という4つの視点から整理する。

意味・機能の(比較)研究

「で」を着目する研究では、大石初太郎(1954)の「日常談話の接続詞」が比較的最早いものである。大石は話し言葉における接続詞を調査したところ、「特に「で」という接続詞の使いさまのあいまいさは著しいものがあると気がついた」。実際の用例を観察すると、「で」には、「それゆえ」「そういうわけだ」「ところが」「しかるに」「ところで」「すなわち」「なお」「それで」「そして」というような意味が読み取れる。また、「積極的な意味をもたない、いわば「遊びことば」的な使い方」もある。「で」の多機能性を示した点は重要である。

有賀千佳子(1993)の「対話における接続詞の機能について―「それで」の用法を手がかりに―」である。有賀は「で」を「それで」の異形として捉えつつも、談話構成の働きや聞き手への効果に注目し、「順接・のべたて型」「順接・認め(発見)型」「添加型・のべたて型」「展開要求型」「展開予告型-話題展開型」「展開予告型-前出文脈言及型」「展開予告型-依頼を切り出し型」といった機能分類を提示した。この上で、教育上の有用性を提言した。

山本貴昭(2004)は「談話における接続詞「で」の用法―女性話者の談話を対象として―」において、有賀千佳子(1993)を参考したうえで女性話者の談話を対象に「で」の用法を検討した。山本は「で」の用法を「順接-のべたて型」「順接-認め型」「添加型-のべたて型」「添加型-展開要求型」「添加型-話題展開型」「添加型-既出文脈言及型」「添加型-依頼切り出し型」「逆説」に分類した。また、「前件を明確に指示する必要がある」場合には、「で」が使用されにくいというところは、「それで」と異なることが指摘された。

権景姫(2003、2005)も有賀千佳子(1993)を検討し、「接続表現「で」の意味機能」と「転換の接続詞「で」について」において、「で」の意味用法をより精緻に分析した。権は「で」を「話題接続機能」と「話題転換機能」に分類した。特に、「話題転換機能」では、「暫定的に主題と緊密に結束されている「典型的な転換」と、主題との結束の度合いが落ちる「周辺的な転換」の二通りに分けて」考察することによって、

「で」の転換の意味の領域が拡張していることは興味深かった。

石島満沙子・中川道子(2004)は「日本語母語話者の独話に現れる接続詞「で」について」において、市川(1978)の接続詞の類別に従って日本語母語話者の独話における「で」を対象として、「それで」との比較研究を行った。その結果、「で」が「それで」より多用されており、「順接」「添加」の基本的意味に加え、「同列」「補足」「転換」「対比」という多様な機能を持つことが明らかになった。また、「で」が特に実験方法や実験結果などの説明部分に多く使用されるという特徴を指摘した。さらに、日本語教育の観点から、「指導は日本語学習者が学会発表練習で産出する接続表現の誤用、および非用の改善に役立つと思われ、「自然な日本語」の習得に繋がる」と指摘した。

談話標識研究

まず、梶本総子(1994)は「談話標識の機能について—ソレデ・デを中心として—」において、「それで」「で」の談話標識としての機能に着目し、会話における様々な用法を分析した。梶本は「それで」「で」が「因果関係」「事の成り行き」という二つの基本的機能を持つとし、特に後者の機能が「会話構成単位との関係からさまざまな談話上の機能」を果たしていると指摘した。特に、「で」は「因果関係」の用法を持っていないという指摘は、単なる省略形ではなく、独自の機能を持つ可能性を示唆した点で斬新であった。

小出慶一(2008)は「発話行動における「で」の役割:「で」のフィラー化をめぐって」において、「で」の談話標識としての機能に着目し、特に独話におけるフィラー的機能を指摘した。小出は対話における「で」の基本的機能を「目下の話題や文脈に区切りをつけると同時に、そのあとに目下の関心事が続くことを示す」とし、独話では「発話処理に連動し、区切りを示すことにより、処理を支援し、また処理のための心的な余裕を作る」という機能を持つと論じた。この研究は「で」のフィラー的側面に着目した先駆的研究として重要である。

この後、中島悦子(2011)も『自然談話の文法』において、フィラーとしての「で」の機能を考察した。中島は「で」が発話の冒頭と発話中の両方に現れることを指摘し、発話冒頭の「で」は「発話権の維持」、発話中の「で」は「注意喚起」という機能を持つと論じた。

一方、串田秀也(2009)は「聴き手による語りの進行促進—継続支持・継続催促・継続試行—」において、相互行為の視点から「で」の機能を分析した。串田は「で」や「それで」を用いた聞き手の発話が、話し手の語りを促進する「継続催促」として機能することを明らかにした。この研究は「で」の対人的・相互行為的側面に光を当てた点で重要である。

このほか、伊藤翼斗(2012)は「発話冒頭における接続に関わる要素の順序:「で」を中心に」において、以上の研究と異なる方向から、発話冒頭の「で」とフィラーなど他の要素との位置関係を分析した。伊藤は「「で」は「えーと」「んー」「あの一」といった「発話産出に何らかの問題があり、現時点では産出できないことを示すもの」より先行する」という特徴を指摘し、「で」と他の談話標識の統語的位置関係を明らかにした。

歴史的研究

「で」の歴史的側面に関する研究は、接続詞研究全体の中でも特に手薄な領域である。馬場俊臣(2024)における 1434 件の研究で、「で」の成立や歴史的変遷に焦点を当てた研究はごくわずかである。

大久保歩美(2016)は「近世後期江戸語及び明治期東京語における「ソレデ」の用法」において、「それで」の用法変化を分析した。大久保は明治前期から「談話的用法」が見られ始め、明治後期にかけて増加したことを指摘した。この「談話的用法」は「自己の話を継続させる」「相手の話を継続させる」「話を切りかえる」に分類され、「で」の出現と関連する可能性が述べられている。

百瀬みのり(2020)は「日本語接続詞の通時的研究」において、「で」の成立について通時的考察を行った。百瀬は「で」が近代以降に出現し始め、「「そこで」と「それで」の指示詞部「ソコ」、「ソレ」の意味の漂白化、前部の語要素を具体的に示すのではなく、前部の状況を文脈的に示すようになった再分析、音韻的弱化、語用論機能の強化」という通時的な文法化の過程を経て成立したと論じた。この研究は「で」の歴史的形成過程に文法化理論を適用した先駆的業績である。

言語習得研究

深川美帆(2007、2009)は「接続表現から見た上級日本語学習者の談話の特徴-日本語母語話者と比較して-」において、上級日本語学習者と日本語母語話者の談話における接続表現使用を比較した。この研究では、接続詞「で」は学習者の発話ではあまり見られなかったという事実が指摘された。深川はその理由として、「で」が文頭で発話される際、その音声の短さから学習者が気付きにくいことを挙げている。

この理由を認識したうえで、宇佐美まゆみ(2013)は「接続詞「で」の指導に関する実験的研究:インプット洪水・インプット強化・明示的な文法説明の効果」において、学習者に「で」の使用を促進するための指導法を実験的に検証した。宇佐美は「インプット洪水」と「インプット強化」に加えて、「明示的な文法説明」が学習者の「で」の習得に効果的であることを明らかにした。この研究は「で」の教育的応用に関する重要な示唆を提供している。

石黒圭(2017)は「談話研究からみた話し方教育への示唆—学習者は接続詞をどのように習得するか—」において、中国語を母語とする日本語学習者の独話で使用される接続詞を調査した。この研究では、中国語母語話者は日本語母語話者に比べて「で」の使用が少ないことが明らかになった。石黒は「中国語母語話者は日本留学を機に「で」を頻用しはじめることを考えると、日本で日本人の会話を聞いたり日本人と会話をしたりするなかで自然に「で」を習得する」と指摘し、自然なコミュニケーション環境が「で」の習得に重要であることを示している。

1.2.3 文法化研究と接続詞「で」

本研究では、接続詞「で」の成立と拡張を分析するための理論的枠組みとして文法化(grammaticalization)理論を採用する。文法化とは、語彙的な要素が文法的な機能を持つようになるプロセス、あるいは既に文法的な要素がさらに文法的になるプロセスを指す。この理論的枠組みは、「で」の歴史的発展を体系的に捉えるうえで有効な視点を提供する。

文法化研究は、Meillet(1912)が"grammaticalisation"という用語を初めて用いたことに始まる。1970年代以降、Givón(1979)の"Today's morphology is yesterday's syntax"という命題に代表されるように、文法化は通時的言語変化研究の中心的テーマとなった。彼は言語の発展モデル中心として文法化を論じた。

discourse → syntax → morphology → morphophonemics → zero

(談話 → 統語 → 形態 → 形態音韻 → ゼロ)

Givón(1979:209)

一方、Hopper(1991)は" On some principles of grammaticization "において、文法化の初期段階を特徴づける「階層化(layering)」「分岐(divergence)」「特殊化(specialization)」「保持性(persistence)」「脱範疇化(decategorialization)」という5つの原則を提示した。「階層化(layering)」は広い機能領域内で新しい層が継続的に生まれる現象である。この過程で古い層は必ずしも廃棄されず、新しい層と共存して相互作用することがある。最も明白な例は、完全形式と縮約形式が関連する形式として共存し、機能にわずかな違いしかない場合である。「分岐(divergence)」はより文法的でない形式が二つに分裂し、一つの変種は以前の特徴を維持しながら、もう一つの変種がより文法的になる現象である。「特殊化(specialization)」は文法形式の選択肢が減少し、特定の形式が意味と使用において一般化される過程である。多くの文法形式は特殊化を経て、より少数の形式がより一般的な文法的意味を担うようになっている。「保持(persistence)」は文法化された形式が元の語彙的意味の痕跡を保持し続ける現象である。文法化の過程で

形式が新しい機能を獲得しても、元の特性の一部が残り続ける。「脱範疇化(decategorialization)」は形式が語彙的に「開いた」カテゴリー（主要品詞）から比較的「閉じた」カテゴリー（副次的品詞）へと変化する過程である。

さらに、Lehmann(1995)は"Thoughts on Grammaticalization"において、文法化のプロセスを「意味の漂白化(semantic bleaching)」「音韻的弱化(phonological attrition)」「統語的作用域の縮小(structural scope reduction)」などのパラメータによって特徴づけた。特に、言語記号の自律性(autonomy)に基づいて文法化の度合いを測定するための6つのパラメータを提案した。

範列的(paradigmatic)軸のパラメータ:完全性(integrity)

範列性(paradigmaticity)

範列的可変性(paradigmatic variability)

統辞的(syntagmatic)軸のパラメータ:構造的スコープ(structural scope)

結合度(bondedness)

統辞的可変性(syntagmatic variability)

一方、文法化現象を理解するための必読書として位置づけられる Hopper&Traugott(2003)の"Grammaticalization"においては、形式・構造的変化だけでなく、意味・語用論的变化の重要性が強調されている。具体的には、具体的から抽象へ、命題から談話/表現へ、主観化(Subjectification)、語用論的強化といった側面の変化が文法化における重要な指標であると指摘されている。Traugott&Dasher(2002)においても、「語用論的推論(pragmatic inferencing)」が文法化の主要な駆動力であると主張され、「文脈誘発的再解釈(context-induced reinterpretation)」のメカニズムを提示されている。また、Hopper&Traugott(2003)は文法変化が通常、単方向性原則に従い、逆方向に進むことは稀であると指摘している。

Hopperらは談話標識の発達を例の一つとして、これらの指標を説明している。例えば、"indeed"という表現は、動詞の後に位置し、「確かに、本当に」という意味で行為の様態を評価する節内副詞であったが、徐々に文頭や文中に位置し、命題内容全体に対する話者の評価を表す文副詞へと変化し、さらに談話単位を区切り、先行する内容への話者の態度や評価を示す談話標識として使用されるようになった。この分析枠組みは、日本語の一部の談話標識の発達を文法化の視点から分析する上で有効な視座を提供している。

例えば、Onodera (2004)の研究によれば、「でも」「な」という表現は元々の節末連結装置から発話頭標識への移行している。「でも」タイプの接続語（いわゆる逆接続詞）と「な」グループの終助詞（「な」「のう」「ね」など）は、語用論化を経て発

話頭の談話標識になった。

また、小野寺(2014)によれば、談話標識の通時的な変化については、文法化の立場から論じると、本来、節内で文法的役割を果たしていた語彙的要素が、時間とともに品詞的性質を失い、抽象化し、意味や統語的機能が再分類されることによって、節間や発話レベルの談話標識へと段階的に変化していくプロセスを説明することができる。このプロセスにおいては、もともと明確であった語彙的指示機能が失われ、韻律的な独立性が高まり、文脈や発話管理という、より広い談話的機能を獲得する。

さらに、Hopper&Traugott(2003)によると、日本語の接続表現の変化も文法化の枠組みで説明できる。日本語の動詞の中止形「て/で」は具体的な語彙的意味を持っているが、徐々に文と文を繋ぎ、文と文の間の論理関係（並列、順接、原因、様態など）を示すという抽象的な文法機能を獲得したことは、典型的な文法化の用例である。

- (1) a. Koto o nui-de hanga ni kaketa.

coat OBJ take:off-de hanger on hung

'I took my coat off and hung it on a hanger.'

- b. Wain o nomisugi-te atama ga itai

wine OBJ drink:too:much-te headache SUBJ have

'I drank too much wine and have a headache.'

(Hopper&Traugott 2003:181-182)

このほか、Matsumoto (1988)は日本語の「が」は、句末の従属標識から文頭の接続詞へと発達した興味深い事例を提供している。これによると、現代日本語では次のような談話が可能である。

- (2) Taro-wa wakai(*-yo)-ga, yoku yar-u(-yo).

Taro-TOP young(-PART)-but well do-PRES(-PART)

"Taro is young, but he does a good job."

(太郎は若い**が**、よくやるよ。)

- (3) Taro-wa wakai(-yo). **Ga**, yoku yar-u(-yo).

Taro-TOP young(-PART) But well do- PRES(-PART)

"Taro is young. But he does a good job."

(太郎は若いよ。**が**、よくやるよ。)

Matsumoto (1988:340)

例(2)は単一の文であり、例(3)は2つの文から構成されている。一般的な単方向性原則(unidirectionality)(Hopper&Traugott:2003)から予測すると、(2)のような文は(3)のような構造から派生したと考えられるが、歴史的データはむしろ逆のことを示している。初期の日本語テキストは(2)のタイプの文が(3)のようなタイプの先行形態であることが確認されている。(3)のタイプは比較的新しく、17世紀頃から特に口語的なスタイルを示す戯曲などに記録され始めた。この発見は文法化の単方向性に対する重要な反例を提供している。

「で」の成立を文法化の観点から本格的に分析した研究としては、百瀬みのり(2020)が挙げられる。百瀬は「で」の成立を「そこで」と「それで」の文法化という枠組みで捉え、「指示詞部「ソコ」、「ソレ」の意味の漂白化、前部の語要素を具体的に示すのではなく、前部の状況を文脈的に示すようになった再分析、音韻的弱化、語用論機能の強化」というプロセスを経て「で」が生じたと論じた。しかし、このメカニズムについての詳細な説明や実証的データに基づく分析は十分ではなく、「で」の成立後の機能拡張過程については考察されていない。

本研究では、文法化理論の枠組み、特に「意味の漂白化」(semantic bleaching)、「音韻的弱化」(phonological attrition)「語用論的推(pragmatic inferencing)」「主観化(subjectification)・間主観(intersubjectification)」などの概念を援用し、近世後期から明治期にかけての「で」の成立過程、および大正・昭和期における機能拡張のプロセスを論じる。これによって、「で」の発展を日本語文法化研究の重要な事例として位置づけることを目指す。

1.2.4 研究史における本研究の位置づけ

以上の研究史を踏まえると、接続詞「で」研究における現状と課題は次のように整理できる。

第一に、「で」に特化した研究は相対的に少なく、特にその歴史的側面に光を当てた研究は極めて限られている。大久保(2016)や百瀬(2020)などの先駆的研究はあるものの、「で」の成立過程及びその後の大正・昭和期における機能拡張の過程は十分に解明されていない。特に通時的コーパスを用いた実証的研究は限定的である。

第二に、「で」の文脈展開機能に関しては佐久間(2002)による重要な指摘があるものの、会話データに基づく詳細な機能分析、特に時代による機能変化の分析は不足している。佐久間は「で」の文脈展開機能として「話を再び始める機能」「話をうながす機能」「話をそらす機能」「話を一応終える機能」を挙げているが、これらの機能の分類基準や識別方法については十分に論じられていない。

第三に、「で」のフィラー的用法については小出(2008)、中島(2011)などが言及しているが、接続詞としての用法とフィラー的用法の連続性や境界に関する考察は十分になされていない。特に、どのような統語的・談話的環境で「で」がフィラー的機能

を獲得するの点については未解明の部分が多い。

第四に、日本語学習者による「で」の習得や使用実態については深川(2007、2009)、石黒(2017)などの研究があるが、レベル別・母語別の詳細な比較分析や文脈展開機能の観点からの考察は限られている。特に、日本語母語話者の「で」の使用との具体的な差異に関する精緻な分析は十分ではない。

このような研究状況において、本研究は以下の課題がある。

明治期から現代に至る「で」の通時的変遷を大規模コーパスによって実証的に跡づけ、その成立と機能拡張の全体像を明らかにする。特に文法化理論の枠組みを用いて「で」の発展過程を体系的に分析する。

「で」の文脈展開機能を時代別に比較分析し、その機能変化の様相を解明する。佐久間(1992、2002)の提唱した分類を基盤としつつ、会話データに基づいてその分類基準を精緻化し、「で」の機能の通時的分布を明らかにする。

接続詞としての「で」とフィラー的「で」の連続性を理論的に考察する。特に統語的環境(出現位置)や前後文脈との関係を詳細に分析し、フィラー的用法が生じる環境を解明する。

日本語母語話者と学習者の「で」の使用実態を多角的に比較し、教育的示唆を導出する。母語・学習環境別および日本語レベル別の分析を通じて、「で」の習得に影響を与える要因を特定し、効果的な指導法の提案に応援する。

従来の研究では、これらの側面が個別に検討されることはあっても、通時的変遷、現代日本語における機能、教育的応用という統合的に考察した研究は見当たらない。そこで、本研究は接続詞「で」についての研究に対し、これらの側面から包括的な研究を行うことを目的とする。

1.3 本研究の目的及び研究方法

1.3.1 研究目的

本研究は、日本語における接続詞「で」の通時的変遷および日本語教育への応用可能性を探ることを目的とする。具体的には、「で」の意味分類を市川(1978)に従い、その成立を文法化の枠組みを利用し、会話における機能の分析については佐久間(1992、2002)を参考した上で、以下の研究課題に取り組む：

1. 明治期における「で」の成立過程とその初期の使用実態の解明
 - 明治期における「で」の意味・用法にはどのような特徴があったのか
 - 「で」の成立は文法化理論の観点からどのように説明できるのか
2. 大正時代から昭和時代にかけての「で」の意味・機能の変遷の追跡
 - 大正期における「で」の意味・用法にはどのような特徴があったのか

- 昭和前期における「で」の意味・用法にはどのような特徴があったのか
 - この時期の「で」の意味・機能にはどのような拡張が見られるのか
3. 近代・現代日本語の会話における「で」の文脈展開機能の分析
 - 近代日本語における「で」はどのような文脈展開機能を果たしているのか
 - 現代日本語の会話で「で」はどのような文脈展開機能を果たしているのか
 - 両者を比べ、どのような違いがあるのか
 4. 「で」のフィラー的な用法とその特徴の考察
 - 「で」はどのような統語的・談話的環境でフィラー的機能を獲得するのか
 - 接続詞としての「で」とフィラー的「で」の連続性はどのように捉えられるのか
 - フィラー的「で」の談話における役割は何か
 5. 日本語学習者による「で」の使用実態と教育への示唆
 - 日本語学習者は「で」をどのように使用しているのか
 - 日本語母語話者と学習者の「で」の使用にはどのような差異があるのか
 - 母語・学習環境・日本語レベルは「で」の習得にどのように影響するのか
 - 「で」の効果的な指導にはどのような方法が考えられるのか
 6. 日本語学習者の会話にける「で」の文脈展開機能の分析
 - 日本語学習者による「で」はどのような文脈展開機能を果たしているのか
 - 日本語母語話者とくらべ、どのような違いがあるのか

これらの研究課題を通じて、「で」の成立から現代に至る発展過程を包括的に理解し、その言語学的特徴と教育的意義を総合的に解明することを目指す。

1.3.2 研究方法

本研究では、上記の研究課題に対応するため、コーパスを利用した実証的アプローチを採用する。コーパスを活用する利点としては、以下の点が挙げられる：

1. 客観性と実証性：実際の言語使用に基づくデータ収集が可能となり、研究者の内省に依存しない客観的な分析が可能となる。
2. 量的・質的分析の融合：統計的手法による量的分析と、具体的用例に基づく質的分析を組み合わせた多角的考察が可能となる。
3. 通時的視点：時代別のデータを比較することで通時の変化を捉える。
4. 再現性と検証可能性：研究手法と使用データを明示することで、研究結果の再現と検証が可能となる。

具体的に使用するコーパスとその選定理由は以下の通りである：

『日本語歴史コーパス』(CHJ)

-選定理由:近世後期から明治・大正期における「で」の通時的変遷を追跡するために最適なコーパスである。

-特徴:全てのテキストに形態論情報が付与されており、「で」を接続詞として特定した検索が可能。明治・大正編には雑誌、教科書、口語資料、近代小説、新聞、落語 SP 盤などの多様なジャンルが収録されている。

-使用目的:研究課題 1、2、3 に対応し、明治期における「で」の成立過程と大正期における意味・機能の変遷を分析する。近代における「で」の文脈展開機能を分析する。

『昭和・平成書き言葉コーパス』(SHC)

-選定理由:『昭和話し言葉コーパス』(SSC)には昭和後期のデータのみを収録されている。その代替手段として、『昭和・平成書き言葉コーパス』(SHC)を利用し、その中の会話文に出現した「で」の用例を収集した。

-特徴:広く読まれて社会的な影響が大きいことや明治から平成まで継続的に刊行されてきたことや『日本語歴史コーパス 明治・大正編』や『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)に収録されておりコーパスを接続可能であることという観点から雑誌・書籍・新聞の 3 つのレジスターが採用された。

-使用目的:研究課題 2、3 に対応し、昭和前期における「で」の意味・機能を分析する。近代における「で」の文脈展開機能を分析する。

『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)

-選定理由:日本語学習者による「で」の使用実態を分析するために最適なコーパスである。

-特徴:「日本を含む 20 の国と地域で、異なる 12 言語を母語とする日本語学習者 1000 人の話し言葉および書き言葉」を収録。レベル別、母語別、タスク別、学習環境別にデータの比較が可能。

-使用目的:研究課題 4、5、6 に対応し、日本語学習者による「で」の使用実態を分析する。日本語母語話者による「で」のフィラー化する用法を考察する。

『BTSJ 日本語自然会話コーパス』

-選定理由:現代日本語の自然会話における「で」の文脈展開機能を分析するために最適なコーパスである。

-特徴:「場面や話者同士の関係などの条件が統制」された自然会話データを収録。会話グループごとにまとめられており、様々な対人関係における会話の比較が可能。

-使用目的:研究課題 3 に対応し、現代日本語における「で」の文脈展開機能を分析する。

データ分析においては、量的分析と質的分析を組み合わせたアプローチを採用する。

1.4 本研究の構成

本研究は全9章から構成され、大きく二部に分けられている。

第1章「序論」では、研究の背景、接続詞研究の史的展開、接続詞「で」に関する先行研究、先行研究と本研究の立場、本研究の目的と方法、および本論文の構成を概観した。

第2章から第6章までは「第一部:通時的な記述」として、「で」の歴史的変遷を辿る。

第2章「近世後期および明治期における「そこで」「それで」の意味の拡張からみた「で」の成立」では、『日本語歴史コーパス』(CHJ)を用いて江戸後期から明治時代にかけての「そこで」「それで」「で」の用例を収集・分析する。「で」の成立過程を文法化の観点から考察し、「それで」の意味変化と「で」の成立の関連性を明らかにする。

第3章「大正・昭和前期における接続詞「で」の意味の拡張について」では、『日本語歴史コーパス』(CHJ)および『昭和・平成書き言葉コーパス』(SHC)を利用して大正・昭和前期における「で」の意味機能の拡張過程を分析する。特に「添加-促す」の意味の増加傾向や、「で」の連続使用と出現位置の変化などに注目し、「で」の機能的拡張の実態を明らかにする。

第4章「近代日本語の会話における「で」の文脈展開機能」では、前章までの考察を踏まえ、明治・大正・昭和前期における「で」の文脈展開機能を分析する。佐久間(1992、2002)の「文脈展開機能」の枠組みを援用しつつ、各時代における「で」の機能分布の変化を追跡する。

第5章「現代日本語の会話における接続詞「で」の文脈展開機能」では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス』を用いて、現代日本語の会話における「で」の文脈展開機能を詳細に分析する。「話題開始機能」「話題継続機能」「話題終了機能」の各機能における「で」の使われ方を具体的な用例を通して検討し、機能分類の精緻化を図る。

第6章「現代日本語の会話における「で」のフィラー的な使用について」では『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)における日本語母語話者のデータを用いて、「で」のフィラー的な用法を考察する。「で」の出現位置や前後文脈との関係を詳細に分析し、接続詞とフィラーという二分法ではなく、両者の連続性という観点から「で」の多様な機能を体系的に記述する。

第7章と第8章は「第二部:日本語教育への応用」として、日本語学習者による「で」の使用実態を分析する。

第7章『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)から見た会話における「で」の使用実態について-日本語母語話者との比較を通じて-では、I-JASのデータを用いて、母語・学習環境別および日本語レベル別に「で」の使用状況を分析する。

日本語母語話者と学習者の「で」の使用を量的・質的に比較し、習得に影響を与える要因を特定する。

第8章「文脈展開機能」の観点からみた日本語学習者による「で」の使用においては、まず第6章で構築した「で」の文脈展開機能に関する分析枠組みを適用し、日本語学習者による「で」の使用実態とその特徴を明らかにする。続いて、この分析結果に基づき、学習者の機能使用に見られる単一化および狭小化といった課題の原因を探究する。最終的に、これらの考察を踏まえ、今後の日本語教育における留意点を提案した。

1.5 本研究の意義

本研究は、日本語の接続詞「で」の分析を通じて、文法化研究、談話・会話研究、日本語教育、コーパス言語学という複数の学術領域にまたがる学際的な意義を持つことを目指す。具体的には、文法化研究に対して「で」の成立と拡張プロセスの解明、特に「指示詞の脱落による接続詞の成立」や「接続詞からフィラーへの機能拡張」といった新たな事例を提供する。談話・会話研究へは、「で」の文脈展開機能を詳細に分析し、機能分類を精緻化することで理論的発展に寄与するとともに、接続詞とフィラーの連続性という新たな視点を提示する。日本語教育においては、学習者の「で」の使用実態を多角的に分析し、背景に応じた効果的な指導法の開発や習得困難な機能の特定に貢献する。さらに、コーパス言語学に対しては、複数の大規模コーパスを組み合わせた多様な研究方法論を示す。このように、「で」という一見小さな言語要素の研究を通じて、日本語の一言語形式の歴史的変遷と現代的機能を包括的に解明し、言語研究と言語教育の架け橋となる知見を提供することを企図する。

第一部 通時的な記述

第2章 近世後期および明治期における「そこで」「それで」の意味の拡張からみた「で」の成立

2.1 はじめに

接続詞「で」は、現代日本語の会話において高頻度で使用する重要な言語要素であるが、その成立過程と歴史的変遷については未だ十分に解明されていない。従来、「で」は「それで」や「そこで」の短縮形として理解されることが多かったが、その成立時期や意味機能の変化過程については諸説があり、明確な結論に至っていない状況である。そこで本章では、近世後期から明治期(1751-1912)にかけての会話における「それで」、「そこで」、「で」の意味を調査し、「で」の派生過程を文法化の観点から検討する。

本章は次のように構成される。2.2 節で先行研究とその問題点を述べる。2.3 節で調査の方法とその結果を示す。2.4 節「で」の派生過程を文法化の観点から検討する。2.5 節で接続助詞「で」を起源とする仮説を論じる。2.6 節で章をまとめる。

2.2 先行研究とその問題点

2.2.1 「それで」「そこで」「で」の意味について

まず、『日本国語大辞典(第二版)』(2003)で3語の意味を確認する。

「そこで」

- ① 前の事柄が原因、理由になってその後に起こる事柄を述べることを示す。そういうわけで。それゆえ。そこでそれ。そこでもって。

*史記抄(1477)一七・游俠列伝「さるほどに第一番めの処を見れば、灌_レ口とあるぞ。そこで、惣を知たぞ」 *中華若木詩抄(1520 頃)上「めたと酔て、平生虎溪の橋を、過まいと云たも、打すぎた也。そこで、三人同時に、手を拍て大笑也」 *天草本伊曾保(1593)獅子と鼠の事「カノネズミヲ ツカウデ チュウニ サシアゲタ。ネズミモ sokode(ソコデ) ヲウキニ キモヲ ケシ」 *四河入海(17C 前)一一・一「其子は今薪を負て乞食をする程にと云ぞ。そこで 莊王敖が子を召出して有ぞ」 *狂言記・武悪(1660)『『べちになにもいひはせなんだか』
『そこで申ますのには』」 *滑稽本・浮世床(1813-23)初・上「其親が寒の内に鯉が食べたいといふ。ソコデ いろいろ手段した所が」

- ② 話題を転じる意を示す。さて。

＊滑稽本・浮世床(1813-23)初・中「早う遣って下んせ南簾(なんりゃう)ちゃといふたら、ヲットまかせと急ぎをるはい。そこで五六丁も往たと思ふと、俄に遅うなって」 ＊腕くらべ(1916-17)＜永井荷風＞ニニ「旅へ出て稼がうと云ふ思はくも能くわかってゐるんだ。そこで物は相談だ。お前の顔が立ちさへすれア何もすき好んで田舎へ行かずともいいんだらう」

「それで」

- ① 前の事柄を理由として、後の事柄を述べるのに用いる。それゆえに。それだから。それでもって。

＊虎明本狂言・武悪(室町末-近世初)「ちといそぎの用が有てきたに依て、それで²おもてからよぶだ」 ＊歌舞伎・丹波与作手網帯(1693)一「さればそちに逢ひたいというて泣いて居る者がある。それで呼びにやった」 ＊洒落本・遊子方言(1770)発端「どうもたばこを呑(のま)んはわるいもので御座ります。それで此間ずいぶんたばこ、のみならをうと存ます」

- ② 前の事柄を受けて、後の事柄を説き起こしたり相手の話をうながしたりするのに用いる。そして。そういうふうにして。それから。それでもって。

＊浮雲(1887-89)＜二葉亭四迷＞二・九「『失敬な事を云ふと思つてピッタリ跳(はね)付けてやったら、瘦我慢と云はん計りに云やアがった』『それで君、黙つてみたか』 ＊虞美人草(1907)＜夏目漱石＞十六「其所(そこ)が分かりさへすれば、後が話がし好(いい)い。それでと、御前は甲野を嫌つてゐるんぢやなからう

「で」

「そこで」「それで」などの「そこ」「それ」が略され、助詞「で」が自立語化したものの

- ① 前の事柄を受け、其の結果、あとの事柄が生ずることを示す。そこで。それで。そういうわけで。

＊多情多恨(1896)＜尾崎紅葉＞前・一一「『君、ねえ、本当の事を言ひたまえへよ』『で、もし本当なら如何(どう)する気だね』 ＊吾輩は猫である(1905-06)＜夏目漱石＞「これなら心置きなく首が縊(くく)れる嬉しいと思つた。で早速下駄を引き懸けて」

- ② 会話文で、話し手に対して次の話をうながす時に用いる。それで(どうした)。それから(どうなった)。 ＊歌舞伎・幼稚子敵討(1753)四「『国はどこじゃ』『紀州でござんす』『ムム、紀州。で』『母様と三人出ました』 ＊寂しければ(1924-

² 下線付けと黒体は筆者による。以下特に断らない限り、「で」という表示は筆者によるものである。

25) <久保田万太郎> 『『ええ、もう、いった通り、たうたうきませんでした』
『で?』『昨夜、<略>ヒョッコリ入ってみえたぢゃアありませんか』

2.2.2 「で」の成立に関する先行研究

「で」の派生について言及される研究は二つが挙げられる。まず、大久保(2016)は、近世後期江戸語及び明治期東京語における「それで」の「談話的用法」に注目している。この「談話的用法」は、「談話や文学作品の会話部分」において、「「ソレ」の指示内容が減少化し、「デ」の働きも不明である」(p. 103)とされている。この用法は明治前期から複数の使用が確認されており、後期になると一層拡大した。さらに、「談話的用法」は「自己の話を継続させる」、「相手の話を継続させる」、「話を切りかえる」に分類されている。特に注目したいのは、「で」の出現が「談話的用法」と関わる可能性が指摘されている点であるが、詳しい考察が見られない。

また、百瀬(2020)は、「で」は近代以降に出現し始め、「「そこで」と「それで」の「指示詞部「ソコ」、「ソレ」の意味の漂白化、前部の語的要素を具体的に示すのではなく、前部の状況を文脈的に示すようになった再分析、音韻的弱化、語用論機能の強化」(pp. 209-226)という通時的な文法化の過程を経て成立したものと指摘している。この観点を賛成するものの、「再分析、音韻的弱化、語用論機能の強化」といったものについて詳細な説明がないため、「で」の派生過程は十分に論述されていないと言える。

実際、指示詞の脱落によって接続詞が成立した現象は少なくない。『日本国語大辞典(第二版)』(2003)では、「でも」「では」がそれぞれ「それでも」「それでは」の略と解釈されている。また、尾谷(2015)は「なので」という表現が「それなので」の「それ」が脱落して成立したと主張している。さらに、矢島(2011)では、「だから」が「それだから」から派生したと論じており、宮内(2014)では、「それだが」などの表現から指示詞が脱落することによって、「だが」などの表現として定着したと述べている。したがって、「で」の成立は「そこで」「それで」から派生した可能性が十分にあるものの、その派生過程は単純な語形の省略によるものなのか、あるいは一定なプロセスを経たものなのかという問題が残る。そこで、本章は近世後期から明治期にかけての会話における「そこで」「それで」「で」の意味を調査したうえで、「で」の派生過程を文法化の観点から考察していく。

2.3 調査の方法と用例の分類

本章では、『日本語歴史コーパス』(CHJ)を利用して近世後期と明治期の会話における接続詞である「そこで」「それで」「で」が含まれる用例を集取する。検索方法は以下のように指定した³。

近世後期(1751～1867)
「そこで」
語彙素: 其処
後方共起 1 キーから 1 語 書字出現形: で
時代名: 江戸 本文種別: 会話 前後文脈の語数: 200
結果: 70 件 研究対象範囲内: 53 件 ⁴
「それで」
語彙素: 其れ
後方共起 1 キーから 1 語 書字出現形: で
時代名: 江戸 本文種別: 会話 前後文脈の語数: 200
結果: 428 件 研究対象範囲内: 95 件
「で」
書字出現形: で
短単位の条件の追加: 品詞の大分類が接続詞
時代名: 江戸 本文種別: 会話 前後文脈の語数: 200
結果: 0 件
明治期(1868～1912)
「そこで」
語彙素: 其処
後方共起 1 キーから 1 語 書字出現形: で
時代名: 明治 本文種別: 会話 文体: 口語 前後文脈の語数: 200
結果: 192 件

³ 江戸語で会話しているか上方語で会話をしているかによって分析の結果が異なることが予想できるが、本研究では「で」の成立を論じることを目的としているため、今後の課題としたい。

⁴ 本研究の対象は接続詞であるため、「そこ」「それ」部分が具体的な指示対象を指す用例は指示詞であるため研究対象から外している。また、検索結果に現れた「それでは」「それでも」「それでもって」「(場所)で」などといった例を外している。以下の研究対象範囲内の結果も同様に得ている。

研究対象範囲内:148 件
「それで」
語彙素:其れ
後方共起 1 キーから 1 語 書字出現形:で
時代名:明治 本文種別:会話 文体:口語 前後文脈の語数:200
結果:784 件 研究対象範囲内:222 件
「で」
書字出現形:で
短単位の条件の追加:品詞の大分類が接続詞
時代名:明治 本文種別:会話 文体:口語 前後文脈の語数:200
結果:103 件 研究対象範囲内:76 件

本研究では、以上の方法で収集した用例を、3 語の後続部の内容と先行部との意味関係に基づいて、大きく「順接」「添加」「転換」の三つのタイプに分類している。

なお、本研究における「順接」「添加」「転換」の定義は以下のようなものである。

順接:先行部と後続部には因果関係があり、先行部を条件、後続部をその帰結としている。

添加⁵:先行部と後続部には因果関係が見られず、先行部の内容をふまえて後続部で関連する情報を述べる。話し手自身が情報を付け加えたり、または対話者からより情報の追加を促したりする場合がある⁶。

転換:先行部と異なる内容が後続部で続く。

その他:分類が難しい用例や、いずれのカテゴリーにも属さない特殊な用例

各意味の代表例は次のようである。

順接

- (1) おらあ若時から。そうして来たもんだ。それにいまどきわいらがけんくわあするなあ。ただめつたむしやうに大きなこへばか出して。犬猫のいがみやうやうにな。

⁵ 「添加」という分類は、永野(1959)では、接続詞を「接続の意味関係から」分けた 7 類の一つ、「c 前の事がらに次の事がらを付け加えたり、また、前のと並んで存在する事がらをあげたりするのに使われるもの」を参考して定義した。

⁶ 日本語記述文法研究会(2009:85-88)により、「聞き手に話を先に進めるように促す」用法には、追加情報を求めるため、「加算的關係」を示す接続詞の一つである。そのため、本研究では、連接類型の観点から「促す」を「添加」の一種として扱っている。

わつきやわつきやとさわぐもんだから。そこでわへらが事をばな。世間で。きやんと名をつけたも尤だ。

(『洒落本-俠者方言』 1771)

- (2) 唯此物が出来て誠に其取かへが便利になつたので。そこで始て売買といふ名がつきましたが。実は矢張取かへといつても。交易といつても。同じ事なのでござる。

(『交易問答(上)』 加藤弘之 1869)

- (3) これあんまりな事を言ねんし。その日は雨が降つて。どふも帰られねいから。それでおゐたのさ

(『洒落本-南閨雑話』 夢中山人 1773)

- (4) 金吾『先刻はお手紙で有難う…明日御馳走して呉れるさうだが、何う云ふ理由だね』新人『何でもないんだよ。鳥渡面白い趣向が浮んだから、夫で急に始めるのさ』

(『喜劇嘘の世界』 田口掬汀 1909)

- (5) 「昔は口中科と申しまして今の齒科醫ですね。其齒科醫が代々の家業でした。其頃は總て施療で療治代は一切取りませんでしたが其代りに乳香散と申して十一味を含有する齒磨粉を賣出し將軍宗諸侯方及京都の五攝家方へお出入を許され菊の御紋を拜領した事もムいます。で、ナカナカ賣れたものでした。」

(『読売新聞-會社商店訪問記(八十八)』 小間物商かねやす 1909)

例(1)～例(5)は因果関係を表す「そこで」「それで」「で」の用例である。特に例(1)～例(4)では、「そこで」「それで」は「(だ)から」「ので」といった原因・理由を表す接続助詞と共起し、文と文の順接の論理関係を明示している。例(5)では、接続助詞との共起はないものの、「將軍宗諸侯方及京都の五攝家方へお出入を許され菊の御紋を拜領した事もムいます」という先行文脈と、それによって「ナカナカ賣れたものでした」と結果の間に、比較的明確な因果関係が読み取れる。

添加-つけ加え

- (6) さあ此かひ巻をひつかけて。それ此手拭を帯にめた。そこでおめへの手拭で。こう深くほうかむり。是でよし / \

(『人情本-明烏後の正夢(初編壺の巻)』 滝亭鯉丈/為永春水 1821)

- (7) 私はそのつもりで言った「しょうぶ」じゃあないんで。お前さんの勝負勝負と言うのは、さすがお武家だからやっとうの勝負をしようというのは面白いもの。私はこの売り物でげす。で、物にはおんなじな物で聞き違い言い違い、語が悪い、音の上げ下げが悪い、と違いがあります。なぜあると言うのが、頭へ被りますねえ、これを日本では笠ってます。そこで、やまいで困る梅毒を瘡てえます

よ。ねえ、それから、渡って歩くのをこれを橋と言う。

(『菖蒲売の唄』 橋家圓喬(四代) 1905)

- (8) くみ「さうかへ。彦三のとなせは嘸宜ろう。吾儕は芝居も別に見度とも。思はないがお前が其様に見たけりやあ若旦那様に伺つて。宜と被仰たら。往うはね
咲「なに貴君構う事があります物か。若旦那さまは。毎日 / \ 内を外にばかりして。お在遊ばすものを貴君もお芝居ぐらゐへ被為入のは。あたりまへでございますは。それで。もしお腹でもお立遊ばしたら室町へお帰り遊ばしましな。夫も全体貴君が御気が宜からですは。

(『人情本-春色江戸紫(初編中之巻)』 山々亭有人 1864)

- (9) 私はソツトあしたとか都へ嫁入る友の事思ひ出して縫ひさしの針を止めて店の格子の合間からきつと見る、前の八百屋の御内儀さんが店の御客をつかまへて、
『財産は有あまるほどあるですとさ、それでね姑はなし、小姑はなしで、まだ陸軍の大學校とかへ通つてゐるんですとさ、だからあの娘さんは幸福でさあね』

(『女学世界-さもしい心』 もみじ 1909)

- (10) 「専売局の芸者を買った以上は、必ず一週間以内に再び来んじゃあいかなぜ」。
「へーえ?」「で、もしな、お前の方で来んかれば、こ、こっちゃから召喚状を發するから。」「呼び出し状を?驚いたねえ、へえ。」「で、召喚状を受けたる場合には、督促手数料を五円申し受ける。」

(『専売芸者』 柳家小せん(初代) 1911)

例(6)～例(10)では、「そこで」「それで」「で」の前後文脈に明確な因果関係が見られない。むしろ、これらの接続詞は前の話の内容を踏まえて単に話を展開させる役割を果たしており、接続詞としての論理的な繋がりが弱くなっている特徴が観察される。これらの接続詞は、この意味においては「そして」「それから」に近い添加の意味を持っていると考えられる。

添加-促す

- (11) 幸:丸の内さ

琴:何んだか。むづかし。そふだね

幸:何さあれでも。女に懸ては。ばんばの忠太さ しかし菊さんとやらが。

能くしてやつて。くんなんせばいいが

こと:あの子はどふも。ちつと

幸:どふした

こと:ちつと。だから

幸:とは

こと:ちつと。うぬぼだから

幸:むむむそふらしいよ

こと:それでどふだらふか

幸:こまつた。

(『洒落本-南閨雑話』夢中山人 1773)

- (12) 無名齋「すべて肉食する動物の肉は他が食べてまづく、之に反して菜食する動物の肉は食べて結構です。」博物學者先生眞面目になつて講釋すると、わるごすい子供が反問した。「鴨は肉食もするのでしやう。」「さうです。」「それで旨いのは何う云ふもんです。」

(『太陽-肉食と菜食』無名齋 1895)

- (13) そいから、木津の大黒さんへさいて、お参りしとりました。きのえねの日です。灯心を売ってますねん。ああ、こないな細い、軽い商いしてるとこは駄目やと思て、そこから、今宮の恵美須さんのとこへさいて、方を変えたんで神さんを頼むのに、方ばかり変えてんね。で、どうした 七日目ほどにお扉が開きまして、恵美須さん、冠装束でお出ましになりまして、うん、こんにちただ今、お前に福を与えてあげる、お手をお出しと、物柔らかにおっしゃったよって、わたい、両方の手出しました

(『恵美須小判』曾呂利新左衛門(二世) 1908)

例(11)～例(13)では、「そこで」「それで」「で」は相手の話を促している。この中で、(13)のように単純に話の続きを求める場合や、(11)のように「あの子はうぬぼだから」という状況への対処法や意見を引き出す場合、あるいは(12)のように「鴨は肉食もする」が、「旨いのは何う云ふもんです」という矛盾点を指摘しつつ相手に説明を求める場合が見られる。

転換

- (14) はる「読本は何でも二編三編とならないじやあ面白く有ませんねへ。初編ばかりぢやあ。まだ真実の條がしれないから 治「左様さ。しかし今度は松亭一人で書たといふから。為永の様にやあいぐめへよ。まあ / \ 後でゆるりと見ねへ。

其処でもう昼だが。何ぞ甘ゑものでもあるか

(『人情本-花廻志満台(三編卷之上)』松亭金水 1837)

- (15) 『そりやア丁度可かつたね、何しろ然ういふ譯で頼まれたんだからね、お前さん知つてるだけ話して聞かせておくれな。』爛が出来たので、談話の中に手早く拵へた有合せの肴を添へて其まま寅さんの前へ置くと、替り目の銚子を取つて、『まアお一つ』寅さんは痛し痒しで、『あれ、これだから斷つたんだ。困るぢや

ねえか。』と頭を掻きのめす。金公は挨拶ぶりに、『なアにお前、那樣に言つてくれるほどの事は爲やしねえ。まア可いやな。一つ行きねえ。』『然うか。ぢやア折角何だから何だけれども、本當に飲つた跡だからほんの猪口だけにしてくんねえ。』と受けて下に置く。お幾は其儘金公の方へ注いで廻つて、『寅さん、そこで彼の矢野さんの方の談話は、』『うむ、處で何から話さう。』『全体彼家ぢやア何をして居るの。』

(『左巻』川上眉山 1901)

- (16) 『如何したんだ、一躰何爲に來たんだ。うむ？逐出されて來たのか。白井の語調は幾ど叱るやうである。』『否、那樣譯ぢやなくつて。私ね、躰が悪いものですから、それでお暇を戴いて來たの。兄様の傍で、當分養生をさして戴きたいのよ、可けませんか。』『可けない事は無いが……困つたな。俺の所には夜具は無し、米は無し、何うも困るぢやないか。』『可いのよ、私少し位はお錢を持つてゐますから。』『何所が悪いのだ、病氣でもあるのか。白井は太い眉根を寄せて、熟と妹の顔を凝視めた。』『大した事ぢやないけど、吭が悪いの。氣管支加多里とか謂ひますのだつて。』『それで、錢は幾干持つてるのだ。』『三圓と、それから小いのもござんすわ。』『其許藥代にも足りないぢやないか。娘は答も無くて、面映さうに墨々と兄の顔を眺めてゐる。

(『太陽—一腹一生』小栗風葉 1901)

- (17) 「そりや私にや分らないけど、男と生れたら誰れだつて世間に尊敬される身分にならなきや虚言なんでせう、貴下は一度も將來の事をお話しなさらんから分らないけど、全體どうなさるの、今日はそれを聞きたいのよ」「聞いてどうなさるんです」「少し私に考へがあつて」と、目に媚を呈した。「將來のことつて何も纏つた考へはありません、只今日社へ行つて織田の拙い原稿を賣付けやうと思つてゐるばかりで、跡は何が何やら眞暗闇です」「織田さんといへば、あの方もお困りのやうねえ、二三日前にも、もつとお金の取れる仕事はないかつて頼みに入らしたが、全くお困りのやうね、だから先生も大變同情なすつて、是非相當な職を見つけてやりたいと云つて被入やる。同じ様に學校を卒業なすつても、貴下と織田さんとは丸で反對ぢやありませんか、顔つきを見てもお話を聞てゝても分りますわ、織田さんは何故あゝ元氣がないんでせう、全くいた／＼しいわ」「しかしね、奥さん、織田は貴女方が思つて居らつしやる程くよ／＼してやしませんよ、あの男は自身の書いたものは一度だつと思つたことはないんです…で、私の將來を聞いてどうなさるんです」

(『何処へ(六)』正宗白鳥 1909)

例(14)～(17)では、「そこで」「それで」「で」はいずれも話を転じる役割を担ってい

る。例(14)では、読本についての話から「其処でもう昼だが」と、昼ご飯を食べることに関する全く新しい話題へ転換している。例(15)では、「そこで」を用いて酒を勧める雑談から「彼の矢野さんの方の談話は」と、一時的に脱線した後に本来の話題に引き戻している。例(16)では、「それで」によって「何所が悪いのだ、病気ででもあるのか」という話から、少し前に出てきた「私少し位はお錢を持つてみます」という話へ戻っている。例(17)では、「で」を使って相手の織田についての話を遮り、「私の将来を聞いてどうなさるんです」と元の質問(点線の部分)に戻す意図が明確である。

以上の分類に従い、「そこで」、「それで」、「で」の意味を次のようにまとめる。

表 2.1 近世後期および明治期の会話における「そこで」「それで」「で」の意味

近世後期(1751～1867) ⁷				明治期(1868～1912)					
				前期(1868～1889) ⁸			後期(1890～1912)		
	そこで (%)	それで (%)	で (%)	そこで (%)	それで (%)	で (%)	そこで (%)	それで (%)	で(%)
順接	33 (62.3)	87 (91.6)		77 (86.5)	11 (91.7)		49 (83.1)	129 (61.4)	7 (9.2)
追加	つけ 11 (20.8)	5 (5.2)		3 (3.4)	1 (8.3)		2 (3.4)	29 (13.8)	49 (64.5)
	え 0	1 (1.1)		0	0		0	31 (14.8)	12 (15.8)
転換	7 (13.2)	0		9 (10.1)	0		7 (11.9)	14 (6.7)	8 (10.5)
その他	2 (3.8)	2 (2.1)		0	0		1 (1.7)	7 (3.3)	0
合計	53	95		89	12		59	210	76

⁷ 近世前期と後期の区分は百瀬(2020:202)を参考にし、宝暦元年(1751年)を境としている。

⁸ 1890年の自由民権運動と明治憲法体制の成立によって明治期を前期と後期に区分されている。(国史大辞典・世界大百科事典 - ジャパンナレッジ

<https://japanknowledge.com/introduction/keyword.html?i=1932:~:text=さらに,明治時代を時期,ことが可能である%E3%80%82>)

表 2.1 によると、「そこで」「それで」「で」意味の変化はそれぞれ異なる様相を示している。

まず、「そこで」は近世後期からすでに「順接」「添加」「転換」の三つの意味が確認されている。明治期に入ると、「順接」の意味の割合が80%以上に上昇した一方で、「添加」の意味は20.8%から3.4%へと減少している。

「それで」については、近世後期から明治前期にかけて、主に「順接」の意味で使用され、「添加」および「転換」の意味は僅かである。ところが、明治後期になると、意味の分布に変化が現れ、「順接」の意味は依然として多いものの、前期と比べて30%以上減少している。これに対して、「添加」の意味は徐々に増加し、「転換」の意味も増加が見られる。単純な接続詞より談話標識の一種になっている。

「で」は「そこで」や「それで」よりも遅れて現れ、明治後期からの用例に見られ始める。出現し始めた頃から、「順接」「添加」「転換」の意味で使用されている。「添加-つけ加え」の意味での使用は主であるが、「添加-促す」および「転換」の意味も一定の比率が見られる。談話標識としての特徴も強く確認されている。

以上をまとめると、近世後期から明治期にかけての三つの接続詞の意味の変遷について、以下のような特徴が見られる。「そこで」は一貫して「順接」の意味が主で、「添加」と「転換」の意味は減少傾向にある。つまり、「そこで」が次第に「順接」を主な意味とするようになっていく。「それで」は、「順接」の意味が主でありながらも減少し、「添加」「転換」の意味は増加している。最後の「で」に関しては、明治後期に初めて確認され、主に「添加」の意味として使用されている。また、「それで」と「で」は「そこで」より、談話的な特徴が強い。

2.4 「で」の成立について

2.4.1 文法化とは

本節では、文法化の観点から「で」の成立を考察する。

文法化とは、語彙的な要素が文法的な機能を持つようになるプロセス、あるいは既に文法的な要素がさらに文法的になるプロセスを指す。文法化は歴史的な視点と共時的な視点の両方から研究されている現象である。歴史的視点では文法形式の源泉と変化の過程を調査し、共時的視点では統語的・談話語用論的現象として文法化を分析する(Lehmann:1995、Hopper&Traugott:2003、小野寺:2011、2014 等)。

本章では、序論で紹介した文法化理論の知見を統合し、特に Hopper&Traugott(2003)の語用論的機能の増大、主観化(subjectification)、間主観化(intersubjectification)、Lehmann(1995)の意味の漂白(semantic bleaching)、音韻的弱化(phonological attrition)といった指標として活用したい。また、Traugott&Dasher(2002)は「語用論的推論(pragmatic inferencing)」の概念を援用し、「それで」の意味拡張における推論機制の常規化過程

を分析する。このような理論的基盤により、「で」の成立を単なる音韻的省略ではなく、体系的な文法化プロセスの帰結として位置づけることが可能となる。具体的には、「それで」は次のような過程を経て、接続詞から談話標識へと変化していた。

- ① 「添加」「転換」意味の増加による「それ」指示性の減少（意味の漂白(semantic bleaching)）
- ② 「添加-促す」意味の拡大に伴う語用論的機能の増大
- ③ 「それ」部分の音韻的弱化(phonological attrition)
- ④ 主観化(subjectification)、間主観化の進行(intersubjectification)

これらのパラメータがどのように相互作用し、談話標識としての「で」を浮上させたのかを、2.3 節で収集したデータを用いて検証していく。

3.4.2 「それで」の文法化

本節では、「それで」が指示要素を失って「で」へと再編される過程を、形式の弱化と機能の拡張が交差する典型的な文法化事例であるという視点から整理し、その実証に不可欠となる 4 つの量的指標：指示性の減少(意味の漂白)、語用論的機能の増大、音韻的弱化、(間)主観化の進行を提示している。

指示性の減少(意味の漂白)

「それで」の意味の通時的変化によると、近世後期から明治前期にかけては、「順接」の意味は 90%以上の高い比率を維持しているが、明治後期になると約 60%に減少している。その代わり、「添加」の意味が約 30%まで増加している。特に、「添加-促す」の使用は以前の約三倍になっている。この意味の拡張の過程において、指示部「それ」の指示性の減少が生じていると考えられる。その減少の過程は次の用例を挙げながら説明していく。

指示詞「それ」の指示性の減少は段階的に進行したと考えられる。「順接」の用法では、「それ」は具体的な先行文脈の内容(主に理由・原因)を明示的に指示している。一方、「添加-つけ加え」の用法では、指示対象が先行文脈全体へと拡大し、「添加-促す」では話者交替を含む対話的状况へと拡張する。さらに「転換」の用法に至ると、「それ」は特定の談話要素ではなく、談話の流れそのものを漠然と指示するようになり、実質的な指示機能は極めて減少になる。

「順接」の意味に関しては、山本(2004)では「前件を的確に指示する必要」と、飛驒村(2005)では、「それで」は「因果関係を表す」時、「それ」指示部にも指示性が残

っている⁹と述べられている。例えば、例(18)に示すように、「それ」は「その時分鵠の鳥つて鶴に似た大きな鳥が澤山おり」という理由を表す先行文脈を指示する。このように、「それで」は文と文を繋ぎ、「原因-結果」という論理的な関係を明示している。

- (18) 昔はここらは大きな沼でね、その時分鵠の鳥つて鶴に似た大きな鳥が澤山おりね、それで鵠沼といふんですとさ

(『女学世界小説-まつかぜ』萩香 1909)

一方、例(19)「添加-つけ加え」、例(20)「添加-促す」および例(21)「転換」の意味では、「それ」の指示性がそれほど明確ではないと観察されている。

- (19) 自分は今死んでも残り惜くはない、魂は子供の頭に傳はつて、健次は男らしい大きな考へを持つてゐるから何時かはえらい學者とか政治家とかになると云つてたわ、」「諸岡の隠居にそんなことを話したのか、親爺の十八番だ、話の種が盡きるとおれのことを持出す、聞く奴も聞く奴だね」「でも平生とは話振りが異つて、何だか憐れつぽさうだから、私可笑かつたわ、それでね、諸岡さんがお突合に兄さんを褒めるとさも悦しさうだつたわ、病氣になつてからは、馬の話は立消えになつて、私達にまで、どうかすると、兄さんの話ばかりしたがるんだから變だわ」と云つて

(『何処へ(十三)』正宗白鳥 1909)

例(19)では、「でも平生とは話振りが異つて、何だか憐れつぽさうだから、私可笑かつたわ→それでね→諸岡さんがお突合に兄さんを褒めるとさも悦しさうだつたわ」という話の流れが示すように、「それ」は特定の一文脈を指示するのではなく、直前の発話内容を指している。その後、諸岡さんに関するエピソードを展開していく。この場合には、「それで」による前後の結びつきは「順接」のように強い関係を示しておらず、むしろ談話を展開させるための標識と言ってもよい。

- (20) 『私の身にもなつて考へても御覽下さい。若い時からむつかしいお姑様に好い程苦勞して、今日までまだかれこれと言はれましちや……………。』『ハイハイ、

⁹ 飛弾村(2005)は、因果関係を表す「それで」において指示部の「それ」に指示性が残存すると主張している。しかしながら、「場所(ところ+で)」を意味する「Xで」というプロトタイプの意味から拡張してきた「転換」と「添加」の意味における指示性の有無については論じていない。本研究では、「添加」「転換」の意味においても指示性が残っていると主張する。ただし、その指示性の度合いが異なる。

重々御尤。全く割の悪い御役なんで。』『まあ、瓢箪で鯰を押へる様な事ばかり被仰いますね。』『エエ。いづれ及ばぬ鯉の瀧のぼりなんで御座んすから。』『と、仰いますと？』『いいえ、少し咽喉が痛み出しました様ですのよ。あんまりお饒舌し過ぎました故でね。』『それで？』『ハイ御免遊ばせ、おや、また外でも私怒られて居りますよ。』

(『女学世界-姑の君の見てならぬ文字』 若い女 1909)

例(20)は「添加-促す」の意味を示している。話し手は「いいえ、少し咽喉が痛み出しました様ですのよ。あんまりお饒舌し過ぎました故でね」と相手の言い訳めいた発話を受けてから、「それで」で話を逸らそうとする相手の話を催促している。この意味では、「それで」は相手の話を指すうえでその続きを促しているが、文と文の論理的関係を示すというよりも、話者交替、情報要求という対人的な働きが主要である。

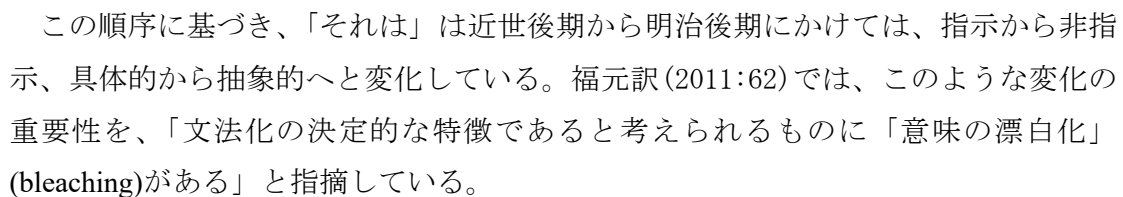
(21) 後に阿兼は唯一人、茫然として襟に顔を差入れて、越かた行末の事ども思ひ續け、さるにても疎ましと思ひ居たりける宮川は日毎に來りて我を訪ひ慰むるに、二世と契つたる中村は唯の一度も音信だにせざる而已かは、新橋あたりの浮れ女を伴ひて西京に赴きたりとは何事ぞやと流石世間知らずの娘氣に恨みつ悔みつ泣より外の事ぞ無き。折から小僮の千吉は大きらかなる風呂敷包を重さうに背負ひて歸り來り『阿兼様、針箱だか何だか知らねエが此通り滅法に大きな包を渡されて重くツて重くツて困りましたぜ』と風呂敷包を卸せば。阿兼は『オー千吉や御苦勞であツたなう…それで私の手紙は誰が取次ましたネ』

(『太陽-夜の鶴(下)』 福地桜痴 1909)

例(21)では、話し手は「それで」を使って話を転じている。「それで」は『阿兼様、針箱だか何だか知らねエが此通り滅法に大きな包を渡されて重くツて重くツて困りましたぜ』『オー千吉や御苦勞であツたなう…』という先行の談話を一旦締めくくり、後の手紙の受け渡しという新しい話題を導入している。「ところで」に近い意味として使用されている。この「転換」の意味では、「順接」「添加」と比べて後続文脈と先行文脈との関連性が最も薄く、「それ」は特定の談話要素ではなく、談話の流れそのものを漠然と指示するようになっている。

当初、指示詞「それ」は「それ+で」の構成要素として具体的な指示対象を持ち、実質の意味を保持していた。その後、接続詞「それで」の構成要素として、「順接」の意味では直前の理由を表す文脈を指すようになっている。また、「添加」の意味では、「それ」はより広い文脈を受け入れ、文と文の関係性が弱くなっている。さらに、「転

以上の分析をまとめると、「順接」「添加-つけ加え」「添加-促す」「転換」の意味には、それぞれ指示部「それ」の指示性の度合いが異なることがわかる。具体的には、強いものから弱いものへと並べると、次のようになる。



「順接」の意味においては、「それで」は本来、客観的因果関係を標示する接続詞であるが、例(22)、例(23)のように近世後期では話者が交替する位置に現れ、聞き手に推論を促す役割を担う用例が見られる。

- 37

幸：ををこわまだ。ぬしのうへに。上手かへ。ほんに。おそろしい。まつげの御用心 / \

琴：あいわつちらは。きのふ爰へ。きいした。山だしの。さるだから

幸：夫で。人を。ひつかくのか

(『洒落本-南閨雑話』夢中山人 1773)

- (23) 源「そんなら斯だと小ごゑになり「伝兵へめが指てゐる脇ざしは雲竜丸といふ名剣で世に二ふりとはない名作みどもが先祖什来の宝なれども貧にはかなはず五十両の入用で抛なく伝兵へに預けて金を借うけたがその後金の才覚出来ず流れ月もきれたゆへ伝兵へが指料にといふに是非なく其意に任した。奇妙な事にはあの刀血をぬるときは忽に。大雨降とのいひ伝へ二人「ははあ夫であのとき急にふり出したのかね

(『人情本-恋の花染』松亭金水 1833)

例(22)と例(23)では、聞き手の幸と二人は、話し手の琴と源からの「あいわつちらは。きのふ爰へ。きいした。山だしの。さるだから」、「あの刀血をぬるときは忽に。大雨降とのいひ伝へ」という情報を用い、「人を。ひつかくのか」、「あのとき急にふり出したのかね」という結果を推論してきた。

また、明治期に入ると、同じような用例も見られる。

- (24) つや：いいえ、此頃はもう砂利押しはよして、銅山の飯場や鐵道の普請場へ果物やお菓子の觸賣に行くんですよ、毎日廿錢位宛儲けて來ますわ、感心でせう。

伍六：むむ。

つや：其れからまだ感心なのはね、毎日商賣を仕舞つて歸つて來ると、降つても照つても業に掛けて屹底水垢離取りに行く事なの、私これにやア我を折つたわ、眞似が出来ないともツて。

伍六：何のために其様開けねえ眞似をするんだ。

つや：お祖母さんの生きてるうちに是非お父さんが歸宅つて呉れるやうにツて、左様言つて水垢離取ツちやア不動さまに願を掛けるんですツて。

伍六：むむ、左様か其れで不在のか――。

(『太陽-銅山王』佐野天声 1909)

この例では、伍六とつやは廣吉という人物の行方について話している場面である。伍六は廣吉の行方とつやに聞いた。つやは「お祖母さんの生きてるうちに是非お父さんが歸宅つて呉れるやうにツて」「水垢離取ツちやア不動さまに願を掛ける」と答

えた。そこで、伍六はこれらの情報を利用して「其れで不在のか」という結果を推論した。

また、表 2.2 によると、近世後期から明治後期にかけて「促す」の意味は 1.1%から 14.8%へと増加し、「転換」の意味は出現し始めている。これらの意味の増加によって、話者の交替、転換の予告を示すマーカーとして語用論的機能の増大の傾向が確認できる。

- (25) ぐつと寐込んで眼が覺めた時は彌生の空が朗らかに晴れ渡つて勝手口に主人夫婦が巡查と對談をして居る時であつた。「それでは、ここから這入つて寢室の方へ廻つたんですな。あなた方は睡眠中で一向氣がつかかなかつたのですな。」「ええ」と主人は少し極りがわるさうである。「それで盜難に罹つたのは何時頃ですか」と巡查は無理な事を聞く。

(『吾輩は猫である(第五卷)』夏目漱石 1905)

この例は、話者が眠りから覺めて、家の主人夫婦が巡查（警察官）と對談している場面を描写している。会話内容から、家に泥棒が入ったことがわかる。主人は「ええ」と返答して発話権を譲った後に、巡查は「それで」によって情報要求を行い、同時にターンを主人へ返している。「それで」は、現在の話者が自分のターンを譲る準備ができていることを示す装置と言える。

- (26) 兄様の傍で、當分養生をさして戴きたいのよ、可けませんか。『可けない事は無いが……困つたな。俺の所には夜具は無し、米は無し、何うも困るぢやないか。』
『可いのよ、私少し位はお錢を持つてゐますから。』何所が悪いのだ、病氣でもあるのか。白井は太い眉根を寄せて、熟と妹の顔を凝視めた。『大した事ぢやないけど、吭が悪いの。氣管支加多里とか謂ひますのだつて。』それで、錢は幾千持つてるのだ。

(用例(16)の一部の再掲)

この例は、妹が病になったので、兄の家で養生したいという話である。「少し位はお錢を持つてゐます」→病氣の話→「それで、錢は幾千持つてるのだ」という流れのように、「それで」は話者交替だけではなく、話が変わることを示している。Schiffrin(1987)では、談話標識の"so"を同様な分析を行っている。

- (27) Henry: g. So:eh.....but we buy beer and...cake and that's—we spend
it out of our own money.

h. So:eh:

Debby: i. So, when Henry's gone, what do you do?

(Schiffrin1987:219)

Schiffrin(1987)の分析では、Henry は"so"を 2 回使って潜在的な話者交代の位置をマークしている (g と h)。最初の使用後、Debby は話し始めなかったため、Henry は"but"を使って現在の話題と以前の話題(カードゲームで出される食べ物)を結びつけることで話者の立場を維持している。彼が 2 回目に"so"を使用した時 (h)、Debby は話者の立場を引き継ぎ、質問を投げかけた (i)。Debby の「それで」の使用は、話題の転換だけでなく、参加者の転換もマークしている。

以上で分析のように、「それで」の意味の使用の拡大とともに語用論的機能の増加も見られている Traugott&Dasher(2002)のいう「語用論的推論(pragmatic inferencing)」がその背後にある文法化の原因として位置づけられる。

音韻的弱化

続いては、「それで」の音韻変化をみよう。文法化の進行に伴い、語彙項目は音韻的に縮小・弱化する傾向がある。明治期には、「それで」の異形として「そいで」、「ほいで」という用例が確認されている。この現象は、文法化過程において一般的に見られる変化パターンである。例えば、英語では、"be going"という表現「慣用化(routinization)」や「慣習化(idiomatization)」によって、段階的なプロセスを経て"be gonna"になっている(Hopper&Traugott:2003)。

同様に、「それで」の使用に伴い、音韻の消耗が生じ、指示性の減少も起こっている。

(28) 今、親類が寄って、相談しとおるところやさかい、いずれお前を、ひかすつもりやい。若旦那、ほんまでやすのんか。しれたこと。嬉しやの。ひかしてもうたら若旦那、あの辺に、傍のおかんみたいに、ねえやんとこの二階に、ちょろっと居候みたいな、あんなことしてるの、やっぱりきらいやさかい、じきに家を借ってもうて、おなご二人使うて、大事おまへんか。しれたこっちゃがな。嬉しやの。ほいで、芝居やみな変わるたんびに、やっとくれやすやろな。

(『煙管返し』桂枝雀(初代)1909)

(29) なーるほど、そいつアあどうも、面白いねエ。じゃあ何かい、もぐらが、一匹や二匹じゃねえんだねエ。大変に、まアどうもねエ、エーまア、五・六匹いるんだが、それが先代萩をするが、そのうちにねエ、エーこの床下てえのはみもんだそうさ。フーン、床下? なーるほど。どうも、そりゃあねエ、エー実にこのお前

さんねエ、ポーンとじから飛び出すんだ。こいつは、まァどうも、芝居でやるようなもんでねえや。なーるほど、そいつは面白いねエ、レージッテンかしら。そいでねエ、エー何でも二匹の方は、エー、もぐらがその、團蔵の声色をうてえんだ。

(『動物園もぐら芝居』三遊亭圓右(初代)1911)

用例(28)における「ほいで」は、関西方言での「それで」の弱化形である。この変化では、まず語頭の歯茎摩擦音/s/が声門摩擦音/h/へと弱音化する。次に、/r/の子音が完全に脱落し、音節構造が簡略化される。さらに、中前舌母音/e/が高前舌母音/i/へと上昇する母音の狭窄化が起こる。この母音上昇では、舌の位置がより口蓋に近づき、口の開きが小さくなるため、発音の労力が減少できる。

発話文脈を見ると、「ほいで」は明確な因果関係を示すのではなく、話題展開の標識として機能している。先行文脈「家を借ってもうて、おなご二人使うて」と後続文脈「芝居やみな変わるたんびに、やっとかれやすやろな」の間には直接的な論理関係はなく、むしろ話者の意識の流れを示す添加的機能が前景化している。

用例(29)では、江戸語における「そいで」は [sore-de]→[soi-de] という中間段階の音韻弱化を示している。語中の[re]音節が[i]に融合し、音節数の減少(3音節→2音節)が生じている。この変化は、調音の経済性原理に基づく自然な音韻変化として説明される。

文脈分析では、「そいで」が落語という口語性の高いジャンルで使用されていることが注目される。落語における「そいで」の高い使用率(28.9%)は、この形式が日常会話レベルでの談話管理に特化していることを示している。また、「そいでねエ」という形で間投助詞「ね」と共起していることは、聞き手への注意喚起機能が前面化していることを表している。

(間)主観化

「主観化とは、もともと単に客観的な意味を示していた語が、語が用いられる歴史の中で、次第に話者自身の主観的判断・観点・意味を表すようになる意味の発達のことである。間主観化とは、主観化を基盤にして、さらにコミュニケーション(相互作用)の中で用いられる機能・意味を帯びていく変遷を指す」(小野寺 2011:75)。小野寺(2011:75-81)は英語の"because"を間主観化の例として挙げている。「原因を表す従属接続詞」は基本的な用法であるが、徐々に文頭に立って独立した談話標識"cos"として「話し手の主観的意味と「自分の話順が継続していることの主張」を表すようになっていく。

次には、この概念を用いて「それで」の意味の(間)主観化を検討してみる。

近世後期において、「それで」は主に客観的な因果関係を示すのに用いられているが、明治期に入ると、「添加」「転換」の意味への拡張は、単純な接続詞から談話標識への変化を示している。用例(30)のように、「添加」の意味には、述べられている事柄が客観的な事実であるが、その語る順序が話し手によるものである。さらに、「それで」は「ね」と共起し、相手の注意を喚起する意味を帯びている。

- (30) 私はソツトあしたとか都へ嫁入る友の事思ひ出して縫ひさしの針を止めて店の格子の合間からきつと見る、前の八百屋の御内儀さんが店の御客をつかまへて、
『財産は有あまるほどあるですとさ、それでね姑はなし、小姑はなしで、まだ陸軍の大學校とかへ通つてゐるんですとさ、だからあの娘子さんは幸福でさあね』

(『女学世界-さもしい心』もみじ 1909)

「転換」の意味では例(31)のように話し手が主観的判断で話題を転換しながら、同時に聞き手に予告を送ることで談話の円滑な進行を促進している。

- (31) 後に阿兼は唯一人、茫然として襟に顔を差入れて、越かた行末の事ども思ひ續け、さるにても疎ましと思ひ居たりける宮川は日毎に來りて我を訪ひ慰むるに、二世と契つたる中村は唯の一度も音信だにせざる而已かは、新橋あたりの浮れ女を伴ひて西京に赴きたりとは何事ぞやと流石世間知らずの娘氣に恨みつ悔みつ泣より外の事ぞ無き。折から小僮の千吉は大きらかなる風呂敷包を重さうに背負ひて歸り來り『阿兼様、針箱だか何だか知らねエが此通り減法に大きな包を渡されて重くツて重くツて困りましたぜ』と風呂敷包を卸せば。阿兼は『オー千吉や御苦勞であツたなう…それで私の手紙は誰が取次ましたネ』

(用例(21)の再掲)

最も間主観化を反映するのは「促す」の意味である。まず、全ての「促す」用法は相手に対する情報要求であるため、間主観化していると言える。また、用例(32)、(33)では、相手の話を促すより、話し手の「苛立ち、怒り、非難」といった態度が読み取れやすい。

- (32) 卅歳餘の色の生白い薄い頬髭の、意氣地のなささうな書生が袴を着けて現れたが、「今日はね、湯に入るから、辰に然いつて水を汲んでおけつて。」と男は更に縮つ毛に向ひ「私は芝居よりか、那のくらゐの俳優になれば、屹度變つた處があるだらうと思つたんだ。一藝に秀づるものは、何でも何處か注意すべき處

があるに違ない……………」。「それはチヨボクレ乃至法界節と雖も、苟も一藝に秀づる以上は、其相應の天才は持つてゐるのさ。」「だから私は、總て然いつたやうな人は尊敬するんだよ。」と白鳩男は身を反した。「其れで何なんだ、團十郎は面白かつたのか。」

(『読売新聞-後の戀』徳田秋声 1901)

- (33) 『何をお爲なんだよ。』と、お瀧も覺えず聲を怒らした。『酒を浴びる位は愚な事ツた。亭主の顔へ泥を塗やがツた、其罰だともつて往生しやアがれ。』『エツ、何ですツて。亭主の顔へ泥を塗つたとお云ひのは、私にお云ひなのかい。』『あたりめへよ。』『私がお前さんの顔へ泥を塗つたつて。それで何かい、お前さんは其で如何も爲ないのかい。泥を塗つた女房ならお前さん…。』

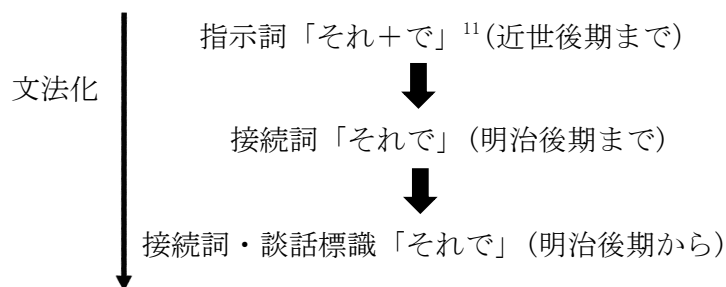
(『太陽-櫨紅葉』広津柳浪 1901)

「それで」に対して、「そこで」は反対の傾向を示している。近世後期と比べ、明治後期では「順接」の意味は増加するものの、「添加」「転換」の意味は減少している。つまり、非指示的から指示的、抽象的から具体的へと変化している。これは「それで」の変化方向とは逆になっている。つまり、「文法化の決定的な特徴」としての「意味の漂白化」が見られない。また、データを観察した限りで、「そこで」に音韻的弱化が確認されていない。

このような使用状況では、指示部「そこ」の脱落が生じにくく、「で」の成立の可能性も低いと考えられる。また、「それで」と「で」には「促す」の意味を持っているが、「そこで」にはない。このことから「そこで」ではなく、「それで」と「で」の意味的な連続性が窺える。

2.4.3 「それで」の文法化のプロセスと「で」の成立

2.4.2 節で論じた内容をこの節でまとめて「で」の成立について述べる。接続詞「それで」の文法化の過程は次のように示している。



¹¹ 指示詞「それ+で」から接続詞「それで」への変化については、百瀬(2020)を参考された。本研究は「で」の成立を論じることを目的とするため、その部分の議論は扱わない。

「で」が成立

「で」の成立は、接続詞化の一般的パターンである「文法化の一方向性」(unidirectionality hypothesis) (Hopper&Traugott:2003)に沿うものと考えられる。すなわち、指示詞の脱落は単なる音声的な省略ではなく、意味機能の変化に伴う構造的再分析の結果である。特に「添加」「転換」の意味においては、談話標識としての機能が前面化し、音韻的弱化の発生および指示詞部分が意味的に冗長となったことで脱落が促進されたと考えられる。

2.4.4 「そこで」「それで」「で」の使用ジャンルと男女差

前節では、意味の変遷から「で」は「それで」から派生した可能性について論じた。本節では、「そこで」「それで」「で」の使用におけるジャンルと男女差に関する観察を通して、この「で」は「それで」から派生したという仮説をさらに裏付ける。

本節で実施したコーパス調査の結果によれば、「で」は「そこで」との差異と「それで」との類似性が観察されている。具体的な結果は表 2.3 に示している通りである。

表 2.3 明治期の会話における「そこで」「それで」「で」の出現ジャンル

	そこで(%)	それで(%)	で(%)
文芸 ¹²	43 (29.1)	164 (73.9)	44 (57.9)
非文芸	100 (67.6)	21 (9.5)	10 (13.2)
落語 ¹³	2 (1.4)	27 (12.2)	22 (29.0)
国語教科書	3 (2.0)	10 (4.5)	0
合計	148	222	76

近世後期において、「そこで」と「それで」は洒落本や人情本といった風俗小説の会話文で使用が確認される。しかし、明治期に入ると、これら二つの接続詞が出現するジャンルに顕著な差異が生じるようになった。「そこで」の用例の約 68%は非文芸ジャンルに集中しており、特に落語における出現頻度は極めて低い。このことから、「そこで」は比較的硬い表現として用いられていたことが示唆される。この点について、

¹² 「芸分野(小説、戯曲、詩歌など)かそれ以外(論説、エッセイ、報道など)かによって、「文芸」と「非文芸」の情報がそれぞれ付与されている」。(「中納言」検索インターフェースより引用:<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/chj-interface.html>)

¹³ 音声言語としての落語は、書記言語である小説などとは異なる振る舞いを示すと考えられているため、日本語歴史コーパス(CHJ)の分類に従い、落語を独自のジャンルとして独立させて分類している。

大久保(2018)も、近代以降の「そこで」が「ある種の『かたさ』を持った表現として捉えられていた」と指摘している。対照的に、「それで」は主に文芸ジャンル、特にカジュアルな文脈で使用される傾向がある。近藤(2021)は、明治・大正期における順接の接続詞と文章ジャンルの対応関係を検討し、「それで」および「で」が主に会話で使用され、強い話し言葉の性格を有することを明らかにした。これに対し、「そこで」は主に口語体の地の文で使用され、書き言葉と話し言葉の中間的な性格を持つと結論づけている。

このような背景を踏まえると、「そこで」は硬い表現としての性格から、「それで」に比べて意味の漂白化、音韻的弱化、語用論的含意の発生といった変化が比較的に起こりにくいと考えられる。一方、「それで」は主に文芸作品中のカジュアルな文脈で使用されるため、文法化が進行しやすい環境にあったと推察される。

次には、「そこで」「それで」「で」の使用の男女差から検討する。

表 2.4 近世後期および明治期の会話における「そこで」「それで」「で」の使用の男女差

	男性	女性	不明	合計
近世後期				
そこで(%)	45(84.9)	8(15.1)	0	53
それで(%)	40(42.1)	55(57.9)	0	95
明治期				
そこで(%)	142(96.0)	4(2.7)	2(1.4)	148
それで(%)	151(68.0)	69(31.1)	2(0.9)	222
で(%)	59(77.6)	14(18.4)	3(3.9)	76

表 2.4 に基づくと、近世後期において「そこで」は女性による使用例も確認されるが、明治期に至るとその使用はほぼ男性に限定されるようになる。一方、「それで」は、明治期において男性の使用率が近世後期に比べて増加するものの、女性による使用も全体の約 30%を維持している。同様に、明治期の「で」も男性による使用が多数を占めるが、女性による使用も約 20%に達している。これらの観察から、「それで」と「で」は男女双方に用いられる表現であるという点で共通の傾向を示しており、これは「そこで」の使用実態とは異なる様相を呈している。こうした性差における分布の類似性は、「で」が「それで」から派生したという仮説を支持する間接的な証拠の一つと見なすことができよう。

2.4.5 まとめ

本節では、接続詞「で」の成立が、「それで」の文法化の結果であるという仮説を提示した。具体的には、指示性の減少（意味の漂白化）、語用論的機能の増大、音韻的弱化、そして（間）主観化の進行という四つの指標に基づき、「それで」が接続詞から談話標識へと変化する過程を論じた。そして、この一連の変化を通じて「で」が派生したと考察し、特に指示性の減少と音韻的弱化がその主要な駆動要因であったと結論づけた。

2.5 接続助詞「で」を起源とする仮説の検討

『日本国語大辞典(第二版)』(2003)によると、「で」は接続助詞として原因・理由を表すことができる(例(34))。この用法は格助詞「で」の理由・根拠を示す用法から転じたものであり、近世に現れる。

(34) 浄瑠璃・心中二つ腹帯〔1722〕三「お暇が出たで去にまする」

滑稽本・浮世風呂〔1809～13〕二・下「こなたが能く流して呉たで、さっぱり仕ました」

接続助詞「で」は文頭に置かれ、接続詞として自立することが十分あり得る。このような「接続助詞→接続詞」という変化のプロセスは日本語の接続表現の歴史的発達においてはこれまで多くの研究者によって指摘されている。たとえば、青木(2023)では、接続詞「けれども」「が」「ところで」の成立について論じている。

まず、接続助詞「けれども」(例(35))は形容詞の已然形語尾「けれ」+接続助詞「ども」が異分析(*metanalysis*)されて生じた。この異分析によって生じた接続助詞「けれども」は終止連体形に続く形となったため、「あるまいけれども」のような表現が「あるまい。けれども」としてさらに再分析(*reanalysis*)される現象が生じ、例(36)のように接続詞として文頭に立つようになっている(p. 140)。

(35) 父子相食トハ父ヲ殺シ子ヲ殺シテ食ゾ。サハ有マイケレドモ民ヲ恵ン為ゾ

(青木 2023:140)

(36) いつぞはお屋敷へ御見舞申したう存じました。けれども、何かと打ち過ぎました

(青木 2023:140)

また、接続助詞として成立した「が」(例(38))は、主格助詞「が」(例(37))から転じてきたものである。そして、「けれども」と同様に、「が」の前接部分が終止連体形

であるため、「「ありけるが…」は「ありける。が…」へと、発話の中で容易にシフトしうる」(青木 2023:141)。その結果、例(39)に示されているように、「が」は文頭で接続詞として用いられるようになっている。¹⁴

(37) 見も知らぬ花の色いみじきが、咲きみだれたり

(青木 2023:140)

(38) 女二人ありけるが、姉は人の妻にてありける

(青木 2023:141)

(39) 「出かしまして御ざる。」が、人といふものは見たと違ふて、心ばえのつゝとぶしやうな者が有る物じゃ

(青木 2023:141)

さらに、青木(2023)は「ところで」の例も挙げている。「ところ+にて」(例(40))から変化してきた接続助詞「ところで」(例(41))の前接部分も連体終止形のため、文頭に位置して独立した接続詞「ところで」(例(42))が成立している。

(40) 船に乗るべきところにて、かの国人、馬のはなむけし

(青木 2023:141)

(41) 然ればこの宝は国王に捧げうずるものぢやと云うたところで、シャント大きに驚いて

(青木 2023:141)

(42) シタレバ星ガ落テ五十三デ諸葛亮ガ死ダゾ。處デ司馬宣王ガ取タゾ

(青木 2023:141)

青木(2023)の分析から、「連体終止形+接続助詞」という配列は構造的に再分析によって新たに接続詞として解釈されやすいことがわかる。したがって、例(34)では、「お暇が出たで…」「流して呉たで…」の形が「けれども」「が」「ところ」のように、「お暇が出た。で…」「流して呉た。で…」の形に再分析されるのも一見妥当に思われる。しかし、ここに問題点があると考えられる。それは接続詞「で」には意味の連続性が見られないという点である。

「けれども」「が」「ところで」は接続詞への変化の過程で、その位置が文末から文頭へと移動している。にもかかわらず、その意味の連続性は保たれていることが確認できる。接続詞化した初期段階の「けれども」「が」「ところで」はそれぞれ元の逆接

¹⁴ 山口(1999:124-125)では、接続詞「が」は「「ところが」「ぢやが」「したが」「するが」「あるが」などの熟合による接続詞的用法は、このようにさらに簡略な形式のそれをも無理なく成立させるための地ならしの役目を果たしたと見てよい。」

(例(36))、逆接(例(39))、原因・理由(例(42))の意味をしばらく維持している。

この現象は Hopper&Traugott(2003:96)では、「保持化」(persistence)と呼ばれており、文法化においては重要な特徴である。

In other words, when a form undergoes grammaticalization from a lexical to a grammatical item, some traces of its original lexical meanings tend to adhere to it, and details of its lexical history may be reflected in constraints on its grammatical distribution.

つまり、ある形式が語彙項目から文法項目へと文法化される過程において、元の語彙的意味の痕跡がそれに付着する傾向があり、その語彙的な歴史の詳細がその文法的分布における制約に反映されることがある。

一方、「で」の用例を検討すると、明治 34 年の会話文に見られはじめ、その初出例は添加の意味に近い(例(43))。さらに注目すべきことは、明治 34 年から明治 44 年までの 10 年間における 38 例中、因果関係の意味が読み取れるのはわずか 3 例のみである。これは極めて低い割合といえる。仮に接続詞「で」は接続助詞から転じたものであれば、成立当初から原因・理由を表す本来の意味を完全に喪失することは考えにくい。すなわち、接続詞「で」の成立については、「格助詞(原因・理由)→接続助詞(原因・理由)→接続詞(原因・理由)→接続詞(順接・添加・転換)」というプロセスが妥当であるべきだが、「接続詞(原因・理由)」というセグメントが欠けている。このような意味の不連続性は、「で」の接続詞化においては、接続助詞「で」からの派生という経路を想定されにくいと考えられる。

- (43) 不圖立どまつて聞いて居ると、伯母の聲として、「未だ若い、若い、如何しても手習は嫌と云つて草紙を川に投げ込むだ頃の様子が見へるよ。未だ未だ、如何して世の中は、其様な事ぢやいけませぬ。今些頭が下る様にならなくては、いけませぬ。泳ぎの上手は川で死ぬ、で氣象者は氣象で却て失策ります」と云つて、何やら母の背でも撫でた様だつた。

(『思出の記(二の巻(二))』徳富蘆花 1900)

この初出例における「で」は、先行文「泳ぎの上手は川で死ぬ」と後続文「氣象者は氣象で却て失策ります」を接続する機能を果たしている。しかし、両文の間には明確な因果関係というよりも、むしろ類似の事例を並列的に提示する「そして」や「また」に近い、添加の含意が強いと解釈される。仮に接続詞「で」が接続助詞「で」から派生したとすれば、原因・理由を表す意味が優勢であると予測されるが、実際の用例はそうっていない。成立初期(明治 34 年～明治 44 年)の「で」の用例を見ると、

「順接」の意味が3例であるのに対し、「添加-つけ加え」は23例、「添加-促す」は7例、「転換」は5例という分布を示している。

以上の分析結果は、接続詞「で」が接続助詞「で」から直接的に派生したとする従来の見解よりも、本研究が提唱する通り、「それで」の指示部分「それ」が脱落することにより成立したとする解釈の妥当性が高いと思われる。

2.6 結論

本章では、近世後期から明治期にかけての会話資料を利用して「そこで」「それで」「で」の用例を意味的に分析した。その結果、三語の歴史的推移は一見似通っているようでいて、実際にはまったく異なる軌道を辿っていることが明らかになった。すなわち、「そこで」は近世後期から一貫して因果関係を示す「順接」の意味を維持し、明治期にはむしろ硬い書き言葉的な接続詞として定着した。一方、「それで」は当初こそ「そこで」と同じ因果用法が中心であったが、明治後期になると話をつけ加える用法、聞き手に発話継続を促す用法、さらには話題を転換する用法へと急速に意味領域を拡張し、その過程で①指示詞部「それ」の指示性の漂白、②話者交替・話題転換を担う語用論的機能の増大、③「そいで・ほいで」に見られる音韻的弱化、④主観化・間主観化の進行が段階的に観察された。

こうした談話標識化の最終段階として、明治後期には指示詞部が脱落した新形式「で」が出現する。成立当初の「で」は「順接」の意味よりも「添加」・「転換」の意味が優勢であり、その意味分布・ジャンル分布・男女差はいずれも「それで」と連続している。このため、「それで」の談話標識化にともなう音韻的短縮と再分析によって「で」が生じたと考えるのが最も整合的と考えられる。

本章の分析は、談話標識化が新たな接続詞形式を生み出す具体的メカニズムを、歴史コーパスに基づいて実証した点に意義がある。また、硬くて指示的な「そこで」と、談話的・主観的機能を強めた「それで・で」との対比は、同一系列に属する接続詞が社会的・文体的要請に応じて分化していく様相を端的に示している。今後は、大正・昭和以降の「で」の更なる拡張の様相を考察していきたい。

第3章大正・昭和前期における接続詞「で」の拡張について

3.1 はじめに

前章では「で」の成立を接続詞「それで」からの派生経過を論じた。そこで、本章では大正・昭和前期へ焦点を移し、この東京語の定着期¹⁵においては、「で」はどのような拡張が見られるかを観察していきたい。

本章の構成は次のようになる。3.2 節で先行研究とその問題点を述べる。3.3 節で調査方法と調査の結果の分類を述べる。3.5 節で「で」の拡張の実態を考察する。3.6 節で結論を導く。

3.2 先行研究とその問題点

現代日本語における接続詞「で」に関する研究は、言語習得や談話の意味・機能、あるいは類義語との意味・機能の比較といった観点から挙げられる(参照: 深川:2007、2009、宇佐美:2013、梶本:1994、高橋:2001、権景姫:2003、石島・中川:2004、山本:2004 など)。

一方、近代日本語における接続詞「で」は、その多岐にわたる機能にもかかわらず、これまでの研究において必ずしも十分な光が当てられてきたとは言えない。例えば、近藤(2021)は明治・大正期の書き言葉における文体・語彙変遷の研究において、「で」を順接の接続詞の一つとして分析対象に含めている。また、川島(2024)も大正から昭和前期の演説を対象とした接続表現の使用状況調査で、「で」を順接の接続詞として扱っている。これらの研究は「で」の機能の一側面を捉える上で重要であるが、第2章で明らかにしたように、明治期の会話資料において、「で」は単なる因果関係の表示(順接)に留まらず、相手の発話を促す「添加-促す」の機能や、話題を転換する「転換」の機能など、談話展開を円滑に進めるための多様な側面を既に有していた。このように、「で」が持つ談話標識としての多機能性は、上記の先行研究においては主要な分析対象とされてこなかった傾向がある。

このような研究状況を踏まえ、大正・昭和前期において、明治期に見られた「で」の多機能性がどのように維持され、あるいはどのような「拡張」を遂げたのかを具体的に明らかにすることは、先行研究の知見を補い、接続詞「で」の歴史的変遷と機能の全体像をより深く理解する上で重要な課題と言える。そこで本章では、大正・昭和前期の会話資料を中心に用い、明治期以降における「で」の意味・機能の拡張の様相

¹⁵ 東京語の成立期(明治元年から明治三十七年三月まで)、東京語の定着期(明治三十七年四月から昭和二四年三月まで)標準語の時代、東京語の展開期(昭和二四年四月から)共通語の時代(飛田良文 1992:5)

を考察することを目的とする。

3.3 調査方法と分類

本章では、『日本語歴史コーパス』(CHJ)および『昭和・平成書き言葉コーパス』(SHC)¹⁶を利用して大正・昭和前期会話における接続詞である「で」が含まれる用例を収集する。検索方法は以下のように指定した。

大正時期
書字出現形:で
短単位の条件の追加:品詞の大分類が接続詞
時代名:大正 本文種別:会話 文体:口語 前後文脈の語数:200
結果:280 研究対象範囲内:202
昭和前期
書字出現形:で
短単位の条件の追加:品詞の大分類が接続詞
成立年:1933、1941 本文種別:会話 前後文脈の語数:30
結果:79 研究対象範囲内:78

上記の方法で収集した用例については、第2章の2.3節で示した分類基準を適用し、「順接」「添加」「転換」の3類に分けている。

順接:先行部と後続部には因果関係があり、先行部を条件、後続部をその帰結としている。

添加:先行部と後続部には因果関係が見られず、先行部の内容をふまえて後続部で関連する情報を述べる。話し手自身が情報を付け加えたり、または対話者からより情報の追加を促したりする場合がある。

転換:先行部と異なる内容が後続部で続く。

その他:分類が難しい用例や、いずれのカテゴリーにも属さない特殊な用例

¹⁶ 当初は『昭和話し言葉コーパス』(SSC)を利用して調査データを収集する予定であったが、昭和後期のデータのみを収録されている。そこで代替手段として、『昭和・平成書き言葉コーパス』(SHC)を利用し、その中の会話文に出現した「で」の用例を収集した。また、『日本語歴史コーパス』(CHJ)において昭和期を指定して検索を行ったが、該当する用例はわずか4例のみであり、さらにそれらはいずれも会話文ではなかった。

3.4 調査結果

3.3 節で収集した「で」の意味を次のようにまとめている。

表 3.1 明治期・大正期・昭和前期の会話における「で」の意味

		明治期 (%)	大正期 (%)	昭和前期 (%)
順接		6 (7.9)	22 (10.9)	6 (7.7)
添加	つけ加え	50 (65.8)	86 (42.6)	35 (44.9)
	促す	12 (15.8)	67 (33.2)	30 (38.5)
転換		8 (10.5)	26 (12.9)	7 (9.0)
その他		0	1 (0.5)	0
合計		76	202	78

表 3.1 で示したように、大正・昭和前期において「で」の意味の使用の分布に大きな変動は見られないものの、「添加-促す」の意味は増加傾向にあることが確認できる。この用法は「添加」意味全体のほぼ半数を占めるまでに至っている。このことから、「で」は明治後期に成立し、その後短期間のうちに使用が変化したことがわかる。分類した意味の代表例は次の通りである。

順接

- (1) 松子は肉筆の扇子を開いて悦んだが、暫時して其を下新の女に與へた。信一は切角の贈物を無造作にする故一寸變な顔になつた。一跡で松子は「女中二人なのに、阿米さん丈けにでは、惡うムんすわ。で、妾の分を代りにしときました」と曰ひ、厚意から左うしたのであつた。

(『無限抱擁-一の一四』瀧井孝作 1921)

この例では、先行する「女中二人なのに、阿米さん丈けにでは、惡うムんすわ」という状況・理由を受けて、その結果としての行動「妾の分を代りにしときました」を導いており、因果関係を示しているため「順接」と判断した。

- (2) 家の近所まできたとき、結婚といへば式を挙げなければならぬと氣がついた。で、雜貨屋へとび込んで一式揃へさせ、一緒に家へ持つて歸つたといふんですから……

この例では、「結婚といへば式を挙げなければならぬと気がついた」という認識・気づきが行動の直接的な動機・原因となり、その結果として「雑貨屋へとび込んで一式揃へさせ、一緒に家へ持つて歸つた」という行動が引き起こされている。気づいたから行動した、という明確な因果関係が認められるため、「順接」に該当する。

添加

つけ加え

- (3) さあさあ、そっち行くのじゃ、よし。煙草盆に火を入れて来るね。で、そこの仏壇の引き出しを開けなはれ。さあ、そこにせんこがあるじゃろ。その線香を、こっちへ持って…。

(『やいと丁稚』笑福亭松鶴(四代) 1925)

この用例では、話し手は「煙草盆に火を入れて来るね」という自身の行動を述べた後、「で」を用いて次の指示「そこの仏壇の引き出しを開けなはれ」を繋いでいる。先行する行動と後続の指示の間には直接的な因果関係はなく、一連の行為の流れの中で、関連する別の事柄（相手への指示）を付け加えている。話し手が話題を継続しつつ、新たな情報を追加しているため「添加-つけ加え」と判断される。

- (4) «閣下、それは不可能です。そのやうな作業は三日間どころか三ヶ月を必要とします»そこで私は言つた。«よろしい。私がやる»で、私はある部隊長を呼んで、道路計畫を詳細に書いてみせた。

(『フランス戦線-2 ジロー將軍』モーロア・アンドレ/高野弥一郎(訳) 1941)

この用例では、「私がやる」という決断を述べた後、「で」を用いて「私はある部隊長を呼んで、道路計畫を詳細に書いてみせた」という具体的な行動を説明している。決断と行動は密接に関連しているが、先行部が原因で後続部がその必然的な結果という厳密な因果関係というよりは、決断に引き続く具体的な展開・情報を付け加えていると解釈される。「添加-つけ加え」に分類され、談話の流れを自然に継続させる役割を持つ。

促す

- (5) 大状師『ちよつと待て。被告とアグネスとは同室に就寢致すのか?』證人『いいえ。』大状師『それは何時頃からさうなつたのか?』證人『もう幾月も前からのこ

とで、それ以来お二人の仲は一層氣まづくおなりでございました。』大状師『よろしい。で、どう致した？』

(『太陽長篇探偵小説-ハートの九(第三回)』ビ・エル・ファルジャン/延原謙(訳)1925)

この用例では、大状師は証人の「お二人の仲は一層氣まづくおなりでございました」という発言を受け、「よろしい」と一旦区切った後、「で、どう致した？」と問いかけている。これは、証人の発言内容を踏まえ、さらに詳細な情報やその後の展開について相手に語るよう促している場面である。相手からの情報追加を期待し、会話を次の段階へ進める働きかけであるため、「添加-促す」に該当する。

(6) 労働者や農民の窮乏状態を知つてゐるかね？」「知つてゐる。……から来る新聞や雑誌で。」「で、始終………あるかね？」「始終ツてこともないが——。」澤は弱々しい調子で答へた。

(『中央公論-地主の子』藤森成吉 1925)

この用例では、相手が「知つてゐる」と答えたのに対し、最初の質問者は「で、始終………あるかね？」とさらに問いを重ねている。先行する相手の肯定的な返答を受け、その内容を深掘りするために追加の情報を求めている。相手の発話を促し、会話を継続・発展させようとする機能を持つため、「添加-促す」と分類される。

転換

(7) 深川は、もうすっかり暗かつた。徳永さんは、「頭が痛んで、今日は店へ出ない始末だ」と、下に寝てゐた。二階に獨りで待つてゐる翁の前へ信一らは出た。松子との初ての挨拶がすんでから「春三も出られないやうだし、雨が降るから、自家へとつて貰ふ事にした」と、徳永翁は晩餐の事から、信一の顔をみた。「で、今晚九時の汽車でお發ちになりますか？」信一は外で夕飯をたべ、跡で皆と東京驛へ行く考へで居た

(『無限抱擁-二の三』瀧井孝作 1921)

用例(7)では、徳永翁は、まず春三のことや雨天を理由に「自家へとつて貰ふ事にした」(晩餐に関する話題)と述べている。その後、「で」を挟んで「今晚九時の汽車でお發ちになりますか？」と信一の出発予定という全く異なる内容について尋ねている。晩餐の話題から信一の出発という、話題の連続性が薄い異なる内容へ移っており、「で」が話題の切り替えをスムーズに行うマーカーとして機能しているため、「転換」と判断される。

(8) 兄はしかし、遂自分の氣持のつよく向いてゐることがらの方へ言葉を移した。

「……で、今年はそうさなア？出ても二圓は出さんかもしれんなア？……。」

(『中央公論-製鐵起業祭』金親清 1933)

この用例では、地の文に「自分の氣持のつよく向いてゐることがらの方へ言葉を移した」とあるように、話し手が意図的に話題を変えようとしている場面であり、「で」はその話題転換のきっかけとして機能しているため「転換」と分類される。

3.5 「で」の拡張実態

3.5.1 「で」の意味の

表 3.1 に基づくと、明治期において「で」は主に「添加-つけ加え」(65.8%)として用いられており、文と文を単純に連結する役割が中心であった見せる。この時代の「で」は比較的シンプルな談話標識として機能していたと言えよう。「促す」の意味や「順接」、「転換」といった他の意味は相対的に限定的であった。

注目すべきは大正期に観察される「で」の使用における機能分布の大きい変動である。「添加-つけ加え」の割合は 43.1%に減少する一方、「添加-促す」は 15.8%から 33.2%へと顕著な増加を示している。この変化は、大正期の言語環境、特に言文一致運動の成熟や口語体の普及といった要因と関連している可能性が考えられる。すなわち、話し手の意図や展開方向をより明示的に示すための談話管理機能が強化されたことを反映していると推測される。

昭和前期に関しては、収集データが 2 年間分のみであるものの、「で」の使用例数は 78 例と決して少なくない。この時期の意味分布は、大正期からの変化の方向性を継続しており、特に「添加-促す」の意味はさらに増加して 38.5%に達し、「添加-つけ加え」(44.9%)とほぼ拮抗する水準になっている。これは、「で」が単なる文の連結という基本的な役割から、聞き手に対する働きかけや談話展開の促進といった、より相互行為的な機能へとその役割を拡大させていったことを明確に示している。

3.5.2 「で」の連続使用と統語的位置の変化

「で」の意味の拡張に伴い、「で」の出現形態および統語的位置に変化が生じている。

まず、現代日本語における一例をみよう。例(9)は『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)から抽出した日本語母語話者の発話の一部である。

(9) 簡単に、んか突然、まあ普通の、世界、ま日本の世界、に、〈はい〉ほんと突

然〈はい〉まあ、その寄生虫みたいな、〈はい〉が発生して、〈はい〉で、その寄生虫がまあ人の体に入り込んでしま、って、でその、入りこまれ脳に入り込まれてしまったら、なんか人の形をしたなんか寄生、虫みたいなものになってしまうんですよ、〈うんうん〉で、それ、がえっと、なんかまあ人類と共存ではないんですけど

(JJJ03-I-01280-K)

最初の「で」は、「寄生虫みたいなものが発生して」という出来事の後続き、「その寄生虫が人の体に入り込む」という次の出来事を接続する。ここでは、一連の事態の継起を滑らかに繋ぐ談話標識として機能する。

二番目の「で」は、「人の体に入り込んでしまつて」から、さらに「脳に入り込まれてしまったら」という深刻な状況へと展開させる。先行する事態を前提とし、その結果として起こりうる、あるいはさらに進んだ状況を示す際に用いられ、話題の焦点を絞り込みつつ展開を促している。

三番目の「で」は、一連の寄生虫の描写の後、少し視点を変えて「それが人類と共存ではないんですけど」と、補足的な情報や話し手の意見・評価を導入する。ここでは、先行する内容を受けつつも、新たな側面や少し異なる話題へと移行させる談話標識としての機能が顕著である。この例では、「で」が連続して使用されることで、話し手が思考を整理しながら段階的に情報を提示し、かつ談話の流れを途切れさせずに展開させている様子がわかる。それぞれの「で」は、単なる接続だけでなく、出来事の連続、結果、話題の微調整といった細やかな談話機能を担っている。

この用例が示すように、話し手が連続する出来事を叙述する際に、「で」を連続的に使用している点が注目される。この連続使用というパターンは、現代日本語の会話において頻繁に見られる特徴である。第6章で詳述するように、現代日本語の会話における「で」は、単なる接続機能よりも、談話構造の構築に貢献する談話標識としての性格を強く帯びている。明治期においても、「で」の連続使用は皆無ではなかったものの、その事例はごく3例であり、ほぼ単独で使用されていた。また、これらの「で」は発話冒頭や文と文の間に位置している。この事実からも、明治期の「で」は、依然として接続詞としての機能が主でありつつも、比較的シンプルな談話標識として機能していたと結論づけられる。

(10) 「専売局の芸者を買った以上は、必ず一週間以内に再び来んじゃあいかなぜ」。

「へーえ?」「で、もしな、お前の方で来んかれば、こ、こっちゃから召喚状を発するから。」「呼び出し状を?驚いたねえ、へえ。」「で、召喚状を受けたる場合には、督促手数料を五円申し受ける。」

この用例では、最初の「で」は、発話冒頭に置かれ、相手の反応「へーえ？」を受けつつ、新たな条件「もしな、お前の方で来んかれば」を提示し、それに対する結果「こっちゃから召喚状を発するから」を述べる導入として機能する。相手の関心を引きつけ、話題を継続・展開させる役割である。

二番目の「で」も、同様に発話冒頭にあり、先行する相手の驚きの反応と自身の発言「召喚状を発する」という文脈を受け、さらに「召喚状を受けたる場合には」という新たな条件と、その結果「督促手数料を五円申し受ける」という追加情報を提示する。この明治期の例では、「で」は主に発話の冒頭で、相手の発言や先行する文脈を受けて、新たな情報や条件を提示する際のマーカーとして機能し、話題を段階的に進める役割が強い。

- (11) 此男大變な勉強家で、一心不亂に學問をして居たが、ふと隣家の令嬢の束髪姿に思を懸たのだね、さあ其からといふものは、落語家の言草ではねへが、學問も手に着ず、寢ては夢、起ては現幻の、煩惱の犬は追ども去らず、菩提の鹿は招けども來らず、といふ規則通になツたのだ、で、思ひに堪かねて、古い寸法だが、附文をした。すると此令嬢、今時の娘には似合はぬ堅物だから、首尾好臂鐵砲をくはしたのだ、で新六失望して此世に生て居る甲斐もない、寧死だ方がましと迄思ツて、勉強も何もせずにくよくよして居たが、其中此戦争だ、で同じ死ぬるなら寧戦争に出て討死しやう」

『太陽-浮世新聞』嵯峨の屋おむろ 1895)

この用例では、最初の「で」は、「學問も手に着ず…といふ規則通になツたのだ」という状況説明の後、その結果として「思ひに堪かねて…附文をした」という行動に移ることを示しており、明確な順接（原因→結果）の機能を持つ。

二番目の「で」は、令嬢に振られた結果、「新六失望して…くよくよして居たが」という心理状態・行動に繋がることを示す、これも順接的な機能である。

三番目の「で」は、「くよくよして居たが、其中此戦争だ」と状況が変化し、その新たな状況を踏まえて「同じ死ぬるなら寧戦争に出て討死しやう」という決意に至ることを示す。これも先行する状況を前提とした結果・決意であり、順接的である。この例では、「で」は物語の展開を追いながら、ある出来事や状況から次の出来事や心情へと繋ぐ役割を果たす。主に文と文の間に置かれ、因果関係や事態の進行を示す接続詞としての機能が中心である。

- (12) ああ、南海のあんた、名月楼の門まで戻りましたら、仲居さんが出てなあ、旦那、まああんた、ウットーリとは何でやすいな、どうぞて、とうとう旦那を引っ張って、入ってしもた。わて、あんた、ずーっと立ってましたら、車屋もこっち入れ。えで、あんた、だんさんの前へ呼んでもろてなあ、ああ、えー、いいごつつおよばれてな。でまあ、これでまた、他でなんなど、口におうたもんで一杯飲めえって、ご祝儀を下はりましたあね。

（『いびき車』桂枝雀(初代)1864）

この用例では、最初の「えで」は、「車屋もこっち入れ」という呼びかけの後、その結果として「だんさんの前へ呼んでもろてなあ」という状況になったことを示す。「え」は間投詞的なもので、「で」が接続の役割を担い、順接的な繋がりを示す。

二番目の「でまあ」は、「いいごつつおよばれてな」という状況の後、「これでまた、他でなんなど…ご祝儀を下はりましたあね」と、さらに別の出来事（ご祝儀もらったこと）を付け加える追加的な機能を持つ。「まあ」が挟まることで、軽い転換や話し手の感慨といったニュアンスも加わっている。落語の口演であり、語りのリズムや間を調整する役割も担っている可能性が考えられる。

大正期および昭和前期に至ると、「で」の連続使用というパターンがより頻繁に観察されるようになり、その出現位置も文と文の間だけでなく、節と節の間にも拡大する傾向が見られ始めた。このことは、「で」の単なる接続機能が相対的に弱まり、談話標識としての働きが一層強化されたことを示唆している。

- (13) おちよやん、ここに椅子持って来てな、で、電話室の中へ入れて、座布団上へ、二・三畳置きい。で、そこを屏風で囲うてしもて、太鼓を内らいれとき

（『電話の散財』林家染丸(二代)1923）

この用例では、最初の「で」は、「椅子持って来てな」という指示に続き、次の指示「電話室の中へ入れて、座布団上へ、二・三畳置きい」を繋ぐ。短い指示を連続させることで、一連の作業の流れを明確に示す。また、この「で」は文と文の間から節と節を繋げるようになった。

二番目の「で」は、先行する指示が完了した後の次の段階の指示「そこを屏風で囲うてしもて、太鼓を内らいれとき」を導入する。この例では、「で」が連続して用いられ、一連の指示をテンポよく、かつ段階的に伝えている。それぞれの「で」は、前の行動・指示の完了を前提とした次の行動・指示への移行を示し、談話の結束性を高め、談話標識としての性格が強まっている。

- (14) 表にいますわ。えっ、おとつあんお帰り。これ、どこへ遊びに行てるねん。うちに居んかい、ちゃんと。な、お父つあん、うちにばかり居い言うけど、ぼんら学校から調べて戻ってきて、で、本も、調べて用がなかったさかい、ちょっと表へ遊びにやってもろうたんや。

(『雷の禪』桂枝太郎(初代)1865)

この「で」は、「ぼんら学校から調べて戻ってきて」という一連の行動の後に置かれ、その次の行動あるいは状況「本も、調べて用がなかったさかい、ちょっと表へ遊びにやってもろうたんや」へと繋ぐ。文頭ではなく、先行する節の直後に接続することで、一連の言い訳や状況説明を区切りつつも、滑らかに次の説明へと移行させている。統語的には、二つの節を繋ぐ機能を果たしながら、談話の流れを整理する標識としても機能する。

- (15) 先ず第一回を~~で~~切りまして、後からの御志しは又追ひ追ひと言ふ事に願ふこととして、一で、今日は丁度よい折でありますで、この信仰の方で申す業と言ふ事に就きまして少しばかりお聞きを

(『中央公論-戯曲せき(六場)』三好十郎 1933)

先行する「先ず第一回を~~で~~切りまして、後からの御志しは又追ひ追ひと言ふ事に願ふこととして」という部分は、それ自体で一つの完結した文とは言い難いものの、意味的にはまとまった前置きや状況設定を表す大きな単位(複数の節を含む句、あるいは従属的な文節)を形成している。一方、後続の「今日は丁度よい折でありますで、この信仰の方で申す業と言ふ事に就きまして少しばかりお聞きを」は、主要な内容を述べる独立した文(主節)と見なせる。ここでの「で」は、厳密な意味での文と文の接続というよりも、より短い、緊密に連続する節と節の間、あるいは一連の思考・発話のまとまりとその結果としての行動を示す節との間に出現していると見なされる。これは、特に会話や、会話的な語りにおいて、「で」がより細かい単位で談話の展開を繋ぎ、その結果として統語的位置が文間から節間へと拡大していく傾向を示す好例である。「で」が単なる論理的接続を超え、談話構成上の標識としての機能を強めていることがわかる。このように、完結した文同士の間限定されず、より柔軟な単位間に出現する点で、その統語的位置の拡張の一端を示す例と言える。

- (16) 見ると病室だ。係りのボーイが横着なやつでね、何だ病室か、ほつとけほつとけ、で、行かなかつたんだ。十分ほど経つたらまたベルが鳴つた。

(『中央公論-航海日誌』石川達三 1941)

ここでの「で」は、厳密な意味での文と文の接続というよりも、より短い、緊密に連続する節と節の間、あるいは一連の思考・発話のまとまりとその結果としての行動を示す節との間に出現していると見なされる。これは、特に会話や、会話的な語りにおいて、「で」がより細かい単位で談話の展開を繋ぎ、その結果として統語的位置が文間から節間へと拡大していく傾向を示す例である。

以上の分析が示すように、「で」の出現位置および使用形式の変化は、その機能拡張を明確に示している。明治期においては、「で」は主として発話冒頭や文と文の間に単独で出現し、前後文脈を接続する機能を担っていた。これに対し、大正期および昭和前期になると、「で」の連続使用事例が増加し、その出現位置も文間に留まらず節間にも見られるようになる。これは、「で」が単なる接続という機能から、より積極的に談話構造の構築に貢献する要素へと進化していることを示している。

3.5.3 出現のジャンルおよび男女差からみた「で」の拡張

本節で、第2章と同様に、大正・昭和前期における「で」の出現の使用ジャンルとその男女差を考察していきたい。

表 3.2 明治・大正・昭和前期の会話における「で」の出現ジャンル

	明治期 (%)	大正期 (%)	昭和前期 (%)
文芸	44 (57.9)	159 (78.7)	78 (100) ¹⁷
非文芸	10 (13.2)	10 (5.0)	0
落語	22 (29.0)	31 (15.3)	0
国語教科書	0	2 (1.0)	0
合計	76	202	78

表 3.3 明治期および大正時代における会話における「で」の男女差

	明治期 (%)	大正期 (%)	昭和前期 (%)
男性	59 (77.6)	167 (82.7)	10 (12.8)
女性	14 (18.4)	35 (17.3)	0
不明	3 (3.9)	0	68 (87.2)

¹⁷ この中、小説類が 64 例、戯曲類が 4 例、その他が 10 例である。

合計	76	202	78
----	----	-----	----

まず、作品ジャンル別の構成をみると、全期間を通じて文芸作品が作品群の中核を成していることが明らかになる。明治期には 44 件 (57.9%) を占めていた文芸作品は、大正期には 159 件 (78.7%) へとその絶対数・構成比ともに顕著な増加を示した。さらに、昭和前期に至っては、本資料中の 78 作品すべて (100%) が文芸作品として計上されており、その内訳が小説類 64 作品、戯曲類 4 作品、その他 10 作品であることから、この時期のデータセットが文芸作品、とりわけ小説に著しく集中している状況がうかがえる。一方で、非文芸作品は明治期・大正期を通じて少数 (各期 10 件、構成比それぞれ 13.2%、5.0%) にとどまり、昭和前期の資料ではその存在が確認できない。落語は明治期に 22 件 (29.0%) と比較的高い割合を占めるものの、大正期には 31 件 (15.3%) と絶対数は微増するも構成比は半減し、昭和前期では同様に 0 件となる。国語教科書は、大正期に 2 件 (1.0%) が確認されるのみである。これらの非文芸ジャンルの昭和前期における不在は、資料収集の範囲に限られていると考えられる。

次に、使用者の性別について検討する。明治期および大正期においては、男性使用者が全体の約 8 割を占めており (明治期 59 件・77.6%、大正期 167 件・82.7%)、両期間で大きな変動は観察されない。なお、昭和前期のデータに関しては、使用者の性別情報が大部分において記録されていなかったため、本分析の対象からは除外する。今後は、より広範な資料からデータを収集し、昭和前期における接続詞「で」の機能拡張の実態について、さらに精緻な分析を行うことが今後の課題として求められる。

3.6 結論

本章は、大正・昭和前期における接続詞「で」が、その意味・機能および出現形態において著しい拡張を遂げ、単なる接続機能に留まらない談話標識としての性格を明確に強めたことを明らかにした。

分析の結果、この時期の「で」は、特に聞き手への働きかけを意図する「添加-促す」機能の使用が増加し、より相互行為的な役割を担うようになった。また、形式面では連続使用が頻繁に見られ、出現位置も従来の文間に加え、より短い節間にも拡大した。これらの意味・形式両面での変化は、「で」が文や節を論理的に繋ぐ基本的な役割から、談話の構成や流れをより柔軟かつ効果的に管理する標識へと、その機能を質的に転換・拡張させていったことを示している。

本研究は、近代日本語における「で」の多様な機能と歴史的変遷の一端を実証的に示した。この大正・昭和前期における「で」の拡張の様相の解明は、現代日本語で観察される「で」の多岐にわたる意味機能が、どのような歴史的過程を経て形成されてきたのかを理解する上で重要な観点を提供していると考えられる。

第4章 近代日本語の会話における「で」の文脈展開機能

4.1 はじめに

第2～3章では、「で」の成立および意味の拡張について述べた。一方、現代日本語においては、佐久間(2002)は「従来は、接続表現の機能面の分析が不十分で、接続表現の意味・用法・機能の定義が曖昧なことから、文脈展開と前後の要素とが混在したような分類もあった」(p. 162)と指摘している。この指摘を踏まえ、佐久間は「指示詞や応答詞・あいづち・間投詞などの文脈展開機能や、文の配列・連鎖・統括関係等に関連付けた、広義連文論の観点から生きたコミュニケーションの文脈展開の実態をよりダイナミックに把握する」(p. 177)ことを目的として、接続詞を文脈展開機能の観点から分類している。この分類において「で」もその一例として取り上げられており、「話を再び始める機能」「話をうながす機能」「話をそらす機能」などの機能を持つとされている。

例えば、「で」は例(1)のように接続の関係を示すよりは、「談話の参加者間の発話権の交替や話題展開のあり方を管理するというコミュニケーション上の機能を発揮している」(pp. 162-163)。

話し手Rさんは「で」を用いて前文の「それでね、あのパーティーに出らん泣なくて」と後文の「それにね、私、少し、提案ありますって書いてあった」「先生も、経験が少ないし」をつなぐことより、発話権を維持したり話を前に進んだりすることを示すものである。

- (1) 18N でも、あのRさんっていう人は、
25N それでね、あのパーティーに出らん泣なくて、
29N で、それにね、私、少し、提案ありますって書いてあった、
30N で、先生も、経験が少ないし、

(佐久間 2002:164)

このように、現代日本語における「で」は従来の接続関係を超えて、文脈の展開において多様な文脈展開機能を果たすことができる。一方、「で」は明治後期に成立したとされ、当初は主に添加の接続詞として用いられていたが、順接や転換の意味も併せ持っていた。こうした歴史的背景を踏まえると、明治期以降の「で」が前後の文の範囲を超えて、談話の展開においてどのような機能を担っていたのかを明らかにすることは、現代日本語における文脈展開機能の形成過程を理解する上で重要であると考えられる。

したがって、本研究では近代日本語の会話における接続詞「で」に着目し、その文

脈展開機能の観点からの分類・分析を試みる。この通時的考察を通じて、「で」の機能拡張の過程を探るとともに、日本語談話標識の発達メカニズムについての理解を深めることを目指す。

本章は次のように構成される。4.2 節で先行研究とその問題点を述べる。4.3 節で調査対象の紹介と調査結果を述べる。4.4 節で明治・大正・昭和前期の文脈展開機能を論じる。4.5 節で4.4 節をまとめてうえで、4.6 節で「で」の位置付けを検討する。4.7 節でこの章をとじる。

4.2 先行研究とその問題点

「文脈展開機能」は、「文章・談話の内部にある文脈を先へと展開させて、完結し、統一ある全体を形成して伝達する働きのことである。すなわち、相手に伝えようとする話を始めて、続け、終わるという文章・談話の話題展開機能である」（佐久間 2002:166-167）。佐久間(2002)では、現代日本語においては「で」は次のような文位置付けを示している。

表 4.1 「で」の文脈展開機能(佐久間(2002:168)より一部抜粋)

文脈展開機能	定義	接続類型	接続表現の例
A 話題開始機能 a2 話を再び始める機能	前と違う話を途中からする	転換型	サテ・トコロデ・ <u>で</u>
B 話題継続機能 b4 話をうながす機能 b7 話をそらす機能	話が先へ進むように 相手をうながす 前の話を避けて、違う話をする	添加型/順接型 転換型/補足型	ソレカラ/ソレデ・ <u>で</u> ・ ダカラ <u>で</u> /タダ・モットモ・ チナミニ
C 話題終了機能 c2 話を一応終える機能	前の話を途中で切り上げる	順接型/転換型	ダカラ・ソコデ・ <u>で</u> / デハ・ジャ

表 4.1 に示されているように、「で」には「話を再び始める機能」「話をうながす機能」「話をそらす機能」「話を一応終える機能」がある。このほか、佐久間(2002:170)では、「で」が「話を進める」「話を重ねる機能」「話を深める機能」「話を变える機能」を持っていると指摘されている。しかし、この分類については、詳細な分析が欠けており、機能の識別の基準が曖昧であるという問題がある。例えば、例(1)のように、「話を進める機能」についての分析はあるものの、「話を再び始める」や「話を重ねる

機能」などについての具体的な解説が見られない。さらに、「話を再び始める機能」は「前と違う話を途中から始める」と定義され、「話を变える機能」は「前の話を切り上げて、違う話をする」と定義されているが、両者の識別の基準が不明確である。

現代日本語において「で」が多様な文脈展開機能を有することは先行研究によって確認されているが、これらの機能がいかに形成されたのか、また、なぜこのように多機能的な談話標識へと発展したのかという問題を解明するためには、その成立時期である明治・大正期の用例まで遡って分析を行う必要がある。

本章では、佐久間(2002)の文脈展開機能の枠組みを参照しつつ、近代日本語の会話資料に見られる接続詞「で」の文脈展開機能分類を試みる。このような通時的考察を通じて、現代日本語における「で」の多機能性の起源と発達過程を明らかにすることを目指す。

4.3 調査対象とその結果

近代日本語における「で」の用例を調査するにあたって、『日本語歴史コーパス』(CHJ)および『昭和・平成書き言葉コーパス』(SHC)¹⁸を利用して用例を収集した。

表 4.2 近代日本語の会話における「で」の用例数

明治(1968～1912)	大正(1912～1926)	昭和前期(1926～1945) ¹⁹
76	202	78

収集した用例を文脈展開機能によって分類し、各機能に対応する接続類型をそれぞれ表 4.3、表 4.4 および表 4.5 に示している。

表 4.3 明治期の会話における「で」の文脈展開機能

文脈展開機能		用例数(%)	対応する接続類型の用例数 順接/添加/転換
話題開始機能		0	0
話題継続機能	話を進める機能	55(72.4)	6/49/0
	話を变える機能	7(9.2)	0/0/7

¹⁸ 『昭和話し言葉コーパス』(SSC)には、1950年代から1970年代までのデータのみであるため、『昭和・平成書き言葉コーパス』(SHC)を利用して昭和前期の会話のデータを収集した。

¹⁹ コーパスには、1933年と1941年の資料のみである。

	話をうながす機能	12 (15. 8)	0/12/0
	話を戻す機能	1 (1. 3)	0/0/1
	話をはさむ機能	1 (1. 3)	0/1/0
話題終了機能		0	0
合計		76	6/62/8

表 4. 4 大正期の会話における「で」の文脈展開機

文脈展開機能		用例数 (%)	対応する接続類型の用例数 順接/添加/転換
話題開始機能		1 (0. 5)	0/0/1
話題継続機能	話を進める機能	108 (53. 7)	22/86/0
	話を变える機能	11 (5. 5)	0/0/11
	話をうながす機能	67 (33. 3)	0/67/0
	話を戻す機能	13 (6. 5)	0/0/13
	話をはさむ機能	0	0
話題終了機能		1 (0. 5)	0/0/1
合計		201 ²⁰	22/153/26

表 4. 5 昭和前期の会話における「で」の文脈展開機

文脈展開機能		用例数 (%)	対応する接続類型の用例数 順接/添加/転換
話題開始機能		1 (1. 3)	0/0/1
話題継続機能	話を進める機能	39 (50. 0)	6/33/0
	話を变える機能	5 (6. 4)	0/0/5

²⁰ その他の一例を除いた。

	話をうながす機能	30 (38.5)	0/30/0
	話を戻す機能	1 (1.3)	0/0/1
	話をはさむ機能	1 (1.3)	0/1/0
話題終了機能		1 (1.3)	0/1/0
合計		78	6/66/7

各機能の代表例は次のとおりである。

話題開始機能：話を導入する

- (2) 恰度この時、足音が聞えて、間もなくフロンテナックが入つて來た。一片手に水の一杯はいつた桶をもち、片手に一片の氷をもつて。魚——長さ六七寸の鱒——が氷の中に挟みこまれてゐるのがはつきりと見えた、まるでガラスの中に入れたやうだつた。この小動物を調べる時、大佐の手はブルブル震へた。大佐は氷を何度も何度も引つくり返してみた。『で、フロンテナックさん』と、大佐が突然に叫んだ。

(『太陽—長篇科學小説生ける死(第一回)』ジョン・マルチン・リーヒー/佐野慶介 (訳) 1925)

話を進める機能：目下の話や関連する話を続ける

- (3) 何だい、ものは？ エー、エー茶でがすがなア。お茶かい。へえ、一年位には大事に飲めてね、で、そのお茶を、そのお、お湯をつぎ込みますと。ウン。んー、その、見事まアそのオ、諸共にな、向こうへ景色も出れば、物も出る。

(『焙じ茶』圓右三遊亭圓右(初代) 1911)

話を変える機能：途中で目下の話と関連薄い話をする

- (4) 健次は妻君に添うて博士を玄關に見送り、その車の後から自分も歸らうとしたが、強いて引留められて元の書齋へ舞戻り、母の傳言を慇懃に述べた。妻君は眉を袖を動かして、「まあ、ひどい煙だこと」と、カーテンを手繰つて窓を開けた。烟は渦を巻いて風のない空へ流れて出る、「で、奥さん何か御用ですか」と、健次は浮腰になつて問ふた。

(『何処(六)』正宗白鳥 1909)

話をうながす機能：話が前に進むように相手の発話をうながす

- (5) 「其御新造のこれさ。」と、拇指を出して見せる。「其麼者があるもんですか。」「何

故何故」「何故ツて貴方、彼家の旦那は四五年既往に死むでお了ひなすツたのですもの。」「それから持たずかね。」「はア、なんでも後家を通すンですツて、大層な評判でしたわ。」「で、どうして喰ツてるのかね。——餘計なお世話だが……」

(『太陽-實印と預金帳』柴田流 1909)

話を戻す機能:一度それた話を再び触れる

- (6) 「將來のことつて何も纏つた考へはありません、只今日社へ行つて織田の拙い原稿を賣付けやうと思つてゐるばかりで、跡は何が何やら眞暗闇です」「織田さんといへば、あの方もお困りのやうねえ、二三日前にも、もつとお金の取れる仕事はないかつて頼みに入らしたが、全くお困りのやうね、だから先生も大變同情なすつて、是非相當な職を見つけてやりたいと云つて被入やる。同じ様に學校を卒業なすつても、貴下と織田さんとは丸で反對ぢやありませんか、顔つきを見てもお話を聞てても分りますわ、織田さんは何故ああ元氣がないんでせう、全くいたいたしいわ」「しかしね、奥さん、織田は貴女方が思つて居らつしやる程くよくよしてやしませんよ、あの男は自身の書いたものは一度だつて拙いと思つたことはないんです…で、私の將來を聞いてどうなさるんです」

(『何処(六)』正宗白鳥 1909)

話をささむ機能:途中で目下の話と関連する別の話をする

- (7) 『嘘はお吐きなさり度無かつた、と言ふ方が可いわ、兄さん。お母様だつて嘘を吐かうとなされば吐けるんですもの。』『それやお母さんだつて相當の、正しい理由があればや嘘を拵えるより其正しい理由を伯母様に仰しやつたらうさ。で、お前覺えてるだらう斯ういふことがあつた——或日お父様が午飯を食ひ乍ら母さんに、「幸ひゾエが百日咳だ、今度はもう長くモンプレージュに行かんで済む。』

(『太陽-ピュートア』アナトール・フランス/草野柴二(訳) 1909)

話題終了機能:話を終了する

- (8) 『箱も大事だが鍵も大事だ。鍵の方がいつそ大事だ。だから別々に仕舞つて置くがいい。この鍵でなければ此箱は、どんなことをしても開かないんだからな。…ところで、紫錦よ、氣をおつけ、敵があるからな、敵があるからな。…で、もう是で用は了へた。氣をつけてお歸り、氣を付けてな。』

(『太陽-長篇小説魑つかひ(第三回)』国枝史郎(作) 1925)

4.4 各時期における「で」の文脈展開機能の特徴

4.4.1 明治期

まず、注目すべき点として、話題継続機能が 76 例(100%)を占めており、話題開始機能および話題終了機能の用例は見られなかった。これは、この時期の「で」は話題の導入や終了よりも、むしろ話題の展開過程において重要な役割を果たしていると考えられる。

「話題継続機能」の中でも、「話を進める機能」が 55 例(72.4%)と最も多く、その次は「話をうながす機能」と「話を変える機能」である。これは「で」は前の内容に新しい情報を付け加えながら談話を展開できる添加型(49 例)を基本とするため、会話における情報の積み重ねという基本的な展開方法と合致する。例えば、

(9) 「専売局の芸者を買った以上は、必ず一週間以内に再び来んじゃあいかなぜ」。

「へーえ?」「で、もしな、お前の方で来んかれば、こ、こっちゃから召喚状を發するから。」「呼び出し状を?驚いたねえ、へえ。」「で、召喚状を受けたる場合には、督促手数料を五円申し受ける。」

(『専売芸者』柳家小せん(初代)1911)

また、「話を戻す機能」と「話をはさむ機能」は各 1 例と極めて少数であることも特徴的である。これは、「で」は当時主に話を前に進める方向で用いられ、話題の後戻りや挿入といった複雑な談話展開には比較的用いられにくいことと考えられる。

次は、各機能と接続類型には明確な対応関係が見られる。「話を変える機能」(7 例)は全て転換型として実現されている。順接型(6 例)は全て「話を進める機能」で使用されており、因果関係を示しながら話を展開するという特定の用法に限定されている。添加型は主に「話を進める機能」と「話をうながす機能」で使用される。

添加型には、「話を進める機能」と「話をうながす機能」のほか、「話をはさむ機能」も 1 例あった。添加型は他の接続型より多様な文脈展開機能と結びつく理由として、以下の 2 点が考えられる。第一に、添加型は前後の内容に強い論理関係を要求しないため、話者が自由に話を展開させやすいという特徴がある。第二に、会話における情報提示の基本が、既知の情報に新しい情報を付け加えていくという形を取ることが多いため、添加型の「で」はこの基本的な情報提示のパターンと相性が良い。

以上の分析から、「で」は主として話題継続の機能を担う談話標識であり、特に添加型の「話を進める機能」を中心としながら、文脈に応じて「話をうながす機能」「話を変える機能」も果たしていることが明らかとなった。

4.4.2 大正期

大正期における「で」の使用には以下のような特徴が見られ、明治期とは異なる様相を示している。

「話を進める機能」は依然として最も多い(108 例、53.7%)ものの、明治期(72.4%)と比べるとその比率は低下している。一方で、「話をうながす機能」が 67 例(33.2%)と明治期(15.8%)に比べて大幅に増加している点が特徴的である。これは大正期において、「で」はダイナミックな文脈を展開していく機能をさらに拡大していると考えられる。また、「話を変える機能」は 11 例(5.5%)と微増し、全て転換型として実現されている点は明治期と共通している。新たな特徴として「話を戻す機能」が 13 例(6.5%)出現している点が挙げられる。明治期には 1 例しか見られなかったこの機能の増加は、「で」の文脈展開機能がより多様化していることを示している。さらに、「話題開始機能」と「話題終了機能」も各 1 例ずつ見られ、わずかながら機能の広がりを確認できる。

4.4.3 昭和前期

昭和前期における「で」の使用には次の特徴が見られる。

複数の機能が維持されているものの、中心的な機能「話を進める機能」「話をうながす機能」への集中が進んでいる。「話を進める機能」は 39 例(50.0%)と、明治期(72.4%)、大正期(50.0%)から減少傾向が続いている。一方で、「話をうながす機能」は 30 例(38.5%)と、明治期(15.8%)から大正期(33.2%)にかけての増加傾向をさらに強めている。接続の種類では添加型を基本としている。このように、「で」が近代日本語の中で、より対話重視の談話標識として変化していく過程を示していると考えられる。

4.4.4 まとめ

本節は近代日本語の会話における「で」の文脈展開機能の特徴は、以下の点を明らかにしている。

第一に、近代を通じて、「で」は主に「話題継続機能」を担う接続詞として機能している。特に「話を進める機能」は、明治期で 72.4%、大正期で 53.7%、昭和で 50.0%と、いずれの時期でも最も高い比率を示している。これは、「で」は基本的に談話を前に進める標識として定着していたことを示している。

第二に、「で」の機能は大正期を経て、昭和期に向けて多様化している。明治期には見られなかった「話題開始機能」や「話題終了機能」が大正期、昭和期には出現している。特に変化したのは「話をうながす機能」の増加で、明治期の 15.8%から昭和期には 38.5%へと上昇している。これは「で」は単なる接続表現から、より対話的な機能を持つ談話標識へと発展していったことと考えられる。

第三に、接続類型との関係においては、近代を通じて添加型が優勢である一方で、

各機能との対応関係には一定の傾向が見られる。「話を進める機能」では主に添加型が、「話を変える機能」では転換型が、というように、機能と接続類型の間に明確な対応関係が存在する。

以上の分析から、近代の日本語会話における「で」は、基本的な接続機能を保持しつつ、より多様な文脈展開機能を獲得していく過程が確認されている。

4.5 「で」と他の接続詞との比較およびその位置づけ

前述の通り、近代日本語の会話において接続詞「で」は7種類の文脈展開機能を有することが確認されている。その一方で、現代日本語に目を向けると、「で」は文脈によって内容的な意味をほとんど持たないフィラーとして使用される事例も観察される。例えば、小出(2008)が指摘するように発話の「処理を支援し、また処理のための心的な余裕を作るというフィラーとしての機能」を担う場合や、山根(2002)が示すように相手の注意を喚起するために用いられる場合などである。

近代から現代にかけて見られるこのような「で」の機能変化、すなわち多岐にわたる文脈展開機能からフィラー的な用法への移行（あるいは併存）の背景を考察するためには、まず「で」が接続詞としてどのような位置づけにあるのかを明確にする必要がある。そこで、本稿では「で」と意味的・機能的に類似する他の接続詞と比較検討することにより、この変化の形成過程に関する手がかりを得ることを試みる。

4.5.1 「で」と「それで」「そこで」の比較

本章では、「それで」と「そこで」を比較対象として選定した。その理由は以下の通りである。

まず、語源的関係からの選定理由として、第2章で論じたように、「で」は「それで」の文法化によって生じたものである。そのため、「で」を「それで」との比較することで、文脈展開機能の発展過程を明らかにすることができる。また、「そこで」も「で」と同様に指示詞と格助詞「で」の結合形であり、構造的な類似性を持っている。

次に、意味的類似性からの選定理由として、明治後期からこれら三つの接続詞はいずれも順接・添加・転換という基本的な接続関係を表すことができる。しかし、その文脈展開機能にどのような振る舞いの違いを見せるかについては研究されていない。

一方、比較するにあたって大正期の用例を選定した。その理由は以下の三点である。第一に、4節の結果から、大正期は「で」の機能が最も多様化した時期であり、様々な文脈展開機能が観察できるためである。第二に、大正期は「で」の用例数(202例)が明治期(76例)や昭和前期(78例)と比較して最も多く、統計的に信頼性の高い比較が可能となるためである。第三に、大正期は口語文体が確立し、日本語の近代化が進んだ時期であり、現代日本語への連続性を考える上で重要な時期だからである。

「で」と同様な収集方法を用いて大正期の会話における「それで」および「そこで」の文脈展開機能を調べた。その結果を表 4.6 に示している。

表 4.6 大正期の会話における「で」「それで」「そこで」の文脈展開機能の比較

接続詞 文脈展開機能		で		それで		そこで	
		用例数 (%)	対応する 接続類型 の用例数 順接/添加 /転換	用例数 (%)	対応する 接続類型 の用例数 順接/添加 /転換	用例数 (%)	対応する 接続類型 の用例数 順接/添加 /転換
話題開始機能		1 (0.5)	0/0/1	0	0	0	0
話題 継続 機能	話を進め る機能	108 (53.7)	22/86/0	152 (74.5)	126/26/0	78 (90.7)	71/7/0
	話を変え る機能	11 (5.5)	0/0/11	9 (4.4)	0/0/9	6 (7.0)	0/0/6
	話をうな がす機能	67 (33.3)	0/67/0	37 (18.1)	0/37/0	1 (1.2)	0/1/0
	話を戻す 機能	13 (6.5)	0/0/13	5 (2.5)	0/0/5	1 (1.2)	0/0/1
	話をはさ む機能	0	0	1 (0.5)	0/0/1	0	0
話題終了機能		1 (0.5)	0/0/1	0	0	0	0
合計		201	22/153/26	204	126/63/15	86	71/8/7

表 4.6 に基づき、三つの接続詞は、いずれも「話題継続機能」を有するが、その使用傾向と機能的特性には明確な相違が認められた。

「で」は最も多機能的な特徴を示し、「話を進める機能」(53.7%)と「話をうながす機能」(33.3%)を中心に、話題の開始から終了まで幅広い場面で使用される。特に添加型においては高い出現率を示している。

一方、「それで」は主に「話を進める機能」(74.5%)に使用されており、順接型において顕著な使用傾向が見られた。「で」と比較すると、「話をうながす機能」の使用率は低いものの(18.1%)、一定の使用が確認された。

「そこで」については、「で」と「それで」に比べると、会話における使用頻度が最

大正期の日本語会話においては、三つの接続詞が形態的類似性にもかかわらず、異なる文脈展開機能を担っていたことがわかる。このような機能の分布から「で」はどのような位置をつけているのかを次節で述べる。

佐久間(2002)が提唱した「文脈展開機能」は談話レベルの機能であるが、中でも「話を進める機能」と「話をうながす機能」は、それぞれ異なる指向性を持つと考えられる。前者の「話を進める機能」は、同一話題や関連内容を継続・展開させたり、命題内容間の因果関係を示したりすることに主眼があり、これは接続詞が本来有する連結・関係表示機能に近い。このような性質から、本研究ではこの機能を「論理的関係指向」と称する。これに対し、後者の「話をうながす機能」は、談話の相互行為的側面に関与し、対話における話者交替や応答の誘発を調整する機能である。この機能は、談話内容そのものよりも、むしろ談話参加者間の関係性調整や対話の円滑な進行に寄与する。そのため、本研究ではこれを「相互行為指向」と称する。

加えて、4.6.1 節で述べたように、「で」は「そこで」や「それで」と比較して、文脈展開機能が最も多様化しており、「話題開始機能」から「話題継続機能」、「話題終了機能」に至るまで広範に用いられている。この多様性は、「で」が指示部「それ」の脱落によって成立したものと関連していると考えられる（詳細は第 2 章参照）。一方、「そこで」および「それで」は、指示部「そこ」「それ」の存在により、ある程度の指示性が保持されている。しかし、第 2 章で論じたように、「順接」「添加」「転換」といった意味機能においては、「それ」「そこ」が指し示す内容が異なるため、指示性の度合いも変動する（詳細は第 2 章参照）。具体的には、指示性の強さは以下の順序で示される。

72

すなわち、「促す」や「転換」といった機能で用いられる頻度が高いほど、指示性は弱まる傾向にある。この点を踏まえ、図 4.1 に示される大正期のデータを見ると、順接の意味での出現頻度が最も高い「そこで」が最も強い指示性を示し、次いで「それで」が挙げられる。対して、「で」は順接の意味での出現が最も低く、「添加-つけ加え」や「添加-促す」といった機能が優勢であるため、指示性が最も弱いと結論づけられる。

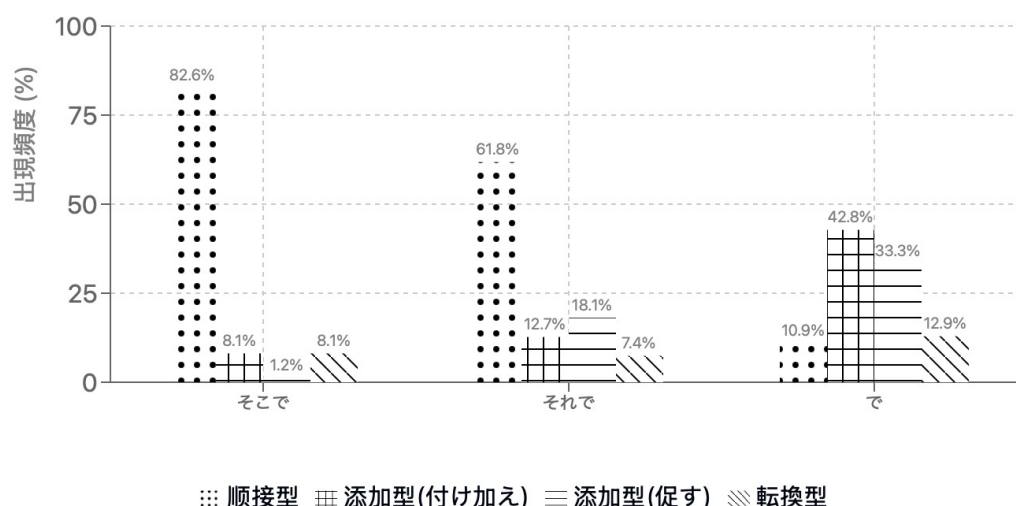


図 4.1 大正期における「そこで」「それで」「で」の接続類型

以上の比較分析から、「そこで」および「それで」との比較分析から、「で」は論理的関係の表示よりも「相互行為指向」という特徴を強く有し、かつ指示性も最も弱いことが明らかになった。

さらに、明治期から昭和前期にかけての「で」自体の機能にも経時的な変化が観察される。具体的には、「話を進める機能」が減少傾向（72.4%→54.2%→50.0%）を示す一方で、「話をうながす機能」が増加傾向（15.8%→33.3%→38.5%）にあり、対照的な変化を示している。この変化のパターンは、「で」が時代を経るごとに対話的・相互行為的な機能を強化させていった過程を反映するものと考えられる。そして、この「相互行為指向」の強化は、間主観化の進行による現代日本語における「で」のフィラー的な性格が発達した要因の一つとして位置づけることができよう。また、時代が下るにつれて「添加-促す」意味での使用が増加することに伴い、「で」に残存する指示性も次第に希薄化していることが観察される²¹。

²¹ 本研究においては、「で」は指示詞の「それで」の指示部「それ」が脱落して成立したものと主張しているが、指示性が完全に失われるとは言えない。Hopper & Traugott (2003)では意味の漂白化は相対的な概念として捉えており、ほぼ完全に文法化の後期段階に関するものであると述べられている。また、古い意味が完全に失われるのではなく、新しい「空の」意

ここまでの考察を総括すると、「で」の位置付けは図 4.2 に示すように整理できる。

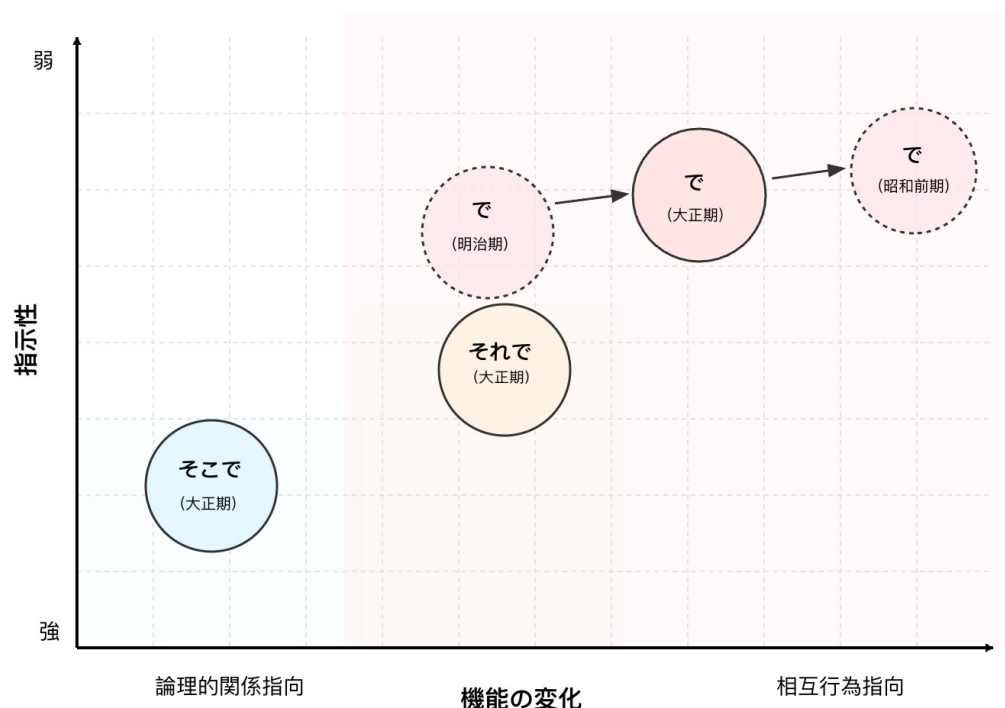


図 4.2 「で」は大正期における文脈展開機能の位置づけおよび通時的な変化

4.5.3 まとめ

本節では、「で」と「それで」「そこで」の比較を通して、近代日本語における「で」の談話標識としての位置づけを明らかにした。

大正期において、「で」は「それで」「そこで」と比較して最も多機能的であり、特に「話をうながす機能」の使用率が高い(「で」33.3%、「それで」18.1%、「そこで」1.2%)。これは「で」が「論理的关系指向」よりも「相互行為指向」の談話標識として機能していることを示している。

また、「で」は指示性の残留は最も少なく、この特性が多様な文脈展開機能の獲得を可能にしたと考えられる。明治期から昭和前期にかけての「で」の変化は、接続詞から談話標識への発展過程を示しており、現代日本語における「で」のフィラー的用法への発展を予見するものである。

4.6 結論

本章では、近代日本語の会話における接続詞「で」の文脈展開機能について分析し

味を制約し続けることがあるという指摘もある。これによると、新しく形成した「で」においても、「それ」の指示性が依然として潜在していると考えられる。

た。調査にあたり、『日本語歴史コーパス』(CHJ)および『昭和・平成書き言葉コーパス』(SHC)から収集した明治・大正・昭和前期の会話における「で」の用例を対象に、文脈展開機能の観点から分類を行った。分析の結果、以下のようなものである。

第一に、近代を通じて、「で」は主に「話題継続機能」を担う接続詞として機能しており、特に「話を進める機能」が各時期において最も高い比率を示している(明治期 72.4%、大正期 53.7%、昭和前期 50.0%)。これによると、「で」は基本的に談話を前に進める標識として定着していたことが確認できる。

第二に、「で」の文脈展開機能は明治期から大正期、昭和前期へと徐々に多様化している。明治期には見られなかった「話題開始機能」や「話題終了機能」が大正期、昭和前期には出現している。特に注意すべき変化は「話をうながす機能」の増加であり、明治期の 15.8%から昭和前期には 38.5%へと上昇している。

第三に、大正期においては、「で」は「それで」「そこで」との比較から、相互行為指向の談話標識として特徴的な位置を占めていることが明らかになった。また、「で」は指示性の残留が最も少なく、この特性が多様な文脈展開機能の獲得を可能にしたと考えられる。このような変化は現代日本語における「で」はフィラー的用法の獲得と関係していると考えられるため、第6章の課題としたい。

第5章 現代日本語の会話における接続詞「で」の文脈展開機能

5.1 はじめに

第4章では近代日本語における「で」には「話を進める機能」が中心的機能として位置づけられ、それに加えて「話題開始機能」「話を変える機能」「話をうながす機能」「話を戻す機能」「話をはさむ機能」「話題終了機能」といった多様な機能が観察される。これに対して、現代日本語においては、佐久間(2002)では「で」の文脈展開機能が言及しているが、ほぼ機能の指摘にとどまり、詳細な分析がなされていない。

そこで、本章では、現代日本語における「で」の文脈展開機能を再検討し、近代日本語における「で」の機能との比較を通じて、その通時的変化の様相を明らかにすることを目的とする。

本章は次ように構成される。5.2節では「で」の先行研究と問題点を述べる。5.3節で収集データと分析方法を述べる。5.4節で結果と具体例の分析をし、5.5節で近代日本語における「で」との比較を行う。5.6節で結論を導く。

なお、この章は『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第58号に投稿したものに加筆・修正したものである。原題は「会話における接続詞「で」の文脈展開機能」である。

5.2 先行研究とその問題点

接続詞研究は従来、品詞論や文法論の枠組みの中で論じられることが多く、主に文の接続関係(順接・逆接・添加など)に基づく分類が中心であった。しかし、談話分析や会話分析の発展に伴い、接続詞の持つ談話レベルでの機能に注目が集まるようになった。佐久間(2002)はこうした流れを受け、接続詞としての「文脈展開機能」を「談話資料における重要な分析観点の一つ」(p. 164)と位置づけ、市川(1978)が分類した接続詞の接続類型を基盤としつつ、より談話構造を反映した機能分類を提案している。

佐久間(2002)は、接続詞の文脈展開機能を体系的に分類し、3つの主要カテゴリと14のサブカテゴリからなる枠組みを提案している。この分類では「で」は次のような機能を持つとされる。

表 5.1 「で」の文脈展開機能(表 4.1 の再掲)

文脈展開機能	定義	接続類型	接続表現の例
A 話題開始機能 a2 話を再び始める機能	前と違う話を途中でか らす	転換型	サテ・トコロデ・ <u>で</u>

B 話題継続機能 b4 話をうながす機能 b7 話をそらす機能	話が先へ進むように 相手をうながす 前の話を避けて、違 う話をする	添加型/順接型 転換型/補足型	ソレカラ/ソレデ・ <u>デ</u> ・ ダカラ <u>デ</u> /タダ・モットモ・ チナミニ
C 話題終了機能 c2 話を一応終える機 能	前の話を途中で切り 上げる	順接型/転換型	ダカラ・ソコデ・ <u>デ</u> / デハ・ジャ

さらに、佐久間(2002:170)は「で」が「話を重ねる機能」「話を深める機能」「話を変える機能」「話を進める機能」を有していることも指摘しているが、接続詞全体に対する研究のため、「で」に対する具体的な用例を挙げながら詳細な分析が欠けている。また、第4章で指摘したように、これらの分類において、機能の定義や分類基準に曖昧さが残る。ここで再提示したい。たとえば、「話を再び始める機能」の定義は「前と違う話を途中から始める」であり、「話を変える機能」の定義は「前の話を切り上げて、違う話をする」である。その違いが不明確である。

以上の先行研究の課題を踏まえ、本章では「文脈展開機能」の観点から、会話文中の「で」がどのような機能を果たしているかを詳細に分析する。具体的な用例を通して、機能の識別基準を明確化するとともに、近代日本語における「で」の文脈展開機能と比較することによって、「で」の文脈展開機能の変遷過程を描きたい。

5.3 調査データの概要と分析方法

5.3.1 データの概要

本章では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声)2021年3月版』(以下、BTSJと呼ぶ)を利用して用例を収集する。

調査には、以下の会話のデータを使用している。

1. 同性友人同士雑談(男男)10会話、同性友人同士雑談(女女)10会話
2. 友人同士討論(男女)5会話
3. 論文指導(日本人教師男または女、日本人学生男または女)2会話
4. 初対面雑談(男男)5会話

選定した全32会話の総会話時間は11時間48分41秒で、総発話文数は18128である。

以上のデータを取り上げる理由は、上下関係、接触の状況、およびジェンダーといった要因を特定せず、接続詞「で」の示す「文脈展開機能」を多様な対話文脈におい

て総合的に捉えることを目的としているからである。

5.3.2 分析方法

本章では、佐久間(2002)が提唱した「文脈展開機能」、および本稿第5章で提示した文脈展開機能の定義を援用し、会話における接続詞「で」の具体的な機能を実際の用例に基づいて考察する。併せて、各機能の特性と、それらを識別するための基準についても検討を行う。

5.4 結果と用例の分析

5.4.1 結果

「で」の会話中の具体例を分析した結果、表5.2に示すように3つの大分類とその下の7つの「文脈展開」用法を提案する。具体的なデータや用例に基づく分析は、5.4.2節で詳述する。表5.2での分類法は、佐久間(2002)による「話題開始機能」、「話題継続機能」、「話題終了機能」という大枠を基にしており、その下位分類に関する機能の定義を部分的に加筆・修正し、またこれまでに指摘されていない各機能の特徴についても追記している。

表 5.2 会話における「で」の文脈展開機能

機能		定義	特徴	用例
話題開始機能		話を導入する	共有情報 ²² ・前提知識 ²³ や認知的基盤を踏まえた導入が一般的である 相手の発話や状況を受けて新たな談話を開始する	(1)
話題継続機能	話を進める機能	目下の話や関連する話を続ける	一連の出来事や物語を説明するとき、連続使用の傾向がある 特に、テ・デ形の後に出現しやすい 前文と明確な連続性・関連性がある	(3)、(4)、(5)
	話を変える機能	途中で目下の話と関連薄い	現在の話題から明確に異なる方向への転換を示す	(6)

²² 共有情報は益岡・田窪(1989:48)に参考し、「相手も当該の知識を持っていると想定される場合」を指す。

²³ 共有知識は東郷(2000:2)に参考し、「世界についての一般的知識」および「個人的体験についての知識」を指す。

	能	話をする	「ところで」に近い機能	
	話をうながす機能	話が前に進むように相手の発話をうながす	基本的に質問文の型で現れる 単独で使用されることが多い 上昇イントネーションを伴うことが特徴的 目下や親しい関係に現れる	(7)
	話を戻す機能	一度それた話を再び	話題の一時的な逸脱の後、 本来の話題への回帰を示す 「さっきの話に戻ると」「話が逸れましたが」に相当	(14)
	話をはさむ機能	途中で目下の話と関連する別の話をする	主要話題を中断して補足情報を挿入する 主話題との関連性が高い 「ちなみに」「補足ですが」に近い機能	(15)、(16)
話題終了機能		話を終了する	話題の区切りや締めくくりを明示する 要約・結論・総括を導入することが多い 「以上です」「というわけです」に近い機能	(17)

5.4.2 用例の分析

本節では、表 5.2 の「で」の各用法を用例で示しつつ説明しておきたい。

5.4.2.1 話題開始機能

「で」が用いられて話題を積極的に開始できるが、全ての状況では使用できるわけではない。話題開始の「で」は、ある程度の共有情報・前提知識や認知的基盤を前提とする傾向がある。以下の例を用いて説明する。

- (1) 1²⁴ JF145: あーごめん、待った?。²⁵
- 2 JF146: <笑いながら>大丈夫。
- 3 JF146: 何飲む?。
- 4 JF145: えじゃ、ちょっとコーヒー。

²⁴分析の便宜上、連番「1、2…」は筆者によって発話に付与された識別番号である。

²⁵記号の意味は「基本的な文字化の原則について」 (https://isplad.jp/about_btsj/) を参照されたい。

5 JF146: あーじゃ、コーヒー2つお願いします(うん)[店員に注文する口調で]。

6 JF145: でね(うん)、ちょっとメールでも多分、うん、言ったと思うんだけど…。

7 JF146: うん。

8 JF145: 「人名 1」さんに<笑い>お願いしてたバイトなんだけど…。

(293-21-JF145-JF146-1)

例(1)における「でね(うん)、ちょっとメールでも多分、うん、言ったと思うんだけど…」(6行目)の「で」は、「話題開始機能」を有している。この会話の冒頭部分(1～5行目)は挨拶や飲み物の注文など、本題に入る前の前置きのやりとりで構成されている。6行目の「でね」によって、実質的な談話の主要部分が開始されている。この「で」の特徴として、「ね」と共起して使用されること、共有情報への言及(「メールでも多分言った」)を伴うこと、そして実質的な話題の第一発話として提示している。

一方、共有情報や認知的基盤が不十分な場合、「で」による話題開始が不自然になることがある。たとえば、次の用例である。

(2) 朝の出会いの場面

A: おはよう。

B: おはよう。

A: でね、明日運動会があるじゃん。(共有情報) どんな服装で行きたい？

(2)' A: おはよう。

B: おはよう。

A: ?? ²⁶でね、明日運動会があるよ。(聞き手にとって新情報) どんな服装で行きたい？

(以上は作例)

ただし、これは絶対的な制約ではなく、文脈や話者の主観的判断によって「で」の使用可能性は変わる。たとえば、直前の発話が語境的基盤を提供する場合、新情報であっても「で」が使用可能になる

(2)'' A: おはよう。

B: おはよう。 今日は忙しそうだね。

A: でね、実は明日引っ越しなんだ。

²⁶ 発話が不自然であることを表す。

この例では、Bの「忙しそうだね」という発話が文脈を作り出し、Aの「引っ越し」という新情報に対しても「でね」の使用を可能にしている。重要なのは、話者が何らかの共通基盤を想定しているかどうかである。

5.4.2.2 話題継続機能

I 話を進める機能

- (3) 1 JM002:=学食とかどこにあるん?。
2 JM001:学食、あれ。
3 JM002:1 個?。
4 JM001:あの辺。
5 JM002:1 個?。
6 JM001:1 個、い、2 個。
7 JM002:うん。
8 JM001:「施設名 2」、2 階が、なん(うん)かね、すごいちょっと、椅子が高くて
(あー)、なんか、ちょっとカフェ、カフェチックで<軽い笑い>、こうい
う格好で絶対行けないのが(うん)、2 階<なのね>{<}<。<
9 JM002:<2 階>{>}<。<
10 JM001:で、1 階が(うん)、あの一、食堂んなってって。
11 JM002:うん。

(001-01-JM001-JM002)

例(3)では、JM001 が「で、1 階が(うん)、あの一、食堂んなってって。」(10 行目)という発話で「で」を使用している。この「で」は「話題継続機能」の下位分類である「話を進める機能」を担っていると考えられる。談話の流れを見ると、1～7 行目では学食の場所と数についての質問応答が行われ、8～9 行目では施設の 2 階の特徴について説明がなされている。10 行目における「で」を用いた発話は、同一施設の別の部分(1 階)に関する説明へと話を展開させている。談話の一貫性を維持しながら新たな情報を付加する典型的な話が進める例と言える。

また、通常の会話における話の関連情報は一つとは限らないため、例(4)、例(5)のように「で」を連続して話題を展開させる形式もよく見られる。このような例には、「で」はテ・デ形の後に出現しやすいという特徴が見られる。

- (4) JF013:なんかねー、ちょ、そういうお客さんと一(うん)、ちょっと何かつり銭
の受け渡したいのトラブルみたいのあって一(うん)、何かそれで、そん
とき店長が偶然いて一、で、何かちょっと聞いてきたんだって。で、なん

か“こうだったんですけど”とか言って一、それで、何か、何か、“つり銭ちゃんと渡したの”とか(うん)、聞かないで一(うん)、で、そのあと、“あ、そうなの”って聞いて一、そのあと引っ込んで一、で、ずーっとその子の、もうその、レジの仕方をずーっと見てんだって。

(017-01-JF013-JF014)

- (5) JM019: <それから>{>}会って一、別に、なん、“なんかしてないすかー”とか言って一、で、ない、最初、“大丈夫ですよ”みたいなこと言ってて一、で、その後に一、チャリに乗ってたっていうのを聞いたから2人で軽く笑う、で、なんか、そのまた次会ったときに、“あれ、なんかチャリ乗ってたらしいっすよね”って、“あ、乗ってた、乗ってた”みたいな。

(010-01-JM019-JM020)

II 話を変える機能

この機能は佐久間(2002)によって「前の話を切り上げて、違う話をする」という形で定義されているが、その機能についての詳細な分析はない。本章では、「途中で目下の話と関連薄い話をする」ことを「話を変える機能」と定義する。例(6)はこの機能にあたる。

- (6) 1 JMR003: え、別にやるんだったら、いいけど、どこでやるの?
2 JMC003: うん、どこだろうね、普通に、どっか、「地名 1」とかで、別に「地名 2」でもいいだろうし。
3 JMR003: あ、俺は別かまわんよ。
4 JMC003: うん、分かった。
5 JMR003: どうせこん暇だし。
6 JMR003: うわ、最悪。
7 JMC003: <笑い>。
8 JMC003: あ、なんだ、「友人の名前 2」実家帰ったんだっけ?
9 JMR003: もう 1 回帰っちゃったから、帰んなんくていいんだよ。
10 JMC003: うんー。
11 JMC003: え、で、就職活動はどうなの?
12 JMR003: あ、就活はもう、リクナビに登録する。

(094-05-JMC003-JMR003)

例(6)の会話では、JMC003 が「え、で、就職活動はどうなの?」(11 行目)という形で接続詞「で」を用いている。この用例における「で」は「話を変える機能」を担っ

ていると分析できる。前後の談話展開を見ると、1～7 行目ではどこかで何かをする計画についての話題、8～10 行目では友人の帰省に関する話題が展開されているが、11 行目で「で」を用いて「就職活動」という全く新しい話題が導入されている。これは「話題開始機能」の新話題を導入することと異なっている。「話題開始機能」の「で」は話題の開始部で出現するのに対して、「話を変える機能」の「で」は話題の主要部にある。

Ⅲ話をうながす機能

- (7) 1 JM002:これ、何が見える?。
2 JM001:あんねー、とりあえずあれが一(うんうん)、うちの図書館?。
3 JM002:うん。
4 JM002:でかいねー。
5 JM001:ちゃう、あれだよ、ゆっても、国公立大で一番(うん)コンピューターの
ある大学らしいから。
6 JM002:あ、そうなん?。
7 JM001:めちゃめちゃある[強調して]。
8 JM002:そうなん?。
9 JM001:マックとウィンドウズと(うん)両方めちゃくちゃあつて。
10 JM002:で、あつちは?
11 JM001:あれが一、「施設名 1 略称」、「施設名 1」っていう(うん)、うん、おれ
もよく分かん=。
12 JM001:=行ったことがない。

(001-01-JM001-JM002)

この例では、JM001 が大学の施設について紹介している。談話の展開を見ると、1～9 行目では図書館とコンピューターについての説明が行われたあと、10 行目で JM002 が視線の対象を別の建物に移し、それについての説明を JM001 に促している。

また、今回の調査では、「話をうながす機能」は友人関係のデータには確認されているが、初対面の雑談の 5 会話には見当たらない。「で?」という形式は極めて短く、丁寧さを示す言語的要素を欠いている表現であり、相手の発話を要求する力を持っているため、目上の人や社会的距離のある相手に対する使用が失礼と捉えられる可能性があると考えられる。以下にこの特徴を具体的な例(作例)とともに詳細に説明する。

(8) 親しい友人間の会話

A:昨日、駅で元カノに会っちゃってさ...

B: で? 何話したの?

友人間では、このような短い形式での促しが許容され、むしろ会話の親密さや関心の高さを示す標識となっている。

(9) 先輩から後輩への発話

先輩: あの企画書、部長に提出したんだよね?

後輩: はい、昨日メールで送りました。

先輩: で、反応はどうだった?

目上から目下への発話では、このような直接的な促しが社会的に許容される。

(10) 家族間のくだけた会話

母: 学校で先生と話したんでしょ?

子: うん、話した...

母: で? 何て言われたの?

親密な家族関係では、このような省略された形での促しが自然である。一方、次の用例では、その使用が容認されにくい。

(11) 初対面や公式な場面

面接官: 前職の経験をお聞かせください。

応募者: 営業部で3年間勤務しておりました。

面接官: ?? で? 具体的にどのような成果を上げられましたか?

→ 適切な表現: 「それで、具体的にどのような成果を上げられましたか?」

(12) 目下から目上への発話

部下: 部長、先日のプロジェクトについて検討されたと思うのですが...

部長: ああ、一応目を通したよ。

部下: ?? で? ご意見をいただけますでしょうか?

→ 適切な表現: 「それで、ご意見をいただけますでしょうか?」

(13) 顧客対応場面

店員: 何かお探しでしょうか?

客: このシャツのサイズを見ていたんだけど...

店員: ?? で? どのようなサイズをお探しですか?

→ 適切な表現: 「どのようなサイズをお探しですか?」

IV話を戻す機能

- (14) 1 JF184:《沈黙 2 秒》そうでもがんばって昨日、一昨日か鍋して片付けたから。
2 JF185:あそこで?。
3 JF184:うちで。
4 JF185:あー〈笑い〉。
5 JF185:いいねーなんか。
6 JF184:鍋。
7 JF185:鍋したーい。
8 JF184:鍋したい。
9 JF184:《沈黙 2 秒》きりたんぽをしようとしたけどあんまきりたんぽに仕上がらなかった。
10 JF185:きりたんぽってどーいうの?。
11 JF185:お米〈だよね〉〈く〉。
12 JF184:〈あっそう〉〈〉お米のやつは一きりたんぽは元々スーパーに売ってたから〈それを買ってー〉〈く〉。
(中略、この後、米と酒に関する話がしばらく続いている。)
13 JF185:んー。
14 JF184:《沈黙 3 秒》でさー、毎週鍋やってる、来週も鍋なんだよね。
15 JF185:〈笑い〉いいね。

(331-23-JF184-JF185)

例(14)では、「《沈黙 3 秒》でさー、毎週鍋やってる、来週も鍋なんだよね。」(14 行目)という形で「で」が使用されている。この「で」は「話を戻す機能」を担っていると分析できる。談話の展開を追うと、最初に鍋ときりたんぽの話題があり、その後きりたんぽの説明から派生して米と酒に関する話題に移行している。14 行目では、「で」によって元の話である「鍋」に関する話に戻っている。沈黙の後に用いられる「でさー」という形式は、話題の転換点を明示し、聞き手の注意を喚起する効果²⁷もある。

V話をはさむ機能

- (15) 1 JM008:《沈黙5秒》「学科名」全員一、は、行ってんの?。
2 JM007:知らない。
3 JM007:だいじょぶなのか、あれ、ほんとに。
4 JM008:なんか、危なそう<やんな>{<}

²⁷ 国立国語研究所(1951:54)では、間投詞としての「さ」は「語勢を添える。(相手の注意を引きとめるようなニュアンス。)」と記述されている。

- 5 JM007:〈怪しく〉{>}ない?、あれ。
- 6 JM008:聖書読んでんの?。
- 7 JM007:英語で聖書とかいってさー(あん)、あの一、ね。
- 8 JM007:普通のさー(うん)、しゅう、し、キリスト教系ならいいけどー、あやし
いキリスト教系もあるからさー、中には。
- 9 JM008:うーん=。
- 10 JM007:「で」、「人名 16」、「人名 16」いるじゃーん?。」
- 11 JM008:ああ。
- 12 JM007:「人名 16」は、最近カトリックになったらしいんだわー。
- 13 JM008:うーん。
- 14 JM007:でー、カトリック、いいんだけどー、変なカトリックもあるからー(う
ん)、なかなか危ないんだよね。

(004-01-JM007-JM008)

例(15)の会話では、JM007 が「=で、「人名 16」、「人名 16」いるじゃーん?。」(10 行目)という形で接続詞「で」を用いている。この用例における「で」は「話をはさむ機能」を担っていると分析できる。談話展開を見ると、1～9 行目では学科の全員参加の話題から派生して、キリスト教系の宗教団体の危険性について一般的な議論が行われている。10 行目では、その一般的な議論の中に「人名 16」という具体的な事例が挿入されている。この「で」は、抽象的な話題(怪しいキリスト教系の存在)と具体的な事例(「人名 16」がカトリックになった)を結びつける標識である。さらに、14 行目では「でー、カトリック、いいんだけどー、変なカトリックもあるからー」と再び一般的な話に戻っており、10 行目の「で」によって導入された内容が主話題に対する挿入的な事例提示であったことが明確に示されている。

また、例(16)が示しているように、「で」は「例えば」というメタ表現²⁸との共起によって関連する話をはさむ場合が見られる。

- (16) 1 JM004:=残念ながら、私は昨日、「人名 15」さんを怒らずにはおれなかった。
- 2 JM004:って、そんな怒ってないけどー。
- 3 JM004:ちょ、ちょっとまずいだろぐらいは言ったけど。
- 4 JM003:うん、部長として?。
- 5 JM004:うん。
- 6 JM003:うん、まー、それはあるかもしれないね。

²⁸ 「談話において、自分あるいは他者の言ったこと、これから言うことに言及する表現」 である。(西條 1999:14)

- 7 JM004: うん。
- 8 JM003: あー、でも、それは正しいかも。
- 9 JM003: だって、ぶ、うん、あー。
- 10 JM004: でもねー、やっぱねー、重荷ではあると思う=。
- 11 JM004: =やっぱ、何だかんだ言ってすごいがんばったじゃん。
- 12 JM004: 何だかんだ言ってか、普通にがんばってくれたからさー。
- 13 JM004: でー、例えば、今の状態ってー、1年生の2年生に対するイメージってそんなよくないでしょ?、女性に関しては(うん)、はっきり言って。
- 14 JM004: だ、すごい大変だとおもうのね。
- 15 JM004: 逆に今がんばらないとー、けつ、そっぽ向かれちゃう可能性すらあるからー<笑いながら>、ほんとに[「すら」を強調して]。

(002-01-JM003-JM004)

例(16)の会話において、JM004が「でー、例えば、今の状態ってー、1年生の2年生に対するイメージってそんなよくないでしょ?、女性に関しては(うん)、はっきり言って。」(13行目)という発話で「で」を使用している。この「で」は「話をはさむ機能」を担っていると分析できる。前後の談話展開を見ると、1～12行目では「人名15」に対して部長として怒ったこと、しかしその人が頑張ってくれたという具体的なエピソードが語られている。13行目では「でー、例えば」という形式で、その具体的なエピソードを理解するための背景説明として、より一般的な状況(1年生の2年生に対するイメージの問題)が挿入されている。

5.4.2.3 話題終了機能

- (17) 1 JMT002: 《沈黙 15 秒》はい、じゃ、まあ構成としては、まあ、これでいいと思います=。
- 2 JMT002: =別に問題ない、問題となることはないと思うし。
- 3 JMT002: それから今、あの一、2人でこう話し合ったことを一、あの一考慮しながら、ね、こん中に入れながら、こう、あの一、修論を書くっていうこと、ですね。
- 4 JMT002: はい、こんなもんで一、<いかがでしょうか>{<}>?。
- 5 JFSt003: <あ、はい、はい>{>}、ありがとうございました<笑いながら>。
- 6 JMT002: 《少し間》 で、終わります<2人で笑い>。

(045-03-JMT002-JFSt003)

例(17)の会話において、JMT002が「《少し間》で、終わります<2人で笑い>。」(6行

目)という発話で「で」を使用している。この「で」は「話題終了機能」を担っていると分析できる。談話の流れを見ると、1～4行目で JMT002 が修士論文の構成について問題ないことを述べ、今後の作業方針を説明した後、「こんなもんで一、いかがでしょうか?」と相手の意見を求めている。JFST003 が5行目で「あ、はい、はい、ありがとうございました」と応答した後、少し間があり、6行目で JMT002 が「で、終わります」という発話でこれまでの談話全体を締めくくる。

5.4.2.4 まとめ

以上の分析では、具体的な使用例に基づき、「で」の「文脈展開機能」について検討した。その結果、「で」は「話題開始機能」、「話題継続機能-話を進める機能、話を変える機能、話をうながす機能、話を戻す機能、話をはさむ機能」および「話題終了機能」を持つことが明らかになっている。

では、文脈展開機能においては、現代日本語における「で」と近代日本語における「で」とを比べ、どのような発展があるのかを次節で検討する。

5.5 近代日本語における「で」との比較

本節では、第4章で検討した近代日本語における「で」の文脈展開機能も視野に入れ、近代から現代にかけては、「で」の機能はどのように変化しているのかを検討したい。

表 5.3 近代から現代にかける会話における「で」の文脈展開機能の分布

文脈展開機能		明治期	大正期	昭和前期	現代
話題開始機能		×	○	○	○
話題継続機能	話を進める機能	○	○	○	○
	話を変える機能	○	○	○	○
	話をうながす機能	○	○	○	○
	話を戻す機能	○	○	○	○
	話をはさむ機能	○	×	○	○
話題終了機能		×	○	○	○

表 5.3 に示される通り、接続詞「で」の文脈展開機能は明治期から現代に至るまでの約 150 年間に於いて段階的な変化と拡張を遂げている。この通時的変遷からは、日

本語における談話標識の発達過程の一例が見られる。

明治期の「で」は、主に談話内部の展開を管理する「話を進める機能」「話を変える機能」「話をうながす機能」「話を戻す機能」および「話をはさむ機能」を有していた。これらの機能は基本的に談話の内部構造を操作するものであり、特に「話を進める機能」は論理的な関係を示す順接型・添加型の意味から発展したものである。注目すべきは、談話全体の枠組みを構築する「話題開始機能」と「話題終了機能」がこの時期には確認されない点である。この事実は、明治期の「で」が主に談話内の接続関係を示す段階にあり、より大きな談話単位を管理する機能へは未だ拡張していなかったことが推測できる。

大正期に入ると「で」の機能レパートリーに重要な変化が生じる。「話題開始機能」と「話題終了機能」という談話の外枠を示す機能が新たに出現する一方、興味深いことに「話をはさむ機能」が一時的に確認されなくなるという現象が観察される。この時期、「で」は談話の始まりと終わりを明示的に示す機能を獲得したことで、談話全体を構造することにより積極的に関与するようになったと解釈できる。この「話をはさむ機能」の一時的消失については、機能の形成初期段階における不安定性を反映している可能性が高い。明治期においても「話をはさむ機能」の用例は一例のみであり、この機能が言語使用の中で十分に定着していなかったためと考えられる。

昭和前期になると、「話をはさむ機能」が再び確認されるようになり、「で」は現代と同様の包括的機能レパートリーを完成させている。この時期には、「で」が談話内部の展開から談話全体の構造まで、談話管理を担う汎用的な談話標識として確立したと考えられる。特に対話における「で」の使用が多様化し、話者交替や話題転換、情報の階層化など、より複雑な談話構造を操作する手段として機能するようになったと推測される。

この「で」の機能変化パターンからは、日本語の談話標識が歴史的に局所的接続機能から大域的談話管理機能へと発達する傾向が見て取れる。「で」は明治期には主に文と文の接続関係を示していたが、大正期以降には談話全体の構造を操作する機能へと拡張し、昭和前期を経て現代では、談話の構造に関与する柔軟な標識へと発展している。この発達経路は、言語要素が本来の狭い機能から、より抽象的で広範な談話管理機能へと拡張していく普遍的な言語変化の一例として理解することができると考えられる。

5.6 結論

本研究では、現代日本語の会話における接続詞「で」の文脈展開機能について、具体的な用例に基づく詳細な分析を行った。その結果、「で」には「話題開始機能」「話題継続機能」（「話を進める機能」「話を変える機能」「話をうながす機能」「話を戻す

機能」「話をはさむ機能」)および「話題終了機能」という7つの機能があることが明らかになった。これらの機能について、それぞれの定義、特徴および識別基準を提示し、佐久間(2002)では曖昧であった機能区分を明確化した。

また、近代日本語との比較を通じて「で」の文脈展開機能の通時的変化を明らかにした。明治期には主に談話内部の展開機能のみが見られたのに対し、大正期になると談話全体を枠づける「話題開始機能」と「話題終了機能」が出現した。現代では、これらすべての機能が定着し、「で」は談話構造を操作する談話標識として確立している。この変遷は、「で」が文レベルの接続から談話全体の構造へと機能を拡張していく発達過程を示している。

第6章 現代日本語の会話における「で」のフィラー的な使用について

6.1 はじめに

第5章では、文脈展開機能という観点からの分析を通じて、「で」が文と文の関係を示す接続詞から、談話の構造へ貢献する標識へと変化しつつあることを明らかにする。この変化に伴い、「で」が従来有していた接続詞としての「結びつける」「関係を示す」「方向を示す」といった機能は、表面的には見えにくくなっている。高橋(2001)は、「で」が抽象的なレベルで用いられる傾向を指摘しており、さらに小出(2008)および中島(2011)は、「で」がフィラー的な用法を獲得していると述べている。しかしながら、これらの先行研究においては、具体的にどのような「で」がフィラーとして機能するのかについては詳細な言及がなされていない。そこで本章では、このフィラー的性格を帯びた「で」に焦点を当て、その実態について考察を深めたい。

本章は次のように構成される。6.2節で先行研究とその問題点を述べる。6.3節で「で」の出現位置を考察したうえで、6.4節で「で」の用法の検討から、接続詞かフィラーかを論じる。6.5節でその結論を述べる。

6.2 先行研究とその問題点

接続詞「で」のフィラー的な使用に言及した先行研究としては、小出(2008)、中島(2011)、百瀬(2018)が挙げられる。このうち小出(2008)は、「で」の機能を対話と独話に分けて考察し、特に独話における「で」がフィラー化している傾向を指摘している。

対話: 目下の話題や文脈に区切りをつけると同時に、そのあとに目下の関心事が続くことを示す。後続する「目下の関心事」とは、既出話題であったり、現話題の関連話題であったりするが、それらの内容を展開・補完するなどして、談話構造上の次のステップに進むことを示す。

独話: フィラー化する「で」

「で」は、とくに独話においては、目下の話題・内容が展開しているときに、発話処理に連動し、区切りを示すことにより、処理を支援し、また処理のための心的な余裕を作るというフィラーとしての機能を持つ。このような「で」は、発話冒頭に頻出することがあるが、対話での基本的な機能を保持しており、連続的な内容の発話を形成処理中であることを示す。(小出 2008:38、一部改変)

(1) で、参加学生数は学生が二百五十六名講師三十名。

で、環境は学内のイントラネットおよびダイヤルアップと。

で、内容はですね授業の内容これは学生さんには内緒で、正規の授業の中で単位を認定する通常の授業の中で実施したんですけれども(…)

(小出 2008:37、一部変更)

小出(2008)は、例(1)に見られる「で」の3回連続使用が、話の関連性を示す機能に加え、「発話の処理支援」および「心的な余裕を確保する」(p. 38)という重要な機能を果たすと分析している。

しかし、フィラーの認定基準については慎重な検討が必要である。大工原(2010:126)は、「間をつなぐ」、「言いよどむ」といった印象だけでフィラーを認定するならば、フィラーの種類は膨大なものになるように思われる」と警鐘を鳴らす。実際に、話し言葉においては、「やっぱ(り)」、「だから」、「で」など多種多様な表現が、文中に不必要とも思えるほど頻繁に使用されることは珍しくない指摘されている。また、加藤(2004:225)は、「ことばが出ていない《無言語の時間》を埋めるという働きは、すべての発話や単語が持つ」と指摘している。このため、単に「発話の処理支援」や「心的な余裕を確保する」という機能のみを根拠に「で」をフィラーと断定することの妥当性には疑問が残る。加えて、深川(2009)は文頭の「で」が音声的に短く、学習者にとって知覚されにくい点を指摘している。この音声的特徴を考慮すると、果たして知覚されにくいほどの短い発音で「心的な余裕」が効果的に生み出されるのか、という点も論点となろう。

中島(2011)は自然談話におけるフィラーを対象とした考察の中で、「で」をフィラーの一つとして取り上げ、会話における発話冒頭と発話中の両方に出現すると述べている。中島によれば、発話冒頭の「で」は、例(2)で示されるように、「発話権の維持」という機能を担う場合がある。

- (2) で、そうゆう、ことでだいたいおおよそは、あの、フロッピー入稿を、してありました。

で、えー遅れたものとか、ちょっとこちらで入力でき、できなかったものだけ、手書きの原稿がいきますが、ほとんどが、えー、フロッピー入稿とゆうふうに考えていただいて、けっこうだと思います。

(中島 2011:197)

次に、発話中に用いられる「で」は例(3)のように「ほら」と共起して「注意喚起」という機能を持つ。

- (3) どうもねえ、で、ほら、工事で、ごちゃごちゃ、もう、やってたし。

しかしながら、中島(2011)の研究においては、「で」をフィラーとして認定する具体的な基準については、解説がなされていない。実際の会話を観察すると、発話の冒頭や途中に「で」が出現する例は頻繁に見受けられるが、それら全てがフィラー的な用法であると断定することは困難である。この点を明らかにするため、次に『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)から収集した用例を見てみる。

- (4) 脳に入るのをストップさせてしまって、だから右腕だけに寄生されちゃうんです〈んーんーんーんー〉、でな、なかなか頭はもう人間で、こう右手だけ寄生虫に寄生されたみたいななんかいろいろ

(JJJ03-I)

この例における「で」は、発話中に位置しているものの、文頭にあって先行文と後続文を接続している。このため、フィラーとして認定するよりも、寄生虫に関する情報を追加説明する接続詞として機能していると解釈するのが適切であろう。

百瀬(2018)は、インタビュー談話においてフィラー的に使用される「で」の出現率が、接続詞系フィラーの中で最も高いと指摘している。しかし、百瀬が示すその判断基準は、主として統語的な位置に依拠している。具体的には、以下のように示されている。

- (5) 〈接続詞かフィラーか〉

・「その時、雨が降ってきた。で、傘をさして、」(⑥)

→上記文の「で」は文頭に置かれ接続詞として機能していると考えられるため、これを接続詞とする。

・「僕だって、で、それからいろいろあって、で、どうしようもなかったから。」(③)

→上記文の「で」は文中に置かれて接続詞としてではなく発話をつなぐ形式として機能していると考えられるため、これをフィラーとする。

(百瀬 2018:36)

百瀬(2018)が⑥の「で」を接続詞として判断したことは妥当であると考えられる。しかし、③の「で」を、「文中に置かれて接続詞としてではなく発話をつなぐ形式」であるという理由のみでフィラーと断定することには、根拠が不十分であると言わざるを得ない。会話においては、接続詞は談話標識として発話と発話をつなぐ機能を担うため、「発話をつなぐ」という機能だけでは、必ずしもフィラーであると結論づける

ことはできない。

これらの先行研究が示唆するように、「で」が接続詞として機能しているのか、あるいはフィラーとして機能しているのかを判別するための明確な基準を設定することは困難である。むしろ、両者の境界は連続的であり、その具体的な現れは文脈に大きく依存するため、単純な二分法で捉えることは適切ではないと考えられる。

したがって、研究アプローチとしては、「で」の使用を観察する際に、単に「時間を稼ぐ」や「言い淀み」といった機能のみでフィラーと即断するのではなく、まず統語的・談話的観点から明らかに接続詞としての機能を持たない「で」の用例を慎重に抽出し、その上でこれらの用例が持つ具体的な特徴を詳細に分析することが求められる。このような手続きを経ることにより、「で」の機能の連続性をより精緻に把握することが可能になると期待される。そして、この分析を通じて、接続詞とフィラーという二項対立的な捉え方ではなく、「で」が持つ多様な談話機能をより体系的に記述することを目指す。この観点から、本章では、実際の会話資料において出現する「で」を観察し、その前後文脈における具体的な機能を分析する。

6.3 使用したデータと「で」の出現位置

接続詞は典型的に文頭に位置し、先行する文と後続する文との論理的関係を明示する。これに対し、フィラーは発話中の出現位置が比較的自由であり、明確な接続関係の表示や文法的な機能を担わないとされる。したがって、「で」の多様な機能を詳細に分析する上では、会話文中における具体的な出現位置を観察することが不可欠である。この観点から、本節では、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)より収集した日本語母語話者の会話データに含まれる216例の「で」を分析対象とする。分析に用いるデータの概要は以下の通りである。

データ	第一次データ
人数	15名 ²⁹
タスク	対話(I)(各30分程度)・ロールプレイ(RP)
発話総数	2818
「で」の回数	216

タスク紹介³⁰:

対話:30分程度

²⁹ 被調査者の出身地が異なるが、調査においては共通語で会話が行われた。

³⁰ 以下は「I-JAS 利用マニュアル簡易版 データの概要と検索システムの使い方 2020年11月 Ver. 4」によりまとめ (https://chunagon.ninjal.ac.jp/static/2.7.2.4/ijas/I-JAS_Manual.pdf)

以下のような、ある程度決められた流れのもと、調査者(日本語母語話者)とできるだけ自然な会話を行なった。

- ウォーミングアップ
- 現在のことを聞く
日本語学習の動機、好きな本・ドラマ、
出身地の産物、観光スポットなど
- 過去の体験を聞く
誕生日の祝い方、幼少期の体験、恩師の話
怖かった・辛かった体験など
- 未来のことを聞く、意見陳述
将来の夢、議論「都会に住むか田舎に住むか」
議論「お金と時間とどちらが大事か」など
- クールダウン
ロールプレイ

状況:学習者:日本料理店でのアルバイト(接客)、週3回勤務

調査者:日本料理店の店長

①依頼:週3日のアルバイトを週2日にしてもらう

あなたは、日本料理店でアルバイトをしています。接客スタッフとして注文を取ったり、料理を運んだりしています。勤め始めてからずっと接客の仕事をしてきたので、この仕事にもすっかり慣れ、知り合いのお客さまも増えました。今は、一週間に三日アルバイトをしています。しかし、忙しくなってきたので、一週間に二日に変更したいと思っています。そこで、店長に言って三日から二日に変えてもらうように頼んでください。

②断り:ホールから調理に変わるように依頼され断る

あなたは、日本料理店でアルバイトをしています。接客スタッフとして注文を取ったり、料理を運んだりしています。店長さんから、「料理を作る人が一人やめたので、来月から料理を作る仕事を担当してほしい」と言われました。しかし、あなたは料理は苦手だし、日本人と話せる仕事がしたいので、この話を断りたいと思いました。店長に、料理の仕事の話をじょうずに断って、今の仕事を続けられるように話してください。

表 6.1 15 名日本語母語話者による「で」の使用回数

ID	使用回数	延べ回数
JJJ-01	8	8
JJJ-03	21	29

JJJ-09	8	37
JJJ-10	10	47
JJJ-11	15	62
JJJ-12	15	77
JJJ-14	18	95
JJJ-15	13	108
JJJ-17	9	117
JJJ-26	14	131
JJJ-30	23	154
JJJ-35	2	156
JJJ-37	24	180
JJJ-50	30	210
JJJ-57	6	216

表 6.1 に基づくと、調査対象となった 15 名の日本語母語話者全員が「で」を使用しているものの、その使用頻度には個人差が認められる。

次に、収集した 216 例の「で」を、その出現位置に基づいて「発話冒頭」および「発話途中」に分類した。今回の収集データにおいては、例(6)で示されるように、「で」が発話末尾に位置する用例が 1 例のみ確認された。しかし、当該用例の会話の流れを詳細に検討した結果、これは話者の発話意図によるものではなく、聞き手による「すみません」という割り込みによって話者の発話が中断されたために生じたものと判断される。したがって、この 1 例も発話途中の用例として分類することが妥当であると考えられる。

- (6) JJJ57-I-00480-K: あー、熱中してることですかー? 〈はい〉 えっとー、私あの一、
松山ケンイチさんの、〈はい〉 ファンで 〈へー〉、あの、テレビの
ドラマで、見てから 〈うん〉、あのとっても大好きになって

JJJ57-I-00490-C: あそうですか

JJJ57-I-00500-K: あの、ぜひ一度お会いしたいと思って

JJJ57-I-00510-C: あ、そんなにですね

JJJ57-I-00520-K: はい、あの、エキストラ、に参加を、してみたんです

JJJ57-I-00530-C: そうなんですか

JJJ57-I-00540-K: はい、で

JJJ57-I-00550-C: すいません、それはドラマですか?

(JJJ57-I (表記を一部変更、以下も同様))

以上の分類に基づき、本データにおける「で」の出現数は、発話冒頭が 49 例、発話途中が 167 例となった。

以下に、発話冒頭および発話途中に見られる「で」の具体的な用例を提示する。

(7) JJJ01-I-00690-C: うい浮いてる感じですか

JJJ01-I-00700-K: 浮いてるんですよ

JJJ01-I-00710-C: へー、すごーい、なんかイメージではありますけど実際見れることってねー

JJJ01-I-00720-K: {笑} そう、なんですよでーなんか

JJJ01-I-00730-C: なかなか、うん

JJJ01-I-00740-K: でーなんか運が良くないと〈えーえー〉、せっかくそこまで行っても、見えない日も〈はーはーはー〉、あるらしくて〈あー〉、たまたまその(連体詞)日は良く見える日だったみたいです

(JJJ01-I)

例(7)のようにターン交替時に現れる「で」を発話の冒頭と定義する。一方、例(8)のように話し手のターンの途中に現れる「で」を発話の途中と定義する。

(8) JJJ37-I-00500-K: え、熱中ですかー〈うん〉そうですね何でしょう(なんでしょ. う)、えー熱中ーんー〈うん〉、熱中というほどではないんでしょう. が〈ええ〉ちょっと興味があってー

JJJ37-I-00510-C: あーはいどうぞ

JJJ37-I-00520-K: やって見たら面白かったというものですけれども〈はい〉あのーテレビで日本でもね、〈はい〉昔から『ウルトラマン』とか『仮面ライダー』とかヒーローいますけれどもね〈ええ〉あれが今あのー中国とか他(ほか)の国でもー〈はい〉日本からーあのスタッフが行ってー現地で、現地のヒーローを作ってるんですね〈ふーん〉で、そういうのがあるよってたまたま知り合いが教えてくまして、〈はい〉で、どんなもんだろうかと思って、まああの今インターネットで今、ユー何(なに)、ユーチューブって言ってるでしょうかね〈はい、うん〉で、とかああいうのとかで今動画が見られますから〈ええ、ええ〉たまたまそれを見てみたら、まあ、向こうの母国語で話されてるのでー〈あー〉わからないですけど、〈はい〉あ、向こうでもこういうものやってるんだーと思ってちょっと見たりとかを、したという〈へ

しかしながら、発話途中に現れる「で」は、発話冒頭の「で」のように常に文法的に一貫した位置に出現するとは限らない。例えば、例(8)においては「で」が3回出現しているが、そのうち2例は「作ってるんですね。で～」や「言ってるでしょうかね。で～」のように、統語的に完結した節の直後に位置している。残る1例は、「教えてくれまして、で～」のように、動詞のテ形に後続する形で観察される。このような出現位置の多様性を踏まえ、本研究では発話途中に現れる「で」を、その具体的な出現位置に基づいてさらに下位分類する。

表 6.2 「で」の出現位置

発話の冒頭		49	
発話の途中 ³¹	167		
	主な出現位置	テ・デ形	66
		統語的に完結した箇所	37
		感動詞・間投詞・応答詞	26
		が・に・と・からと いった格助詞	10
		名詞	7
		け(れ)ど(も)・が	6
		ので(んで)	4
	その他	ずに	2
		たり	2
		し	2
		たら	1
		とか	1
		身に付け	1
		やっぱり	1
みたいな	1		

³¹ 発話の途中の出現位置については、「で」の前接要素を分析し、その特徴を整理した。

表 6.2 に示す通り、発話冒頭における「で」の用例は 49 例であり、これは発話総数(2818)の約 1.7%に相当する。一方、発話途中の用例は 167 例と、発話総数の約 5.9%を占めている。この結果から、「で」は発話の冒頭よりも途中でより頻繁に使用される傾向があると言える。さらに、発話途中の「で」に注目すると、動詞のテ形・デ形に後続する事例が最も多く、次いで統語的に完結した箇所の後、および感動詞・間投詞・応答詞の後に多く出現する傾向が確認された。

以下では、それぞれの出現位置における具体的な用例を提示する。

テ形・デ形の後

- (9) JJJ37-I-00520-K: やって見たら面白かったというものですけれども〈はい〉あのーテレビで日本でもね、〈はい〉昔から『ウルトラマン』とか『仮面ライダー』とかヒーローいますけれどもね〈ええ〉あれが今あのー中国とか他(ほか)の国でもー〈はい〉日本からーあのスタッフが行ってー現地で、現地のヒーローを作ってるんですね〈ふーん〉で、そういうのがあるよってたまたま知り合いが教えてくれまして、〈はい〉で、どんなもんだろうかと思って、まああの今インターネットで今、ユー何(なに)、ユーチューブって言ってるでしょうかね

(例(8)の一部を再掲)

感動詞・間投詞・応答詞の後

- (10) JJJ50-I-00040-K: えっとー、入間市、ですね
JJJ50-I-00050-C: あ、そうですか、入間
JJJ50-I-00060-K: 入間ってー
JJJ50-I-00070-C: からだと一時間ぐらいはかかりますよね？
JJJ50-I-00080-K: そうですねあの、天気も良かったんで〈ええ〉、玉川上水から歩いて来ましたので
JJJ50-I-00090-C: ああー、あそれはかなり
JJJ50-I-00100-K: うん、で、に、二時間ぐらいかかって {笑}

(JJJ50-I)

- (11) JJJ12-I-00190-C: 手袋ですか〈はい〉まだあんまり、寒くないですけど
JJJ12-I-00200-K: あ、えーと、えーあー昨日誕生日だったんですけど、はい
JJJ12-I-00210-C: あ、おめでとうございます {笑}
JJJ12-I-00220-K: はい、あ、えーと、でえーと、で、えーと手袋オーダー手袋のお店があったので〈へー〉えーとオーダー手袋のお店に行って手の大きさを測って〈はい〉もらって〈はい〉、えとま、

まあちょうど、ちょうど自分の誕生日だったので〈はい〉えーと作ってもらってできあがるのがちょうど十一月ぐらいなのでまあ今から頼めば〈へー〉ちょうどいいかなと、はい

(JJJ12-I)

が・に・と・からといった格助詞

- (12) JJJ35-I-02220-K:今考えると怖いですけど、それが慣れてしまつて、〈うんー〉あぁ。すごい学校に来たんだなとゆうか〈うーんー〉まあちょうどそういう荒れてた時期だったのか今じゃもうまったくないんですけどそういうのは

JJJ35-I-02230-C:あぁーそうなんですか

JJJ35-I-02240-K:まったくないんですけども〈はい〉その(連体詞)時は、ああすごいなあというかそれに慣れてしまったってゆうのがが〈はあ〉で毎なんかもう非常ベルは鳴るわあの

(JJJ35-I)

- (13) JJJ30-I-01240-K:盆地ですかねー

JJJ30-I-01250-C:あ、そうですかー

JJJ30-I-01260-K:でもすごい住みやすくて〈へー〉都内にも出れますし〈うんうんうん〉、一本で、で横浜に、も行けますし〈あー〉すごく、便利です

(JJJ30-I)

- (14) JJJ30-I-01820-K: {笑} で、えーと、司会の方(かた)が〈はい〉じゃあ最後の番号を、言いますみたいな感じで〈うんうん〉彼女が当たって〈はい〉でステージに、来て〈うんうんうん〉でその(連体詞)時に彼が、あのサプライズで指輪を持ってきてて、パカッと〈おー〉でその(連体詞)時に、私はピアノの準備をしていてあともう一人歌う人がいたんですけど〈へー〉でそこで、あの一、スマップの〈うん〉『らいおんハート』という、ほんとに、ラブソングを〈はい〉歌って、最後のサビのところは〈はい〉スクリーンに、歌詞を、出して〈うーん〉で会場にいる全員が合唱するという

(JJJ30-I)

- (15) JJJ09-I-01030-C:し始める? 〈はい〉えっ変装してるんですか?

JJJ09-I-01040-K:はいかつらと〈はい〉眼鏡と一、〈うんうん〉で制服かなんかを着てるかな、〈はいー〉はいー学生っぽくして〈えーえー〉現れて一、〈へー〉はっちゃかめっちゃかー(しっちゃかめっちゃ

やか)

(JJJ09-I)

- (16) JJJ30-I-00950-C:面白いですねー、へーどんなところがアニメになっちゃうんですか？

JJJ30-I-00960-K:なんか、その、相葉君、主人公の相葉君の、が、こう、漫画を書くのが好きで小さい頃(ころ)から〈はい〉、でその(連体詞)漫画が、アニメとしてあの、実際に出てくるんですね〈ふーん〉、で相葉君に、アドバイスをしたりとか

(JJJ30-I)

名詞

- (17) JJJ26-I-02700-K:で、家賃、家賃も一万円で貸してくれるんですがー、〈ええ、ええ、ええ〉ただ条件が三つありましてー、〈はい〉一つはー、あの一、もう日本屈指の豪雪地帯なんでー、〈うんうん〉あの近くのお年寄りとかーの、雪かきとかを手伝える方(かた)、〈うんうんうん、はい〉で、二つ目がー、一番近いお店が車で一時間だけど、それが大丈夫な方(かた)、〈はい〉で、この(連体詞)二つはー、私は、ん、まあ住む以上はクリアできなくはないと思うんですがー、問題がもう一つ目

(JJJ30-I)

け(れ)ど(も)・が

- (18) JJJ37-I-02280-K:教育関係というの大げさんなんですが〈んー〉私は先生にはなれませんけれどもー〈ええ〉教育関係のところー施設で働きたいっていうのはありますですね〈ふーん〉まあ学校卒業して一就職した時がまあ〈はい〉民間のーそういう企業で〈あー〉まあ主に接客とかをやってきたんですけれどもーまあその(連体詞)中でうん、たまたまなんですけれどもー〈うん〉ある時期ちょっとまあ仕事をーまあ体壊してたのもあったんですけども〈うん〉でちょっとその(連体詞)仕事を辞めましてー〈はい〉でまあいろいろとこう、今ね派遣でやったり契約社員とかいろいろありますけれども〈うん〉そういうお仕事の中でーたまたまね、あるまあ大学さんの図書館とか〈はい〉のまあお仕事とかまああとは大学院とかのこう事務とかありますけども

(JJJ37-I)

ので(んで)

- (19) JJJ14-I-00490-C:そういう飲み物が好きだからかなと思って

JJJ14-I-00500-K: いや、なんかたまたまタイミングが良くてたし(私)そんな時
(その時)ちょうどカナダにホームステイにしに行ってたんです
(いってたんです)けど〈あ〉その(連体詞)前にアルバイトを辞
めて〈はい〉、行った(いった)ので〈うんうん〉から(だから)
探さないとなと思って〈ああー〉で探してたらちょうど、あつ
たのででコーヒー、カフェ、で一回働いてみたいなっていうこ
ともあったので〈うんうんうん〉はい

(JJJ14-I)

その他

(20) JJJ03-I-01280-K: でな、かなか頭はもう人間で、こう右手だけ寄生虫に寄生さ
れたみたいなんかいりいろ、特殊な能力を身に付け、でな
んか手が伸びるだとか、変形するだとか〈んーんーんーんー〉

(JJJ03-I)

(21) JJJ03-I-01280-K: でなんか手が伸びるだとか、変形するだとか〈んーんーんー
んー〉で、えーっと、その人間側としてはその寄生虫ってのは、
まあ、まあ、いわまあ害虫みたいな物で、〈ん、ん、ん〉まあ殺
してしまえばいいんじゃないかという話、になるんですけど

(JJJ03-I)

(22) JJ09-I-02140-K: 記念日プランは一ちょっとしたものなんですけどー〈えー〉旅
館でーワインがー部屋にーおい〈あー〉置かれていたりーケー
キ

JJJ09-I-02150-C: すごいすごーい、すごいじゃないですかー

JJJ09-I-02160-K: ちょっとしたのが置かれていたりー、で食事の時には二人ー
ツーショットの写真を〈はー〉撮ってくれたりとかー

(JJJ03-I)

(23) JJ10-I-00640-K: そしたらー、九時間は歌えたんですけれどもー

JJJ10-I-00650-C: 九時間ですか？

JJJ10-I-00660-K: はい、でもなんか違う、〈うーん〉なんかおしゃべりがないと
つまらない〈はいー〉これはやっぱり、で相手が歌ってる間は
に休憩もできるから

(JJJ10-I)

(24) JJJ26-I-01820-K: えっとー、今からー、あれもう六、七年くらい前にー、〈はい〉
あのー、日本の航空宇宙〈ああ、はい〉のジャクサ、さんでー
ー、〈は い〉やってたー実験でー、まあ重力、無重力空間とか

一、重力の違う一、星、に一、〈うーん〉や、その(連体詞)宇宙船に乗っていることを想定した一、その一、なんでしょう、パイロット、とういかその一、宇宙飛行士、にかかるいろんな負荷を、調べる実験というのに一か月参加したんですが、〈へえ一〉その(連体詞)時は、もう基本的には三週間ベッドから置き上がれずに、で、しかも頭を、マイナス六度、平行より傾けて一、頭のほうが下(に)なる状態でずっと三週間いるんで一、〈え一〉これ、頭に血が上って、〈はい〉なんか血栓とかできないのか心配したんですけど、〈はい〉まあ今ピンピンしているんで、まあ大丈夫でしたね、〈え一〉ただ、一番びっくりしたのが、三週間後起き上がった時に一、〈はい〉なんかものすごい目線が高くな、ったイメージがあったんですけど、まあ、なんでかと言ったら、あ、身長が七センチ伸びる、伸びてたっていう

(JJJ26-I)

- (25) JJJ37-I-02360-K:やはりあの一まあ何にしてみても(なんにしてみても)便利だというところがあるかと思いますね一〈ん一〉私の住んでいるまあ、埼玉のほうほぼ群馬なんですが一〈はい〉あの一電車やバスはあるんですね、あるんですけど車を運転できないと何も(なんにも)できないですね〈ん一〉もう買い物に行くにしてみても〈はい〉遊びに行くにしてみても車がないと話にならないですし〈うんうん〉でその(連体詞)点あの都内一まあこの(連体詞)辺りでしたら一まあだいたいもう一普通に一歩いていけばもうお店が、まあ駅前だけでもたくさんありますよね

(JJJ37-I)

- (26) JJ14-I-02220-K:はは早く結婚しろみたいな感じで言われてて {笑} {咳} ちょっとださかったです

JJJ14-I-02230-C:ああそうなんですか 〈笑〉、あんまり興味がない感じ?

JJJ14-I-02240-K:え何(なん)か行きつけの美容師さんが〈うん〉もう行きつけになっちゃったから、それ以来もう他(ほか)の美容院に行けないみたいな、で毎回同じ髪型にされてって感じでした

(JJJ14-I)

- (27) JJ10-I-00890-C:『赤毛のアン』のアニメですか?

JJJ10-I-00900-K:そうですアニメで〈へー〉子供たちと見るだったら一、〈はい〉で一テレビー普段見るテレビは一〈うんうん〉もう大河ドラマ

6.4 「で」は接続詞かフィラーか？

市川(1978)、日本語記述文法研究会(2009)、石黒(2008)などによれば、接続詞は前後の文を接続し、その論理的関係を示す機能を担う表現であるとされている。

一方、フィラーに関しては、研究者間で多様な見解が提示されている。まず、Schiffrin(1987: 31-32)は、"oh" "well" "and" "but" "or" "so" "because" "now" "then" "I mean" "y'know"といった語句を談話標識(Discourse markers)の一種と捉え、これらを順序依存要素(Sequentially dependent elements)と定義している。一部の談話標識、例えば"y'know" "I mean" "oh" "like"は統語構造から独立した特性を有し、その出現位置には相対的な自由度がある。Schiffrin(1987)が論じた"discourse markers"と本研究で扱うフィラーは必ずしも同一ではない。しかし重要なのは、その出現位置の自由度、あるいは標識を文頭から取り除いても文の構造に影響がない(Removal of a marker from its sentence initial position, in other words, leaves the sentence structure intact.)という点である。また、野村(1996:93)はフィラーを「本来の語彙的な意味から離れて用いられ、それを削除しても発話全体の命題的な意味が変わらないような語句」と定義している。山根(2002:49)は、「それ自身命題を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係を持たない、発話の一部を埋めることば」と規定する。これらの定義を踏まえ、中島(2011:179)はフィラーを「それを取り去っても伝達する文・談話の命題内容に変化を及ぼさないもの」と定義している。これらの先行研究から、フィラーの主要な特徴として、「出現位置の相対的自由性」「本来の語彙的意味の希薄化」「意味的独立性の欠如」「削除可能性」といった点が抽出される。これらの知見を総合的に考慮し、本章ではフィラーを以下のように規定する。

- (28) それ自身で命題を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係を持たない、談話構成上の機能を持たない、発話の一部を埋めることばであり、それを取り去っても伝達する文・談話の命題内容に変化を及ぼさないもの

接続詞であれ、フィラーであれ、「で」は談話標識の一種として捉えることが可能であり、談話標識は一般に会話の構造を明示し、談話の流れを形成し、話者間での相互作用において重要な役割を果たす。そこで本章では、それらの定義を踏まえ、談話標識研究の枠組みから「で」の機能を捉え直していきたい。

6.4.1 会話における「で」の用法

本章では「で」の用法を「単純な接続詞的用法」「談話構造へ貢献する用法」「フィラー的用法」の三つに分類するが、この分類は以下の理論的根拠に基づいている：

単純な接続詞的用法：主に隣接する文や節を接続する。命題間の論理関係（時間的継起、因果関係など）を明示する機能をしている。

談話構造へ貢献する用法：接続の機能が後景になり、その代わりに「談話操作標識」(Discourse operators)の「連続的構造」(Sequential structure)³²に相当し、談話の階層構造を示したり、話題の転換や展開を制御したりする機能が前景になる。

フィラー的用法：接続の機能や談話構造上の機能がほとんどなく、発話の処理を支援や発話権の維持など、談話の流暢性に関わる機能を担う³³。

この分類に従い、6.3 節で各位置に現れる「で」を検討した結果、単純な接続詞と

³² Redeker(1991)は、「談話標識」(Discourse markers)を「談話操作標識」(Discourse operators)として再定義し、談話の一貫性を保つ主要構成要素として「概念的構造」(Ideational structure)、「修辞構造」(Rhetorical structure)、「連続構造」(Sequential structure)という三つの要素を提示した。

「概念的構造」(Ideational structure)："Two discourse units are ideationally related if their utterance in the given context entails the speaker's commitment to the existence of that relation in the world the discourse describes. Examples are temporal sequence, elaboration, cause, reason, consequence, and so forth." (p. 1168) (二つの談話単位は、与えられた文脈でそれらが発話されると、話し手がその談話が描写する世界においてその関係が存在することに対するコミットメントを含意する場合、観念的に関連していると言える。例としては、時間的連続性、精緻化、原因、理由、結果などがある。)

「修辞構造」(Rhetorical structure)："Two discourse units are considered to be rhetorically related if the strongest relation is not between the propositions expressed in the two units but between the illocutionary intentions they convey." (p. 1168) (二つの談話単位は、最も強い関係性が二つの単位で表現された命題間ではなく、それらが伝える発話意図間にある場合に、修辞的に関連していると考えられる。)

「連続構造」(Sequential structure)："Sequential transitions are paratactic or hypotactic relations between ideationally and rhetorically only loosely related adjacent discourse segments. A paratactic sequential relation is a transition between issues or topics that either follows a preplanned list or is locally occasioned, as for instance in conversation. Hypotactic sequential relations are those leading into or out of a commentary, correction, paraphrase, aside, digression, or interruption segment." (p. 1168) (連続的推移は、観念的および修辞的に緩やかな関連性を持つ隣接する談話セグメント間における並列的または従属的关系と定義される。並列的連続関係とは、事前に計画されたリストに従うか、あるいは会話などにおいて局所的に生起する問題やトピック間の推移を指す。一方、従属的連続関係は、注釈、訂正、言い換え、傍論、逸脱、または中断セグメントへの導入もしくはそこから離脱を導く関係性である。)

本章の「で」は会話においては、出来事や物語を説明するとき、主に話題の転換や展開を制御したり、談話の階層構造を示したりする機能を持っている。このような特徴は、「連続構造」(Sequential structure)には話題転換の提示や、談話の流れの中で異なる視点への移行、注釈、解説、訂正、言い換えなどの特徴に合致している。

³³ 「で」は会話における用法は連続的なスペクトラムを成しており、示された三つは典型的な段階に過ぎず、その間にも様々な中間的用法が存在することが否定できない。

して用いられる「で」はほぼ見られず、フィラー的な用法として使われる「で」も少ない。最も多く観察されたのは談話構造に貢献する「で」である。また、「で」は単一の用法ではなく、複合的な用法を同時に持つケースが圧倒的に多いことが観察される。

まず、最も多く観察された談話構造へ貢献する用法の用例を見てみよう。この用法は、今回のデータにおいては、一連の出来事や物語を説明する文脈でよく使用されている。たとえば、例(29)、例(30)である。

- (29) JJJ37-I-00770-C: あーそうなんですかー、その(連体詞)『ベイマックス(映画名)』っていうのは一えっとどんなストーリーなんですか
JJJ37-I-00780-K: あ、あの一お兄さん、まあ主人公の男の子がいてー〈はい〉その(連体詞)お兄さんが作った医療用のロボットっていうのがあるんですね〈あーはい〉 でーその(連体詞)ー医療用のロボットーを、とこうー仲良くなつてですね〈うんうんうん〉 で、まあお兄さんがちょっと事故で亡くなってしまうんですけど
(JJJ37-I)

例(29)では、一つ目の「で」は文が統語的に完結した後(「いるんですね」で終わる文)、聞き手の相槌(「あーはい」)を受けた後に出現している。局所において見ると、「で」は指示詞「その」と共起しており、「お兄さんが作った医療用のロボットっていうのがあるんですね」という先行文と「その(連体詞)ー医療用のロボットーを、とこうー仲良くなつてですね」という後続文を接続している。「ロボットがいる」→「仲良くなった」という継起的な関係を示していると解釈できる。これに対して、談話の構造においては、この「で」は後続する「医療用ロボット」という要素を焦点化し、その詳細説明への移行を示している。「で」の母音の引き延ばしによって話者が発話計画のための時間を確保している点も注目される。

二つ目の「で」も統語的に完結した後(「なりました」で終わる文)に現れている。局所には「その(連体詞)ー医療用のロボットーを、とこうー仲良くなつてですね」という先行文と「まあお兄さんがちょっと事故で亡くなってしまうんですけど」という後続文を繋いでいる。「仲良くなる」→「お兄さんが亡くなる」という時間的順序を示している。談話構造には物語の重要な転換点(主要キャラクターの死)という構造的境界を示している。

上記の二つの「で」は統語的に完結した箇所の後に出現し、前後の文を繋げながら、連続使用によって話し手が計画した順序(主人公がいる→お兄さんが作ったロボットがある→二人仲良くしている→お兄さんが亡くなった)に従って話題を展開していくという特徴を持つ。このような「で」は、接続詞としての役割を担いながら同時に

談話を構造する機能も有しており、まさに接続詞的用法と談話構造へ貢献する用法の複合的な性質を示している。

次の用例(30)も同様に分析できる。三つの「で」はいずれも統語的に完結した文末の後に出現しており、3回の連続使用によって物語が段階的に展開されている。これによって、アニメ映画『アナと雪の女王』のストーリー説明において複雑な物語展開が聞き手にとって理解しやすい形で構造されている。

- (30) JJJ12-I-00980-K: ア、アナ(登場人物名)の命が危なくなっただけけれども、えー国王、がなんだっけトロール、トロールの所に〈うんうん〉連れていって治してもらいました、で、えー二人は育っていく途中で、えーご両親国王と、えーとお妃さんが、えー船の事故で亡くな、りましたでその後(そのあと)、エルサ(登場人物名)がにじゅ、二十歳(にじゅっさい)だかな(だったかな)二十歳(にじゅっさい)大人になった時、えーた、戴冠式、じゅ、女王、女王になるべく戴冠式、戴冠式を開くことになりました、で戴冠式の日アナ(登場人物名)は〈うん〉えー外から来た王子、と恋に落ちて

(JJJ12-I)

一方、テ・デ形の後に出現した「で」は接続詞的用法というよりも、もっぱら話し手が物語や出来事を構造的に展開していく標識となっている。

- (31) JJJ50-I-02600-K: そうですねー、あの、ちょうどよ、四年生の時に、〈はいい〉若いー女性の先生が新任で来て〈えーえーえー〉、みんなで懂れましたねその(連体詞)先生 {笑}、うん

JJJ50-I-02610-C: はい、それはこう授業がいいとかそういうあれではなく、こうやっぱり

JJJ50-I-02620-K: いやもうただただ、いやあの、

JJJ50-I-02630-C: アイドルの存在

JJJ50-I-02640-K: あの、あの(連体詞)頃にしたらやっぱりすごいきれい、〈ふーん〉で、とにかく惹くて〈えーえーえーえーえーえー〉、で、なんか途中で、入院されて〈はい〉、でみんなでー、お見舞い、行きましたねー〈ふーん〉、sonだけ人気のあった先生で〈はい〉、でかわいそうなんはその(連体詞)一代わりに来た先生が〈はい〉、やっぱり、き、嫌われましたねー

例(31)では、話し手が4つの「で」を用いて、新任の先生が人気があったが入院し、そのかわりにきた先生が嫌われたという一連の出来事を説明している。この説明は、単純に時間の順序で展開しているのではなく、話し手の主観によるものである。たとえば、「すごいきれい、とにかく若く」、「かわいそう」などの評価的情報も提供されている。このような一連の出来事の説明では、テ・デ形が基本的な接続機能を果たしているため、その後に現れる「で」は談話を構造的に展開していく標識として働いていると考えられる。つまり、「で」は文と文をつなげるだけでなく、より大きな談話単位を組織化する役割を担っているのである。

今回のデータにおいては、テ・デ形の後に「で」が出現している用例が最も多く(66例)確認された。このことから、「で」は会話における従来の接続詞としての機能を超えて、より広範囲で機能する談話標識の一種になっていると考えられる。

また、発話の冒頭または感動詞の後に出現する「で」も接続の機能より、談話構造上に役割を果たしている。

(32) JJJ01-I-00040-K:今日はえっと、え電車乗っ、て

JJJ01-I-00050-C:電車乗って、はい

JJJ01-I-00060-K:でまあ、あの、立川からある、あ、歩い、ても来れるんですけど {笑} 〈えーえーえー〉、ちょっと大変なので

(JJJ01-I)

(33) JJJ50-I-00040-K:えっとー、入間市、ですね

JJJ50-I-00050-C:あ、そうですか、入間

JJJ50-I-00060-K:入間ってー

JJJ50-I-00070-C:からだと一時間ぐらいはかかりますよね?

JJJ50-I-00080-K:そうですねあの、天気も良かったんで〈ええ〉、玉川上水から歩いて来ましたので

JJJ50-I-00090-C:あー、あそれはかなり

JJJ50-I-00100-K:うん、で、に、二時間ぐらいかかって {笑}

(JJJ50-I)

用例(32)では、「で」は文の冒頭に現れているため、前後文脈を接続するのではなく、相手の確認(「電車乗って、はい」)を受けて「今日はえっと、え電車乗っ、て」という前のターンとの関連をつけながら、さらに詳細な状況説明(歩いてくることも可能だが大変)を導入している。このため、「で」は談話構造へ貢献する用法とみなせ

る。同様に、用例(33)では、「で」は「うん」という相手への応答の後に現れているが、前後文脈の論理関係を示すというより、「そうですねあの、天気も良かったんで〈ええ〉、玉川上水から歩いて来ましたので」というターンの続きを示している。

このように、発話冒頭の「で」および感動詞の後の「で」は、単なる接続詞としての働きを超えて、談話標識として機能し、談話の構造に貢献していると言える。

続いては、フィラー的用法として認めてもよい用例を検討する。

- (34) JJJ12-I-00190-C:手袋ですか〈はい〉まだあんまり、寒くないですけど
JJJ12-I-00200-K:あ、えーと、えーあー昨日誕生日だったんですけど、はい
JJJ12-I-00210-C:あ、おめでとうございます {笑}
JJJ12-I-00220-K:はい、あ、えーと、でえーと、で、えーと手袋オーダー手袋
のお店があったので〈へー〉えーとオーダー手袋のお店に行っ
て手の大きさを測って〈はい〉もらって〈はい〉、えとま、ま
あちょうど、ちょうど自分の誕生日だったので〈はい〉えーと
作ってもらってできあがるのがちょうど十一月ぐらいなのでま
あ今から頼めば〈へー〉ちょうどいいかなと、はい
(JJJ12-I)
- (35) JJJ11-I-00530-C:へーこれまで読んだ本の中で、一番こう、好きな本とか
JJJ11-I-00540-K:一番好きな本
JJJ11-I-00550-C:印象に残ってる本とかありますか？
JJJ11-I-00560-K:すごいマイナーなんですけども〈うん〉西尾維新さんっていう
〈ふーん〉作者さんが書いている、ちょっと不思議な、お話が〈ふ
ーん〉それもちょっとミステリー、で、なんですけど〈うん〉
現実味があんまりない、こう、なんていうんでしょう〈ふーん〉
なんだ、なんかすごい頭いい人が出てきたり〈うん〉一癖も二
癖もあるような人物が〈うん〉出てきたり〈ふーん〉するよう
な
(JJJ11-I)
- (36) JJJ30-I-01240-K:盆地ですかねー
JJJ30-I-01250-C:あ、そうですかー
JJJ30-I-01260-K:でもすごい住みやすくて〈へー〉都内にも出れますし〈うんう
んうん〉、一本で、で横浜に、も行けますし〈あー〉すごく、便
利です
(JJJ30-I)

例(34)～(36)は「で」がフィラー的用法とみなせる用例である。用例(34)では、聞き手からの「あ、おめでとうございます」というお祝いによって話の計画が中断されたため、「はい」という応答の後に言い淀みが現れた。その後、「でえーと、で、えーと」という連続使用によって、話し手が「えーと」で「心的操作」³⁴を行うと同時に、発話権を維持しつつ、「手袋オーダー手袋のお店」という話題を持ち出すための時間稼ぎをしている。ここでの「で」は接続関係や談話構造の構築との関係が薄くなり、フィラーに近い用法を持つようになった。

一方、用例(35)と(36)では、「で」は述語の前および格助詞の後に出現しており、接続詞としての通常の統語的位置(文頭や文間など)から逸脱している。「それもちよっとミステリー」「一本で」の後にポーズ(コンマ)があり、話し手の情報伝達が一旦区切れた後に「で」が出現している。これは話し手が発話権を維持しながら言葉の処理を支援するフィラー的用法であるといえる。

収集したデータには単純な接続詞の用法が見られないが、そのような用法が存在しないとは言えない。たとえば、次のような会話例が考えられる。

(37) -昨日は頭が痛かった。で、学校に行かなかった。

-それは大変だったね。今日はもう大丈夫？

(作例)

例(37)では、「で」は文と文の間に位置しており、「頭が痛かった」→「学校に行かなかった」という明確な因果関係がある。話し手が意識的に「で」を使用していると言える。この「で」は「そのため」や「それゆえ」に近い機能を果たしている。この用例は、「で」の最も基本的かつ典型的な接続詞としての用法を示している。この場合の「で」は論理的な機能に集中しており、談話標識としての拡張機能やフィラーとしての性質はほとんど見られない。

本章で収集したデータに、このような用例が観察されなかった理由は、主に以下の2点が考えられる。一つ目は、自然会話は事前に準備された原稿に基づくものではなく、リアルタイムで構築されるという特性を持つ。すなわち、話し手は発話と同時に次の内容を構想し、また聞き手の反応に応じて談話の方向性を調整する必要がある。この過程では、言い直しや補足といった現象も頻繁に生じる。このような即時的な談話構築が求められる状況においては、単に文と文を論理的に接続する機能だけでは不

³⁴ 田窪・定延(1995:78)では、「ええと」の基本的用法は心的操作(検索・計算)のための「演算領域確保」ことである。「ええと」を発話することによって、話し手はこの演算領域確保操作を通じて、目的となっている当該の検索・計算操作を明確化でき、支援できる。」

十分となり、より多様な談話操作を可能にする要素が求められる。二つ目は、自然会話における「で」は、すでに単なる接続詞としての枠組みを超え、談話全体の構造へ貢献することに寄与する、より抽象的な機能を持つ表現へと変化している可能性が考えられる。

6.4.2 まとめ

以上の分析によれば、「で」は会話において次のような特徴が見られる。

表 6.3 「で」は会話における用法

項目	接続範囲	出現位置	主な機能	情報の流れ	例文
単純な接続詞的用法	主に隣接する文や節	統語的完結した箇所 の後、一般的単独で使用される	時間的・論理的接続	時間順・因果順に従う	「昨日は頭が痛かった。 <u>で</u> 、学校に行かなかった。」(作例)
談話構造へ貢献する用法	より大きな談話単位・話題全体	主にテ・デ形の後、かつ連続使用が特徴である 発話の冒頭	談話構造の操作	客観的な事実を述べる場合でも、それらをどのような順序で提示するかは、話し手の主観的な意図や判断によって構成することが可能	「とにかく若くて、 <u>で</u> 、なんか途中で、入院されて、 <u>で</u> みんなで一、お見舞い、行きましたねー、そんだけ人気のあった先生で、 <u>で</u> かわいそうなんはその一代わりに来た先生が、やっぱり、き、嫌わ

					れましたねー」(JJJ50-I)
フィラー的用法	基本的に接続機能は弱い・消失 談話構成上の機能はない	通常の統語的位置(文頭や文間など)から逸脱し、文の内部構造に現れる(名詞と述部の間、並列構造の途中など)	言葉の処理の支援・発話権の維持など	—	「はい、あ、えーと、 <u>で</u> えーと、 <u>で</u> 、えーと手袋オーダー手袋のお店が」(JJJ12-I)

この表から、「で」の機能拡張の一側面をうかがい知ることができる。すなわち、「で」は接続詞としての基本的な機能を保持しつつも、より広範な談話標識として機能するに至ったと考えられる。具体的には、「で」には文間から文の内部構造へと出現位置が変化するとともに、その機能も命題間の論理関係表示から、談話の構造、さらには言葉の処理支援や発話権維持といったフィラー的なものへと拡張していることが観察される。

6.5 結論

本章では、従来接続詞として扱われてきた「で」がフィラーとしての用法も獲得したという先行研究の指摘に着目した。しかし、これらの研究では、どのような場合に「で」が接続詞として機能し、どのような場合にフィラーとして機能するのか、その判別基準が明確に示されていなかった。そこで、本章では会話における「で」に焦点を当て、その出現位置と具体的な用法を検討した。その結果、本分析の範囲内では、「で」が単純な接続詞として用いられる例はほとんど確認されず、明確にフィラー的と断定できる用法も少数に留まることが明らかになった。多くの場合、「で」は談話構造の構築に貢献する機能を果たしていた。この点は、小出(2008)が述べた「既出話題であったり、現話題の関連話題であったりするが、それらの内容を展開・補完するなどして、談話構造上の次のステップに進むことを示す」という主張と整合的である。

ただし、小出(2008)は会話における「で」のフィラー的用法を積極的に認めてはいない。これに対し、本章の考察では、「で」が通常の文間の位置から逸脱し、名詞と述

部の間のような文の内部構造に出現する事例も確認された。このような文脈においては、「で」の接続詞としての機能や談話構造上の機能は相対的に弱まり、言葉の処理を支援したり発話権を維持したりするといったフィラー的な用法として解釈することが可能である。重要なのは、現時点で「で」を一律にフィラーとして認定するのではなく、会話の具体的な文脈によってはフィラーとして解釈されうる場合があるという点である。これは、「で」が談話標識として機能拡張を遂げている過程の一環として捉えることができるだろう。

第一部のまとめ

第一部「通時的記述」では、接続詞「で」の成立から現代に至るまでの歴史的変遷を、文法化理論の枠組みを用いて体系的に分析した。その結果、「で」の発展過程における以下の結果が得られた。

まず、「で」の成立過程について、第2章の分析により、「で」は明治後期に「それで」の文法化の結果として出現したことが明らかになった。この過程では、指示部「それ」の指示性の減少（意味の漂白化）、語用論的機能の増大、音韻的弱化、主観化・間主観化の進行という四つの文法化の特徴が段階的に観察された。特に、「それで」が「順接」から「添加」「転換」へと意味領域を拡張する中で、指示詞部分が意味的に冗長となり脱落したことで「で」が生じたと結論づけられる。この明治期には、「で」の主な文脈展開機能として「話題継続機能」が確立され、主な意味用法として「添加-つけ加え」が中心的役割を果たしていた。

続いて、第3章では大正・昭和前期における「で」の機能拡張を検討した。この時期には「添加-促す」の意味が15.8%から38.5%へと大幅に増加し、連続使用のパターンも顕著になった。また、統語的位置も文間から節間へと拡大し、「で」が単なる接続詞から談話標識としての性格を強めていく過程が確認された。さらに、この時期には文脈展開機能の多様化が進み、従来の「話題継続機能」に加えて、「話題開始機能」「話題終了機能」がみられはじめ、主な意味用法も「添加-つけ加え」「添加-促す」へと拡大した。

第4章および第5章では、文脈展開機能の観点から「で」の通時的変化を分析した。近代日本語では主に「話題継続機能」、特に「話を進める機能」が中心であったが、現代日本語では「話題開始機能」から「話題終了機能」まで7つの多様な機能を獲得している。特に注目すべきは、「で」が「それで」「そこで」と比較して最も「相互行為指向」が強く、指示性も最も弱いという特徴を示すことである。この変化は、「で」が論理的関係の表示から談話全体の構造へ貢献すると機能を拡張していく発展過程を反映している。

最後に、第6章では現代日本語における「で」のフィラー的用法を考察した。実際の会話データの分析から、「で」は単純な接続詞的用法、談話構造へ貢献する用法、フィラー的用法という三つの機能を連続体として持つことが明らかになった。最も多く観察されたのは談話構造へ貢献する用法であり、「で」が従来の接続詞としての枠組みを超えて、より抽象的な談話管理機能を担う表現へと変化していることが確認された。現代における「で」の意味機能は高度に多様化しており、「順接」「添加」「転換」といった基本的機能に加え、山本（2004）が指摘する「逆説」機能、石島・中川（2004）による「補足」「同列」機能など、多様な意味機能を獲得している。この機能の多様化は、「で」が単純な論理関係の標示から複合的

な談話管理標識へと発展したことを示している。

以上の分析を通じて、「で」は近世後期の「それで」文法化開始から明治後期の成立を経て現代に至るまで、接続詞から談話標識へ、さらには多機能的な談話管理標識へと段階的に発展してきたことが実証された。この変遷過程は、日本語における談話標識の発達メカニズムの典型例として位置づけることができ、言語変化における文法化の重要性を示している。

第二部 日本語教育への応用

第7章『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)から見た会話における「で」の使用実態について-日本語母語話者との比較を通じて-

7.1 はじめに

第一部では、「で」を成立から拡張まで通時的な観点から論じた。現代に至って、「で」は日本語母語話者の会話においては、最も使われる表現の一つになっている。例えば、石黒(2007)は11本の大学講義における接続詞の使用実態を分析し、文頭に接続詞を持つ文が全6717文中2481文、すなわち36.9%を占めると述べる。また、萩原(2012)は、異なる場面(初対面の人、友人関係、親しい友人、親しい男性同士、教師と学生)における接続詞の使用傾向を調査し、すべての場面で「で」の使用率が高いことを示した。

一方で、石黒(2017)では、中国語母語話者を対象とした調査から、「で」が他の接続詞に比べて習得が難しいことが示されている。

筆者の調査によると、『中上級学習者のためのブラッシュアップ日本語会話一みかげ! コミュニケーションスキル』(スリーエーネットワーク)、『くらべてわかる初級日本語表現文型ドリル』(ジェイ・リサーチ)、『くらべてわかる中級日本語表現文型エイ・リサーチ』、『J.BRIDGE for Beginners vol. 1・2』(平凡社)、『みんなの日本語初級I・II』(スリーエーネットワーク)および『げんきI・II』(The Japan Times)等の会話指導がある日本語教科書では、接続詞「で」が含まれる会話文は存在するものの、解説があるものはない。

(1) ㊤最近、親に戻ってきてほしいって、よく言われるんだ。

㊤そうなんだ。で、自分はどうなの？

㊤迷うよ。半々ってとこ。

『わかる！話せる！日本語会話発展文型125』(p. 207)

(2) 父: ええ、まあ。子供の時から「父一人、子一人」でしたら、女性と話すのが
苦手で…

母: あら、そうだったの？ぜんぜん気づかなかった。

聞き手: (笑)で、それがきっかけで、二人は付き合い始めたんですね。その時、
久美子さんは高盛さんを男性として意識していたんですか。「この人、す
てきだなあ」とか、「ハンサムだな」とか。

『J.BRIDGE for Beginners vol. 2』(p. 16)

そこで、本章では、このように習得が難しく、かつ教科書において十分には扱われていない接続詞「で」の、日本語学習者の具体的な使用実態と、日本語母語話者の使用との差異を明らかにする。

本章は次のように構成される。7.2 節で言語習得研究における「で」に関する先行研究の問題点を指摘したうえで、研究目的を述べる。7.3 節で調査方法について紹介する。7.4 節で母語・学習環境別および日本語のレベルという二つの側面からの調査結果を分析する。7.5 節で日本語学習者と日本語母語話者の具体例を示しつつ、両者の使用における差異を述べる。

なお、この章は『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第 58 号に投稿したものに加筆・修正したものである。

7.2 先行研究と問題点

言語習得の観点から「で」を扱った主要な論文として深川(2007、2009)、宇佐美(2013)、および石黒(2017)が挙げられる。

まず、深川(2007、2009)では、上級日本語学習者が談話に使用した接続表現を、日本語母語話者と比較して研究を行った。この研究によると、接続詞「で」は学習者の発話ではあまり見られなかったという。また、「で」が文頭で発話される際、その音声の短さから、学習者が気付きにくいと指摘し、この表現の使用が学習者にとって難しいと述べている。

続いて、石黒(2017)の研究では、中国語を母語とする日本語学習者の独話で使用される接続詞を調査した。この研究では、中国語母語話者は日本語母語話者に比べて「で」の使用が少ないことが明らかになった。また、中国語の「然后」という接続詞と「で」の対応関係を分析したが、明確な関係は見出せなかった。この結果から教育指導では、母語の転移を取り入れるのが難しいと結論付けている。

最後に、宇佐美(2013)は、学習者に「で」の使用を促進するため、実験的研究を行った。この研究では、「インプット洪水」³⁵や「インプット強化」³⁶に加えて、「明示的な文法説明」の必要性を指摘している。

以上の先行研究によると、日本語学習者による「で」の使用が少ないという傾向が明らかにされてはいるものの、具体的な使用実態に関する詳細な調査はまだ不十分である。特に、学習者は「で」をどのように習得しているのか、母語による使用の差異はあるのか、また日本語母語話者の使用との差異があるのかといった問題が残されて

³⁵ 「インプット洪水」は、「特定の言語形式を頻繁にインプットの中で使用することによって、学習者の注意を特定の言語形式に向けようとする」ものである。(宇佐美 2013:198)

³⁶ 「インプット強化」は、「下線や矢印といった視覚的目印を使用することによって、学習者の注意を特定の言語形式に向けようとする」ものである。(宇佐美 2013:198)

いる。そこで本章では、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(以下、I-JAS)を利用して日本語学習者を対象として「で」の使用実態を分析する。さらに、具体的な用例を通じて、日本語母語話者との使用法の違いを考察していく。

7.3 調査方法

上述した目的のために、本章では、I-JAS を利用して日本語学習者の会話文における「で」の出現を母語・学習環境別と日本語のレベルという二つの側面から分析を行う。検索エンジン中納言(version2.4.2)を用いて、検索方法は以下のように指定した。

検索方法

短単位検索の書字出現形が で
条件を追加する:品詞の大分類が接続詞
タスク:対話、ロールプレイ 1、ロールプレイ 2 ³⁷
データセット:第一次～第五次
後文脈の語数:100

7.4 調査結果

7.4.1 母語・学習環境別にみる「で」の使用状況

この節では、I-JAS の第一次のデータを利用して母語・学習環境別に「で」の使用状況を見る。第一次のデータは、海外の各母語話者(12 言語)の日本語学習者 15 名、国内自然環境の日本語学習者 15 名、国内教室環境の日本語学習者 15 名を同程度(中級程度)となるようサンプリングしたデータである。

表 7.1 では、被調査者の日本語レベルが同じであるという前提のもと、母語・学習環境ごとの使用回数、使用者数、使用者数の割合及び平均使用者数をまとめて示している。

表 7.1 母語・環境別にみた対話・ロールプレイにおける「で」の使用状況³⁸

	使用回数 (回)	使用者数 (人)	使用者数の割合 (%)	平均使用回数 (一人あたりの 使用回数)
中国語	6	3	20	2.0

³⁷ タスクの詳細は第 6 章を参照されたい。

³⁸ データ中、「で、で」という形式は 1 回のみカウントされる。

韓国語	43	9	60	4.8
英語	45	10	67	4.5
インドネシア語	9	6	40	1.5
スペイン語	8	7	47	1.1
トルコ語	5	4	27	1.3
ハンガリー語	7	5	33	1.4
フランス語	22	8	53	2.8
ベトナム語	6	2	13	3.0
ロシア語	24	5	33	4.8
ドイツ語	42	7	47	6.0
タイ語	32	8	53	4.0
日本語母語話者	216	15	100	14.4
国内教室	8	4	27	2.0
国内自然	213	11	73	19.4

表 7.1 によると、日本語母語話者と国内自然環境での学習者に「で」の使用が顕著にみられる。具体的には、日本語母語話者では、被調査者 15 人中全員が使用しており、1 人あたりの平均使用回数は 14.4 である。また、国内自然環境の学習者では、被調査者 15 人中 11 人が使用しており、平均使用回数は約 19.4 である。これに対して、国内教室環境の学習者は、「で」の使用が少ないことが観察される(平均使用回数は 2.0)。

一方、海外環境の学習者の場合、どの母語の学習者においても「で」の使用は日本語母語話者と比べて少なく、平均使用回数は 6 回以下である。母語の違いによる使用の差異は顕著にみられない。

石黒(2017:207)は「中国語を母語とする学習者は日本留学を機に「で」を頻用しはじめることを考えると、日本で日本人の会話を聞いたり日本人と会話をしたりするなかで自然に「で」を習得する」と指摘している。本調査でも、国内自然環境の学習者は海外環境および国内教室環境の学習者より「で」を多く使用していることが確認され、これは実際のコミュニケーションの中で「で」を習得していることが一因として考えられる。

以上、先行研究では着目されてこなかった母語・学習環境別という側面からの分析をまとめると、(3)のとおりである。

- (3) i 「で」の使用は、学習環境の違いによる差がみられる。具体的には、国内自然環境で習得している学習者に「で」が多用されている。これに対して、国内教室環

境・海外環境の学習者には使用されているが、それほど多くない。

ii 「で」の使用は、母語の違いによる差がみられるが、それほど顕著ではない。このため、母語の影響を判断するのは難しい。

7.4.2 日本語のレベル別にみる「で」の使用状況

この節では、日本語の能力レベルごとの学習者の「で」の使用状況に焦点を当てた調査を行う。分析の対象として、被調査者の中で数が比較的多い中国語・韓国語・英語を母語とする学習者の第一次から第五次までのデータを取り上げる。さらに、先行する調査において「で」の使用が頻繁であった国内自然環境での学習者も含めて調査を行う。

学習者の習熟度は、Japanese Computerized Adaptive Test(J-CAT)の合計得点によりレベルを分けている。J-CAT によるレベル分け及び各母語の学習者の人数は、表 2 に示す通りである。

表 7.2 J-CAT による学習者レベルと学習者の人数

J-CAT 得点	レベル	中国語母 語話者	韓国語母 語話者	英語母語 話者	国内自然 習得者
0-99	初級前半	－	1	11	4
100-149	初級	2	5	31	10
150-199	初級後半	30	8	32	13
200-249	中級前半	75	26	22	15
250-274	中級	50	20	3	4
275-299	中級後半	27	18	1	4
300-324	上級前半	11	10	－	－
325-349	上級者	4	10	－	－
350 以上	超級者	1	2	－	－
合計		200	100	100	50

表 7.2 で示したとおり、レベルの分布は母語により異なっている。中国語母語話者は、初級後半から上級前半までと判定される学習者が多い。韓国語母語者は、中級前半から上級者までと判定される学習者が多い。英語母語話者は、初級前半から中級前半までと判定される学習者が多い。一方、国内自然環境の習得者は、初級から中級前半までと判定される学習者が多い。今回の使用したデータでは、韓国語母語話者が比較的日本語のレベルが高いと言える。

次に、レベル別に見た「で」の使用状況を表 7.3 で示す。

表 7.3 中国語・韓国語・英語を母語とする学習者のレベル別にみた「で」の使用状況

	中国語母語話者				韓国語母語話者				英語母語話者				国内自然習得			
	使用人数	レベルでの使用者数の割合(%)	使用回数	平均使用回数	使用人数	レベルでの使用者数の割合(%)	使用回数	平均使用回数	使用人数	レベルでの使用者数の割合	使用回数	平均使用回数	使用人数	レベルでの使用者数の割合(%)	使用回数	平均使用回数
初級前半	－	－	－	－	1	100	1	1	2	18.1	2	1	1	25.0	2	2.0
初級	0	0	0	0	2	40.0	12	6	11	35.5	14	1.3	6	60.0	151	25.1
初級後半	11	36.7	12	1.1	2	25.0	4	2.0	11	34.4	17	1.5	8	61.5	128	16
中級前半	24	32.0	85	3.5	17	65.3	109	6.4	10	45.5	98	9.8	11	73.3	205	18.6
中級	16	32.0	149	9.3	16	80.0	131	8.2	2	66.7	62	31.0	1	25.0	36	36
中級後半	15	55.6	178	11.9	16	88.9	143	8.9	1	100	26	26.0	4	100	50	12.5
上級前半	5	45.5	12	2.4	6	60.0	46	7.7	－	－	－	－	－	－	－	－
上級	2	50.0	18	9.0	10	100	125	12.5	－	－	－	－	－	－	－	－
超級	1	100	3	3.0	2	100	10	5.0	－	－	－	－	－	－	－	－

表 7.3 のデータによると、国籍に関係なく、多数の学習者が初級前半段階から「で」の使用を開始していることが示されている。しかしながら、この段階における使用人数及び使用回数は比較的少ない。中級レベルに達すると、これらの数値は顕著に増加し、一人当たり約 10 回の使用を示す学習者も確認される。中国語・韓国語・英語を母語とする学習者において、日本語能力レベルの向上と共に「で」の使用者数の割合及び平均使用回数は増加する傾向がある。この傾向は次の図 7.1 による明確に示している。

一方、国内自然習得者はレベルに関わらず、初級から使用する者数と使用回数は多く見られる。

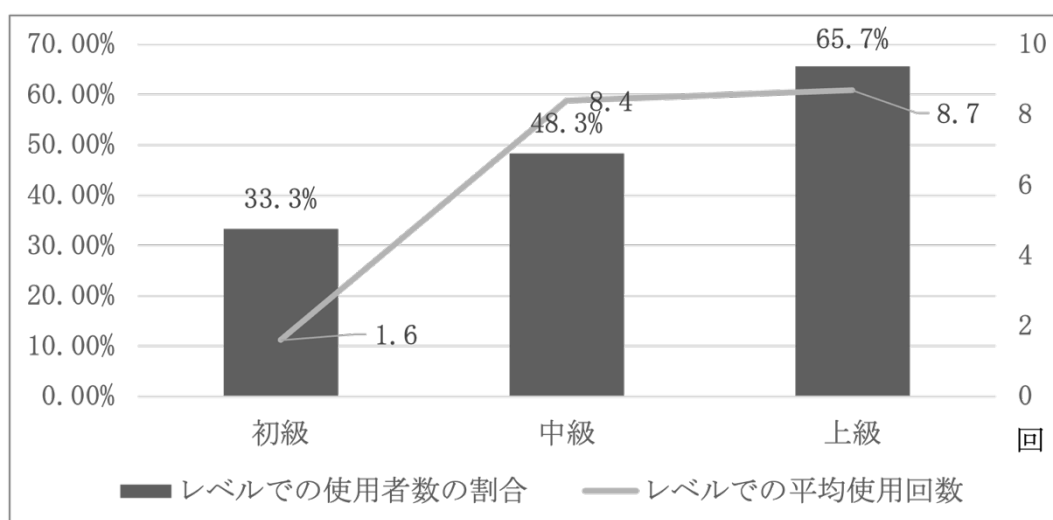


図 7.1 中国語・韓国語・英語を母語とする学習者のレベル別にみた「で」の使用状況³⁹

7.4.3 まとめ

従来の研究では、日本語学習者の接続詞「で」の使用が少ないと指摘されてきたが、母語・環境別および日本語レベル別からその使用実態についての考察は行われていなかった。そこで本章では、これらの二つの側面から「で」の使用を考察した。その結果、二つの主要因が「で」の習得に影響を及ぼしていることが明らかになった。第一の要因は学習環境である。国内自然環境の学習者は国内教室環境の学習者に比べ、「で」の使用を早期に開始し、使用頻度も高いことが示されている。第二の要因は学習者の日本語能力レベルである。海外環境の学習者においては、日本語の能力レベルが上昇するにつれて、日本語母語話者の使用頻度に近づいていることが観察された。

7.5 日本語学習者による「で」の使用について

「で」の言語学的位置づけに関しては、従来、接続詞としての機能に焦点を当てた研究が主流であり、特に口語表現における「それで」との関連性やその使用実態に関する分析が蓄積されてきた（例：有賀：1993、山本：2004、日本語記述文法研究会：2009）。しかしながら、本稿の第 6 章で詳述したように、日本語母語話者が実際に使用する「で」は、主に三つの異なる機能を有することが明らかになった。最も多く観察されるのは談話構造の構築に貢献する機能であり、単純な接続詞としての機能やフィラー

³⁹ 表 7.3 に示されているように、一部の学習者のデータが不足しており、比較が困難であるため、初級前半、初級、初級後半を総じて初級レベルとして扱い、中級前半、中級、中級後半を中級レベル、上級前半、上級を上級レベルとして分類している。また、超級者は合計 4 人しかおらず、数が少ないため、今回は観察対象から外す。

的な機能は比較的少数に留まる。以上の日本語母語話者の使用実態を基準として、次に日本語学習者による「で」の具体的な使用状況を検討する。比較のため、第6章で提示した日本語母語話者における「で」の出現位置に関するデータを再掲する。日本語母語話者の場合、「で」の出現位置の上位5類は、①テ形・デ形の直後、②発話冒頭、③統語的に完結した箇所直後、④感動詞・間投詞・応答詞の直後であった。その機能としては、多くの場合、「で」は談話構造の構築に貢献する多様な機能を果たして

日本語学習者（中国語・韓国語・英語母語話者、および国内自然環境学習者）のデータに目を向けると、「で」の使用実態は学習者の日本語レベルによって異なる様相を呈する。

まず、初級学習者の用例を検討する。

(4) EAU03-I-00090-C: どうやって大学まで来ますか?

EAU03-I-00100-K: えっと最初はくくぬま(車)で、あのでん、でんし電車の駅に、行きます、その後(そのあと)電車に乗ります、【駅名1】駅、で、の【駅名1】駅、でバスに乗ります〈ふーん〉でその後(そのあと)は大学に行きます

(英語/初級/ EAU03-I)

(5) EAU23-I-01730-C: ふーん、あの一私あんまりオーストラリアについて知らないんですけど〈うん〉、もし私が、時間があって、オーストラリアを観光するとしたら、どこに行ったほうがいいですか?

EAU23-I-01740-K: そうですねー、あーの一、オブラ(オペラ)ハウスとか、ハーバ(ハーバー)ブリッジが一番有名、ですからみんなが、えっとここに、来たら、えっと、もちろんその(連体詞)こっその(連体詞)場所に、行く、でっす(です)よね?

EAU23-I-01750-C: うんうん

EAU23-I-01760-K: あーで、えーつと、シドニー、のわまの周りにえっと〈うん〉、たくさんの一海が、あるから、ボンダイビーチとかマンヌイ(地名)ビーチ(観光地名)のが、のあに行ったほうがいいと思います

(英語/初級/ EAU23-I)

初級学習者の場合、「で」は単独で出現する傾向が強い。用例(4)において、「で」は「バスに乗ります」という統語的に完結した節の後に位置している。この「で」は、「バスに乗る」という行為と「大学に行く」という行為を接続し、「その後」という副

詞句と共起することで時間的な順序を明示している。このように、接続詞としての基本的な機能を担いつつ、談話の展開にも寄与している例である。一方、用例(5)では、「で」は感動詞「あー」の直後に出現している。この場合、「えーっと」というフィラーと共起しており、接続というよりも、むしろこれに続く発話への導入や話の展開を主たる機能として担っていると解釈される。

中級学習者の使用実態を見ると、「で」の使用数は増加するものの、顕著に多いとは言えない。用例(6)および(7)に示されるように、現出現位置は「毎日」のような名詞の後、統語的に完結した節の後、そしてテ・デ表現の後など多様化し始める。これらの用例から、中級レベルの学習者は、初級レベルと比較して、事柄や物語を叙述する際に、日本語母語話者のように「で」を連続して使用する傾向が現れ始めることがわかる。

用例(6)の一つ目の「で」は、先行文脈への補足情報（「毎日」）の後に「それで」という接続詞と共起し、後続の出来事（「娘が死にました」）への展開を促す。二つ目の「で」は、二つの出来事（「娘が死にました」「犯人はその学校に通っている」）の間に明確な時間的・因果的關係性は見られず、話し手の主観的な構成に基づいて談話を展開させる機能を担っていると考えられる。

用例(7)の一つ目の「で一」は、先行する行動（「それをして」）の後、次の行動や発話へ繋げる意図を示唆し、「長音」や「えと、うーん」といったフィラーとの共起は、話し手が思考中であることをうかがわせる。二つ目の「で」は、聞き手の相槌の後、発話冒頭に位置し、後続情報が直前の発話（家を出ました）の続きであることを示している。

(6) KKD48-I-00780-K : あーなんかー、あ、中学の〈うん〉女子きょうさ(教師)が、教師が〈はい〉いったんです(いたんです)けれども〈えーえーえー〉あー、あーその学校に、まあ自分の娘をあー自分の娘を連れて、いたんですよ(いったんですよ)〈はい〉ま、毎日〈うんうんうん〉で、それで、あう、ある日ーその娘が、死にました〈え、はい〉で犯人はその学校に通っている、学生、二人、で、でも、日本、の、あーなんか法では、あーそれーその学生たちが若いから処罰、できなくてー、あな、なんか個人的には、く、復讐、す、する、ストーリーです〈へー〉はい、なんか、僕はーこれを最初に映画で、見てましたけど

(韓国/中級/KKD48-I)

(7) EUS14-I-00340-K : そうですねー、ええと昨日は、まあ朝起きて、ええと、さいしゅう(最初)の一限目のクラスの、ええと作文ーがええと印刷

しなければならなかったので〈うん〉まずそれをして、でええと、うーん、きーがえとええと、まあメイクとか〈うん〉えっと一歯磨きとかをしているながらえとコーヒーを入れて(入れて)、ええとそれでまあ簡単なええと朝食を食べてから、ええと家を出ました

EUS14-I-00350-C : うんうん

EUS14-I-00360-K : で、うーん、十一時半に、ええとさいしゅう(最初)のクラスがあつてええとそれは政治学の一授業ですね〈うん〉、ええとそこでまあ、ええと作文を提出して、ええと講一義を聞いてから、ええと一まあ二限目のクラス〈うん〉、ええと中国語に行きました

(英語/中級/EUS14-I)

上級学習者になると、「で」を連続使用する傾向が一層明確になる。用例(8)では、5つの「で」を連続して使用し、「昨日の具体的な行動」について多段階的に展開している。ここでは、統語的に完結した箇所、テ・デ形の後、発話冒頭といった様々な位置に出現する「で」を組み合わせることで、一連の行動(授業、帰宅、休憩など)を聞き手に段階的に提示し、談話全体の構成を整理する役割を果たしている。用例(9)も同様に、「で」によって一日の行動を段階的に提示している。

(8) KKR26-I-00360-K : で、九時から十時半までじゅ、あ、十時十五分まで、授業を受けて〈ん〉、家に帰って、ちょっと休んで、また十二時に授業があつて、十二時から、一時十五分まで授業を受けて、四十五分間休みの時間があつて、休んで、また二時から五時まで授業があつて授業を受けました、で、それから家に帰って

KKR26-I-00350-C : うん

KKR26-I-00360-K : 『からす(ガラス)の仮面』とゆう漫画をよん、読みました〈うんうん〉、で、昨日は、レポートの締め切りだったので、七時(しちじ)?からレポートの作文に取り組みました、で十時半まで、レポートを完成しました、その後(あと)、うん、また『ガラスの仮面』をちょっと読んで、十二時に歩きたくてソンプクチョン?ってゆう所まで行って、散歩をしました(中略)

KKR26-I-00400-K : で、三時ぐらいまで歩いて一、家に帰って、シャワーを浴びて、五時ぐらい?に寝ました

(韓国/上級/KKR26-I)

(9) CCS40-I-00540-K : あ、はい昨日は朝は、十時から授業があって〈うん〉、でお昼は、友達と一緒に、あの一ご飯を食べて、おしゃべりして〈うん〉、午後の授業は三時半からなのでちょっと空き時間があったので

CCS40-I-00550-C : うんうん

CCS40-I-00560-K : 友達とおしゃべりして、で、ここ(午後)の授業、は五時半まで、おわっ、たら、日本人の友達と一緒にご飯食べに行きました

(中国/上級/CCS40-I)

最後に、国内の自然な言語環境で日本語を学習する者(以下、国内自然環境学習者)の用例を検討する。用例(10)が示すように、国内自然環境学習者は、一連の出来事を叙述する際、日本語母語話者と同様に「で」を連続使用する傾向が見られるだけでなく、動詞のテ形・デ形に後続する「で」の使用も顕著に増加する。このような「で」の運用は、談話のスムーズな展開に寄与していると考えられ、国内自然環境学習者による「で」の使用が、出現頻度および使用パターンの両面において日本語母語話者のそれに近似していることを示唆している。このことから、「で」の使用頻度のみならず、その具体的な使用方法もまた、学習環境から強い影響を受けると推察され、日常的なコミュニケーションを通じて日本語母語話者の言語使用に漸次的に近づいていく過程を反映しているものと考えられる。

(10) JJN12-I-00300-K : 昨日ですね〈うん〉、えー、午前中は、あ、家事の、こととかやってまして、で、え、まいろいろお洗濯したりとか、〈はいはい〉お掃除したりとか、え、キッチンを全部片づけて〈はい〉、で、十一時頃(ごろ)から？ ちょと(ちょっと)、研修をやってまして、でまあ

JJN12-I-00310-C : あ、研修

JJN12-I-00320-K : ええ、ポルトガル語の？ 〈はい〉 ええ、ま私たちは、日本に住んでる限りは、〈はい〉ポルトガル語で通訳をするにあたって〈うん〉、いろいろ、あの勉強とか？ 〈うん〉 ええ、する、ことに、でちょっと暇の時は、〈うん〉 少しこう、ポルトガル語版のホームページとう、とか入って〈うん〉、研修、研修ってかまあ勉強？ ええ、してます、〈ふーん〉 二時間ぐらい勉強してました、ええ、それがお昼、時(どき)でした 〈はい〉、はい、でーえー、あとー、息子が？ あの買い物したいてゆて(言って)、〈はい〉 じ

や息子と？〈はい〉出かけをして、〈はい〉で、お買い物に行ったりとか、〈はい〉して、でお昼ご飯を、〈はいはい〉食べて、でまたうち、戻りました

(国内自然/中級/JJN12-I)

以上の分析から、一連の出来事や物語を叙述する際の「で」の使用は、日本語の習熟度によって明確な差異が見られる。初級レベルでは「で」を単独で使用し、主に統語的に完結した箇所に出現するため、接続機能が前景化する。中級レベルでは使用数が増加し、出現位置も多様化し始め、接続機能に加え談話構造への貢献も見られるようになる。上級レベルでは連続使用が顕著になり、出現位置もさらに多様化し、談話標識としての機能が徐々に前景化する。しかし、例えば韓国語を母語とする上級学習者 10 名のデータでは、約 74% の使用が発話冒頭、感動詞・応答詞の直後、または統語的に完結した箇所の直後であり、依然として日本語母語話者の使用実態とは一定の距離が見られる。一方、国内自然環境学習者は、「で」の使用頻度や出現位置（特にテ・デ形の後）が日本語母語話者に近く、主に談話構造への貢献という点で類似した運用を行っている。これらの事実は、学習環境が「で」の習得、特にその多機能的な運用に大きく影響することを示している。

7.6 結論

本章では、I-JAS を用いて日本語学習者の会話における接続詞「で」の使用実態を母語・学習環境別および日本語レベル別の観点から分析し、日本語母語話者との比較を行った。

調査の結果、「で」の習得には学習環境と日本語能力レベルという二つの要因が大きく影響することが明らかになった。まず、学習環境については、国内自然環境の学習者が国内教室環境や海外環境の学習者に比べて「で」を多用し、その使用パターンも日本語母語話者により近いことが確認された。これは、実際のコミュニケーションの中で「で」を自然に習得していることを示唆している。一方、母語の違いによる影響は比較的小さく、母語転移による説明は困難であることが判明した。

次に、日本語能力レベルについては、初級段階から「で」の使用は観察されるものの、レベルが上がるにつれて使用者数の割合および平均使用回数が増加する傾向が見られた。質的分析からは、初級では単独使用で接続機能が中心であるが、中級以降は連続使用が増加し、談話構造への貢献という機能が前景化することが明らかになった。しかし、上級学習者においても日本語母語話者の使用実態とは一定の差異が残存しており、「で」の完全な習得には長期間を要することが示された。

これらの分析、「で」が従来指摘されてきた通り学習者にとって習得困難な語彙項目であることを再確認するとともに、その習得過程が学習環境に強く依存することを実証的に示している。教育現場においては、明示的な文法説明のみならず、豊富なインプットと実際のコミュニケーション機会の提供が「で」の効果的な習得に不可欠であることが示唆される。

第8章「文脈展開機能」の観点からみた日本語学習者による「で」の使用

8.1 はじめ

第7章では、I-JAS を用いて日本語の会話における「で」の使用実態を母語・学習環境別および日本語レベル別の観点から分析し、統語的位置とその使用を日本語母語話者との比較を行った。

一方、佐久間(2002)によれば、「文の接続関係も、従来の品詞論的な意味・用法を主とした狭義連文論の範囲内にとどまらず、指示詞や応答詞・あいづち・間投詞などの文脈展開機能や、文の配列・連鎖・統括関係等に関連付けた、広義連文の観点から生きたコミュニケーションの文脈展開の実態をよりダイナミックに把握する方法を開発すべきである」(pp. 176-177)。このため、佐久間(2002)は接続詞を文脈展開機能の観点からの分類を試みた。この分類に従い、第4章及び第5章で近代日本語、現代日本語における「で」の文脈展開機能を検討した。その結果、「で」は文脈展開においては、「話題開始機能」から「話題継続機能」「話題終了機能」まで幅広く使用されていることがわかった。そこで、これらの結果を踏まえ、本章では日本語学習者による「で」の文脈展開機能を検討する。

本章は、以下の構成で論を進める。まず8.2節において、関連する先行研究を概観し、その問題点を指摘した上で、本研究の目的を明確にする。続く8.3節では、調査対象と分析方法について詳述する。8.4節では、調査によって得られた結果を提示し、その分析を行う。そして8.5節では、8.4節の分析結果を踏まえ、学習者による文脈展開機能の使用に見られる問題点の原因を考察し、指導上の留意点を提案する。最後に8.6節で、本章の結論を述べる。

8.2 先行研究とその問題点

日本語教育において、学習者が単文の理解や産出に留まらず、複数の文を論理的かつ自然に連結させ、一貫性のある文脈を展開する能力を育成することは極めて重要である。この「文脈展開」のメカニズムとその指導、および学習者の実態に関しては、多角的なアプローチからの研究が蓄積されている。

まず、文脈展開の基礎となる接続詞の役割と指導法について、市川(1988)は、初中級学習者を対象とした具体的な指導案を提示している。市川は、接続詞が単に文と文を繋ぐだけでなく、「話し手(書き手)の考え方を反映」し、「文脈の方向付け」を可能にする機能を持つと指摘した。その上で、文脈展開の方向を「たて」(「論点の推進発展」)と「よこ」(論点の深化拡充)に二分化する捉え方を提案し、これに基づいて主要な接続詞の機能を理解させ、文章作成能力を養うことの有効性を示している。この研究は、接続詞の選択がいかに関文脈の論理構造と展開を左右するかという、文脈展

開の根幹に関わる指導のあり方を示唆している。

また、張(2019)は、佐久間(2002)の「文脈展開機能」を踏まえて雑談の中で「物語」がどのように導入されるのかを、母語話者と比較しながら分析した。張は物語の談話展開上の統括機能を7種類(解説、例示、進展、強調、並行、反意、転換)に分類し、日本語母語話者(NS)と中国人日本語学習者(CNS)を比較した結果、NSは物語を先行文脈に密接に関連させ、「解説」や「並行」、「強調」といった機能を用いて話を展開する傾向が強いことを明らかにした。使用された接続詞の中、特に「で」が「並行」、「進展」、「解説」、「転換」という多様な展開方法として用いられると指摘された。

これに対して、CNSはNSからの質問に応じる形での「解説」、「例示」が多いものの、先行文脈との関連が薄い「転換」機能による物語導入も目立ち、消極的に物語を語る傾向があると述べられた。この研究は、談話レベルでの文脈展開において、学習者が先行文脈をどのように捉え、次の発話を関連付けていくかという点での困難を浮き彫りにしている。

さらに、学習者による文脈展開の実態は、作文における接続詞の選択と使用にも具体的に現れる。吉崎(2021)は、中国人上級日本語学習者の論説文における接続詞使用を分析し、文脈展開の観点からその特徴を考察した。吉崎の研究では、上級者であっても特に添加型の接続詞を過剰に使用する傾向が見られ、これが母語の影響によるものである可能性を指摘しつつも、これが必ずしも日本語の論理的な文脈展開に寄与しているとは限らないことを示唆している。一方で、学習者は逆接の接続詞「しかし」や「が」の機能を理解し、文字数制限などの条件に応じてこれらを選択的に産出し、対比や主張の明確化といった効果的な文脈展開を試みていることも明らかにした。このことは、学習者が文脈展開の必要性を認識し、接続詞を通じてそれを実現しようと努力しているものの、特に母語の談話方略との差異からくる困難さが依然として存在することを示している。

これらの先行研究は、接続詞に関する基礎的な指導方法から、談話における多様な接続表現の機能、さらには学習者による接続詞使用の具体的な課題や能力に至るまで、文脈構築に関わる多角的な視座を提供している。このような背景を踏まえ、日本語学習者が多様な文脈展開機能を持つ接続詞「で」を実際にどのように産出しているのか、またその際にどのような過不足や困難が生じているのかを明らかにすることを踏まえ、より効果的な指導案を提案することと目的とする。

8.3 調査対象と分析方法

本章の分析対象は、I-JASから収集した上級⁴⁰の日本語学習者による156例の「で」である。また、上級学習者を研究対象として選定する理由として、初中級学習者によ

⁴⁰ 上級の判定基準は第7章の表7.2を参照されたい。

る「で」の使用においては、その習得状況を適切に判断することが困難である点が挙げられる。これに対して、上級レベルになると「で」を重く発音したり、「で一」という延長形での使用が頻繁に観察されるようになる。このような発音上の特徴や形態的变化は、上級日本語学習者が「で」の機能のある程度習得していることを示す指標と考えられる。

タスク：対話(I)、ロールプレイ 1、ロールプレイ 2(RP) ⁴¹		
母語	被調査者 ID	「で」の使用回数
中国語(台湾)	CCS24-I	5
	CCS40-I	13
タイ語	TTH09-I	13
韓国語	KKD07-I	12
	KKD09-I	8
	KKD11-I	32
	KKD16-I	1
	KKD25-I	1
	KKR05-I	16
	KKR13-I	17
	KKR22-I	6
	KKR26-I	6
	KKR31-I	26
合計	13 名	156

以上の方法で収集した「で」を佐久間(2002)及び第 5 章の文脈展開機能を踏まえ、日本語学習者はどのような文脈展開機能を用いるかを観察する。

8.4 調査結果とその分析

13 名の日本語学習者による 156 例の接続詞「で」における文脈展開機能の使用実態は、表 8.1 に示す通りである。本分析においては、「で」の後に後続する文脈が観察されない事例を「その他」として分類した。これは、例えば例(1)で示されるように、「で」の後に続く文脈が存在しないため、その文脈展開機能を特定することが困難であると判断したためである。

- (1) KKD07-I-02340-K: うちで遊ぶのがすごく好きでした〈あー〉、で一その(連体詞)時は、『らんま二分の一』？

⁴¹ タスクの詳細は第 6 章を参照されたい。

KKD07-I-02350-C: はいはいはい

KKD07-I-02360-K: とゆうアニメが、〈うんうん〉たぶん、小学校一年生の（過剰使用）くらい？〈はい〉、やっててー〈うんうん〉、それを見るためにいちゅも（いつも）{笑}

KKD07-I-02370-C: {笑} へー

KKD07-I-02380-K: で

KKD07-I-02390-C: それ韓国語ですか？あれ日本のアニメですよ

(韓国/KKD07-I)

表 8.1 日本語学習者による「で」の文脈展開機能

被調査 者 ID	話題継続機能					その 他	合計
	話を進 める機 能	話を はさむ機 能	話を戻 す機能	話をま とめる 機能	話を重 ねる機 能		
CCS24-I	4	1	0	0	0	0	5
CCS40-I	12	0	0	0	0	1	13
TTH09-I	10	0	2	1	0	0	13
KKD07-I	5	1	5	0	0	1	12
KKD09-I	6	0	1	0	0	1	8
KKD11-I	24	0	5	0	1	2	32
KKD16-I	1	0	0	0	0	0	1
KKD25-I	1	0	0	0	0	0	1
KKR05-I	10	1	1	0	0	4	16
KKR13-I	1	1	2	0	0	1	17
KKR22-I	6	0	0	0	0	0	6
KKR26-I	5	0	1	0	0	0	6
KKR31-I	21	3	2	0	0	0	26

表 8.1 のデータから明らかになる最も顕著な特徴は、「話を進める機能」への極端な使用集中である。全使用例の約 60%がこの単一機能に偏っており、特に KKD11-I および KKR31-I といった特定の学習者において高頻度の使用が観察された。これに対し、「話をはさむ機能」「話をまとめる機能」「話を重ねる機能」といった他の機能の使用頻度は著しく低く、機能分布における著しい不均衡が顕在化している。

個人差の観点からは、「で」の使用総数が最少 1 例から最多 32 例と、学習者間で約 31 倍の大きな格差が認められ、これは習熟度の差異を反映しているものと考えられる。さらに注目すべきは、高頻度使用者においても機能の多様性は限定的であり、大部分の学習者が 1～2 種類の機能に依存する傾向を示している点である。「話題継続機能」群の中では「話を戻す機能」が相対的に多用されているものの、全体として見れば、使用される機能レパトリの狭小化が確認される。

一方、第5章で論じたように、日本語母語話者による「で」においては、「話題開始機能」、「話題開始機能-話を進め機能」、「話題開始機能-話を変える機能」、「話題開始機能-話を促す機能」、「話題開始機能-話を戻す機能」、「話題開始機能-話をはさむ機能」及び「話題終了機能」といった、極めて多様な機能が確認される。この日本語母語話者の使用実態との対照から、日本語学習者は「で」の持つ多機能性を十分に習得し、効果的に活用するには至っていない現状が明らかになる。特定機能への過度な依存と機能使用の偏在は、学習者の談話運用能力における構造的な課題の存在を示しており、より体系的かつ包括的な指導方法論の構築が急務であると言える。この課題が起こった理由及び指導上の留意点を8.5節で述べる。

次に、各機能の代表例を紹介する。

話を進める機能

(2) KKR26-I-00320-K: はい〈うん〉、昨日は、と、朝六時半に起きて、レポートを書こうとしたんですが、えー失敗して{笑}、〈うん〉遊んで、九時から授業があつて、あたしは学校に行きました

KKR26-I-00330-C: はい

KKR26-I-00340-K: で、九時から十時半までじゅ、あ、十時十五分まで、授業を受けて〈うん〉、家に帰って、ちょっと休んで、また十二時に授業があつて、十二時から、一時十五分まで授業を受けて、四十五分間休みの時間があつて、休んで、また二時から五時まで授業があつて授業を受けました、で、それから家に帰って

(韓国/KKR26-I)

この例において、話し手 KKR26 は昨日の出来事について時系列に沿って叙述している。二つの「で」は、それぞれ一連の行動や出来事を接続し、話を前に進める機能を果たしている。

話を戻す機能

(3) KKR31-I-00980-K: はい〈うん〉、庶民だからって、お金ないから〈はいはいはいはい〉、貧乏だからと言わ(ゆわ)れて、ま、でー、その(連体詞)学校に一、いちばーん(一番)、イケている?、イケメンが四人がいてー〈うん〉、フラワーフォーとゆってエフフォーってゆうんですけど

KKR31-I-00990-C: え、フラワーフォーなの?

KKR31-I-01000-K: はい、花

KKR31-I-01010-C: あー、それでエフフォーなんだー〈はい〉、あ、何（なん）で、エフフォーなのかな？、あ、だ、だから、私はフォロワーフォーかと思った〈あー〉、あー、エフフォー

KKR31-I-01020-K: うん、エフフォー〈はい、はい〉、フラワーフォーでエフフォーで一うん〉、で、その（連体詞）子たちも〈うん〉、やっぱりこの（連体詞）庶民の子を無視するんですけどー、ま、どんどん、あのエフフォーの中でも一番イケメンの、子が一、この（連体詞）子に興味を持つようになって、二人の恋愛が始まるみたいな、感じの、ドラマです

（韓国/KKR31-I）

この例では、視聴したドラマの粗筋が話題の中心である。話し手 KKR31 は、ドラマに登場する男性 4 人組のグループ名「F4（エフフォー）」を当初「フラワーフォー」と言い間違えた。聞き手との間でグループ名の確認に関するやり取りが数ターン続いた後、KKR31 は「で」および指示詞「その」を用いることで、話題をドラマ本編の筋書きへと戻し、話を継続している。

話をはさむ機能

(4) KKR31-I-00340-K: そしてー、また、午後の授業を聞いてー、えっと授業は一五時ぐらいに終わったんですけど、ま、それでその（連体詞）後（あと）、家に帰って？、ちょっと、三十分ぐらい寝て、えーとー、夕食を食べた後（あと）は、カンナム駅ってゆう所に、えっと、家庭教師を、しに、行ってきました

KKR31-I-00350-C: うーん

KKR31-I-00360-K: でー、あたしーは、会社員の、か、OL さんの一家庭教師をやっていて、日本語、を教えるんですけど、昨日はー、なんか、「勉強がしたくない」と言わ（ゆわ）れて、えっと日本のドラマをひと、つ（一つ）だけ見て

KKR31-I-00370-C: うん

KKR31-I-00380-K: 授業を終わりました、で、九時ぐらいに終えてー、その（連体詞）後（あと）またバスに乗ってー、おうちに帰ってー、お母さんとちょっとーおしゃべりをして？、十二時ぐらいに寝ました

（韓国/KKR31-I）

この例では、話し手 KKR31 は昨日の出来事を時系列で語っている。夕食後、家庭教

師をしに行ったという行動と、その後日本のドラマを見たという行動は、継起的に生じた出来事である。その二つの出来事の間、「でー」を用いることで、「あたしーは、会社員の、か、OL さんの一家庭教師をやっていて、日本語、を教えるんですけど」という、自身の家庭教師の対象に関する補足情報が挿入されている。

話をまとめる機能

(5) CCS40-I-02520-K: ゲームのルールは、あの〈うん〉、あのうち、私兄もいますので
その（連体詞）兄と一緒に、あの、こう、あの何（なん）てゆう（チェック）か、交代？

CCS40-I-02530-C: うん

CCS40-I-02540-K: いちじがん（一時間）、兄がそのパソコンとかゲームをやってて
私が、も一時間ぐらいやって〈うん〉で今日はもう終了みたいな
感じで〈あー〉、あー一人一時間ず、ずつみたいな感じで

（中国/CCS40-I）

用例(5)において、話し手 CCS40 は幼少期に兄とゲームで遊んだ際のルールについて説明している。兄と交代で各自 1 時間ずつゲームをするというルールを説明し終えた後、「で」および「～みたいな感じで」というメタ言語的表現を伴うことで、それまでの説明内容を要約し、聞き手に提示している。

話を重ねる機能

(6) KKD11-I-03920-K: あはい〈ふーん〉、夢ってゆるゆる、（いう）よりちょっとコンプレックス（コンプレックス）になっていて、〈ああ〉え、ふ、
まあ、日本語学科じゃないですか、〈えーえーえー〉日本、日本
であの、ん語学研修とかあの〈うん〉、交換留学生とか〈うんうんうん〉、いてない（行っていない）ほうがほんとにあ珍しいですよ、〈うーんうんうん〉で、私珍しいほうですね

（韓国/KKD11-I）

用例(6)では、話し手 KKD11 は日本で勉強することが夢でありながら、日本での語学研修経験がないことにコンプレックスを感じていると述べている。末尾の「で」は、先行する「日本（に）～行っていないほうがほんとにあ珍しいですよ」という内容を再度提示し、「私珍しいほうですね」と続けることで、「珍しい」という点を反復強調し、聞き手の注意を喚起する機能を果たしている。

8.5 原因の分析と指導上の留意点

本節では、日本語学習者による接続詞「で」の使用に見られる「使用回数の少なさ」、「単一機能への偏り、および機能レパートリーの狭小化」といった課題の原因を考察し、それに対する適切な指導案を検討する。

まず、「で」の使用回数の少なさについて、上級レベルの日本語学習者においても、その使用頻度は必ずしも高いとは言えない。第7章で収集したデータによれば、日本語母語話者による「で」の平均使用回数は14.4回である。これに対し、今回収集した日本語学習者のデータでは、半数以上がこの平均回数に達していない。この背景には、いくつかの要因が考えられる。第一、第7章でも指摘した通り、多くの日本語教科書において、「で」が使用される会話例は提示されているものの、その機能や用法に関する詳細な解説が不足している点が挙げられる。このような状況は、学習者が「で」を能動的に使用する機会を制限している可能性がある。第二、深川(2009)が指摘するように、「で」は文頭に置かれ、かつその発音が短く一拍であるため、学習者にとって知覚されにくいという音声的特徴がある。日常的なコミュニケーションにおいてインプットが不十分であれば、アウトプットも困難になるのは当然と言えよう。第三の理由として、石黒(2017:208)が述べるように、「母語の転移を取り入れるのは難しい」という点が挙げられる。石黒(2017)は、中国語の「然后」と英語の"and"の対応関係を分析し、一部共通点はあるものの、完全な置き換えは困難であると結論づけている。すなわち、母語に直接対応する表現が存在せず、その機能やニュアンスの理解が難しい場合、学習者はその表現の使用に至りにくいと考えられる。

次に、学習者による「で」の使用に見られる「単一機能への偏り、および機能レパートリーの狭小化」という問題の原因について考察する。これは、学習者が接続詞を用いて談話を管理する機能が十分に発達していないこと、および「で」が持つ意味・機能の多様性が十分に教授されていないことに起因すると考えられる。

第6章で述べたように、現代日本語における「で」は、主に談話管理上の機能を果たしている。近藤(2004:84-85)も、「母語話者で出現率が特に多かった「で(一)」「て形」「～けど」は複数の意味を持つ言語形式であり、また、談話管理上の機能を兼ねる場合もある」と指摘している。日本語母語話者は、このような「で(一)」や「て形」を「で(一)」や「て形」を随所に使うことによって、そして、節頭にくる接続詞(類)より節末にくる接続助詞(類)がより多く現れることによって、論理関係の主張を弱く、全体的な談話の流れに滑らかさを作り出している」。これに対し、近藤(2004)は、「学習者の場合、誤用の例は少なかったが、接続表現の言語形式の種類も少なく、聞き手に対して談話展開を示す接続詞接続表現はほとんど見られなかった」とも述べている。したがって、日本語学習者は接続詞を用いて談話を効果的に展開することが困難であるため、結果として「で」も文脈展開の多様な場面で現れにくいと考えられる。

さらに、機能レパートリーの狭小化は、教育内容に起因する可能性も否定できない。日本語記述文法研究会(2009:64-88)などによれば、「で」は「それで」の略形として口語でよく使用されると説明されることがある。このような指導の影響か、表 8.1 に示されているように、学習者による「で」の文脈展開機能は「話を進める機能」に極端に偏る傾向が見られる。一方、山本(2004)、石島・中川(2004)、権(2003、2005)などの研究では、「で」が「順接」や「添加」の機能に加え、「転換」や「補足」など多様な機能を持つことが指摘されている。「順接」や「添加」といった限定的な意味機能のみを教授された場合、日本語学習者の「で」に関する機能レパートリーが狭小化するのとは当然の結果と言えるだろう。

最後は、以上の原因を踏まえ、指導上の注意点を提案したい。

①「で」と「それで」の使い分け(石黒:2017)

石黒(2017)は、個人的な旅行の体験談と映画のストーリー説明という異なる談話タイプにおいて、話し手が私的な内容と改まった行為を意識的に区別し、「で」と「それで」を使い分けていると指摘している。この観察に基づき、石黒は「で」と「それで」の選択が「話す内容や行為のあらたまり度によって」なされることを提案している。この提案に同意した上で、本稿ではさらに、「で」と「それで」の意味・機能の違いに基づく使い分けにも注意を払うべきであると考えられる。例えば、梶本(1994)は、「で」には「因果関係」を示す用法がないと指摘している。この点についてはさらなる検討の余地があるものの、明示的に因果関係を示したい場合には、やはり「それで」を使用する方がより適切であると考えられる。加えて、前述の通り、「で」は「転換」や「補足」といった、「それで」には現れにくい独自の意味・機能も有している。したがって、日本語教育においては、「初級段階では「それから」「それで」を教え、中上級段階で「それから」にくわえて「あと」を、「それで」にくわえて「で」を導入」(石黒 2017:205)する際に、「で」が持つ機能の多様性を詳細に説明することが重要であると思われる。

②インプット洪水・インプット強化・明示的な文法説明(宇佐美:2013)

「で」の使用を促進するための指導法として、宇佐美(2013)は実験的な手法を用いた調査に基づき、「インプット洪水」+「インプット強化」+「明示的な文法説明」+「指導後、継続的に意識させる」という組み合わせが有効であると報告している。この提案に基本的に賛同するが、一点追加したいのは、「で」の意味・機能の多様性、特に談話管理上の機能に対する意識である。宇佐美(2013)は、「で」を「「それで」を短くしたもので、意味は「そして」「それから」「次に」と同じような意味で」使用されると説明している。このような説明は、学習者が「で」を単に「順接」や「添加」といった限定的な意味で捉え、結果として「単一機能への偏り」という問題を引き起こす可能性がある。したがって、「明示的な文法説明」の段階において、多様な使用場面

を設定し、「で」が持つ幅広い意味・機能を明示的に教授することを提案したい。

8.6 結論

本章では、I-JAS を用いて上級日本語学習者 13 名による接続詞「で」の使用実態を文脈展開機能の観点から分析し、日本語母語話者との比較を通じて学習者の「で」使用における特徴と課題を明らかにした。

調査の結果、以下の点が明らかになった。

第一に、上級レベルの日本語学習者による「で」の使用は量的・質的両面において制約を受けている。量的側面では、学習者の「で」使用頻度は日本語母語話者の平均使用回数（14.4 回）を下回る者が半数以上を占め、個人差も 1 例から 32 例と極めて大きい。質的側面では、「話を進める機能」への極端な偏重（全体の約 60%）が顕著であり、日本語母語話者が示す話題開始機能から話題終了機能にわたる多機能的な使用パターンとは対照的である。

第二に、学習者による「で」の機能レパートリーは著しく狭小化している。大部分の学習者が 1～2 種類の機能に依存しており、「話をはさむ機能」「話をまとめる機能」

「話を重ねる機能」といった他の文脈展開機能の使用は限定的である。この傾向は、学習者が「で」の持つ多様な談話管理機能を十分に習得していないことを示している。

第三に、これらの課題の背景には、教育上の問題と言語的特性の両方が関与している。教科書における「で」の機能説明の不足、「で」の音声的特徴による知覚の困難さ、母語からの転移の限界、さらには「で」を「それで」の略形として限定的に捉える指導方法などが、学習者の「で」使用を制約する要因として機能している。

以上の分析結果を踏まえ、本章では以下の指導上の留意点を提案した。まず、「で」と「それで」の機能的差異を明確にし、談話の改まり度や文脈に応じた使い分けを指導すること。次に、インプット洪水・インプット強化・明示的な文法説明を組み合わせた統合的アプローチを採用すること。そして最も重要な点として、「で」が持つ談話管理上の多様な機能を体系的に教授し、学習者の機能レパートリーの拡充を図ることである。

第二部のまとめ

第二部では、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)を用いて、日本語学習者による接続詞「で」の実際の使用状況を分析した。第7章では母語・学習環境別および日本語レベル別の使用実態を調査し、第8章では文脈展開機能の観点から詳細な分析を行った。

調査の結果、「で」の習得には学習環境と日本語能力レベルが大きく影響することが明らかになった。特に国内自然環境の学習者(平均使用回数 19.4 回、使用者率 73%)は、海外環境や国内教室環境の学習者よりも「で」を多用し、その使用パターンも日本語母語話者により近いことが確認された。一方、母語の違いによる影響は相対的に小さく、母語転移による説明は困難であった。

習熟度の観点からは、初級段階から「で」の使用は観察されるものの、レベルが上がるにつれて使用者数と使用回数が増加し、使用パターンも変化することが判明した。初級では単独使用で接続機能が中心であるが、中級以降は連続使用が増加し、談話構造への貢献という機能が前景化する。しかし、上級学習者においても日本語母語話者との差異は残存している。

文脈展開機能の分析では、上級学習者でも「話を進める機能」に約 60%が集中し、機能レパトリーの著しい狭小化が確認された。これは、多くの教科書で「で」の詳細な解説が不足していることや、「で」の音声的特徴による知覚の困難さ、母語からの転移の限界などが要因として考えられる。

これらの結果を踏まえ、「で」の効果的な指導には、豊富なインプットと実際のコミュニケーション機会の提供、明示的な文法説明に加えて、「で」の多機能性、特に談話管理機能の体系的な教授が必要であることが示された。

第9章 まとめと今後の課題

9.1 研究の総括

本研究は、日本語における接続詞「で」の通時的変遷および日本語教育への応用について包括的に検討した。明治後期の成立から現代に至るまでの約150年間の歴史的変遷を跡づけるとともに、現代の日本語学習者による使用実態を分析し、効果的な指導方法について考察を行った。

本研究で明らかになったことは以下のとおりである。

9.1.1 「で」の成立と初期の機能

第2章の分析により、接続詞「で」は明治後期に「それで」の文法化によって成立したことが実証された。この成立過程は、Hopper&Traugott(2003)の文法化理論の枠組みで説明可能であり、以下の四つの特徴が段階的に観察された：

1. 指示性の減少（意味の漂白化）：「それで」の指示部「それ」が、「順接」→「添加」→「転換」という意味拡張に伴い、具体的指示対象から談話全体への指示へと変化し、最終的に指示性を失った。
2. 語用論的機能の増大：「順接」の推論的含意の顕在化、「促す」「転換」機能の増加により、話者交替や話題転換を担う語用論的機能が強化された。
3. 音韻的弱化：「それで」→「そいで」「ほいで」という音韻変化が観察され、使用頻度の増加に伴う音韻的消耗が確認された。
4. 主観化・間主観化の進行：客観的因果関係の表示から、話し手の主観的判断や聞き手への働きかけを示す機能へと発展した。

9.1.2 機能の拡張と多様化

第3章で明らかにしたように、大正・昭和前期には「で」の機能が著しく拡張した。特に「添加-促す」の意味が15.8%から38.5%へと増加し、連続使用のパターンも顕著になった。統語的位置も文間から節間へと拡大し、「で」が談話標識としての性格を強めていく過程が確認された。

9.1.3 文脈展開機能の発達

第4章および第5章の分析から、「で」の文脈展開機能は近代から現代にかけて段階的に発展したことが明らかになった。明治期には主に「話題継続機能」に限定され

ていたが、現代では「話題開始機能」「話題継続機能」「話題終了機能」という包括的な機能体系を確立している。

特に重要な発見は、「で」が「それで」「そこで」と比較して最も「相互行為指向」が強く、指示性も最も弱いという特徴を示すことである。この特性が、「で」の多機能化を可能にした主要因と考えられる。

9.1.4 フィラー的用法の出現

第6章の分析により、現代日本語における「で」は、単純な接続詞的用法、談話構造へ貢献する用法、フィラー的用法という三つの機能を連続体として持つことが判明した。最も多く観察されたのは談話構造へ貢献する用法であり、「で」が従来の接続詞枠組みを超えた多機能的な談話管理要素へと発展していることが確認された。

9.1.5 日本語学習者による使用実態

第7章および第8章の分析から、日本語学習者による「で」の使用には以下の特徴が見られることが明らかになった：

使用頻度の差異：国内自然環境学習者（平均 19.4 回）は日本語母語話者（平均 14.4 回）に近い使用頻度を示すが、海外環境や国内教室環境の学習者は著しく少ない。

習熟度による変化：初級段階では単独使用で接続機能が中心だが、中級以降は連続使用が増加し、談話構造への貢献が前景化する。しかし、上級者でも母語話者との差異は残存する。

機能レパートリーの限定：上級学習者でも「話を進める機能」に約 60%が集中し、機能の多様性は著しく制限されている。

9.2 本研究の意義

9.2.1 理論的貢献

本研究は、以下の理論的貢献を提供した：

文法化研究への貢献：「指示詞の脱落による接続詞の成立」という新たな文法化パターンを実証し、日本語文法化研究に重要な事例を提供した。また、「接続詞からフィラーへの機能拡張」という発展経路を明らかにした。

談話・会話研究への貢献：佐久間(2002)の文脈展開機能分類を精緻化し、機能識別基準を明確化した。また、接続詞とフィラーの連続性という新たな視点を提示した。

通時言語学への貢献：約 150 年間にわたる包括的な通時的分析により、談話標識の発達メカニズムを実証的に解明した。

9.2.2 実践的貢献

学習者の使用実態を多角的に分析し、効果的な指導法開発のための基礎データを提供した。特に、学習環境の重要性と機能の多様性を考慮した指導の必要性を示した。

また、複数の大規模コーパスを組み合わせた研究方法論を提示し、通時的・共時的分析の統合的アプローチを示した。

9.3 今後の課題

9.3.1 理論的課題

他の接続詞との比較：本研究で明らかにした「で」の発展パターンが、他の接続詞（「だから」「けど」「じゃあ」等）にも適用可能かを検証する必要がある。特に、指示詞の脱落による接続詞化が日本語における一般的な現象なのかを検討すべきである。

他言語との対照研究：「で」に類似した機能を持つ他言語の要素との比較により、談話標識の普遍性と言語固有性を明らかにする必要がある。

9.3.2 実証的課題

本研究では主に質的分析に重点を置いたが、統計的手法を用いた量的分析をさらに発展させる必要がある。特に、機能間の移行確率や使用頻度の変化パターンの数量的モデル化が重要である。

また、「で」の音韻的弱化について触れたが、実際の音声データを用いた詳細な音韻分析は行っていない。韻律の特徴や音響的特性の変化を分析することで、文法化過程をより詳細に解明できると期待される。

9.3.3 教育的課題

本研究で提案した指導方法の効果を、実際の教育現場での実験により検証する必要がある。特に、多機能性を考慮した指導法の有効性を定量的に評価すべきである。

また、研究成果を踏まえた具体的な教材や指導案の開発が必要である。学習者のレベルや学習環境に応じた段階的な指導プログラムの構築が重要である。

9.4 結語

本研究は、接続詞「で」という一見小さな言語要素の研究を通じて、日本語における談話標識の発達メカニズムと言語変化の動態を明らかにした。「で」の150年間に

わたる発展過程は、言語が社会的使用の中でいかに変化し、新たな機能を獲得していくかを示す貴重な事例である。

また、日本語学習者の使用実態分析は、第二言語習得における談話標識の習得過程の複雑さを浮き彫りにした。学習環境、習熟度、母語背景といった要因が複合的に作用する習得メカニズムの解明は、より効果的な日本語教育方法の開発に重要な示唆を提供している。

本研究の成果が、日本語学と日本語教育の発展、さらには言語変化と言語習得に関する理論的理解の深化に貢献できれば幸いである。同時に、本研究で提起された課題が今後の研究によって解決され、「で」をはじめとする談話標識の研究がさらに発展することを期待したい。

<参考文献>

- 青木博史(2023)「「なので」の成立」『日本語と近隣言語における文法化』ひつじ書房 pp. 133-156
- 有賀千佳子(1993)「対話における接続詞の機能について―「それで」の用法を手がかりに―」『日本語教育』79 pp. 89-101
- 石黒圭(2007)「講義の談話の接続詞」西條美紀(研究代表者)『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』2004～2006 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)研究成果報告書 pp. 54-63
- 石黒圭(2008)『文章は接続詞で決まる』光文社新書
- 石黒圭(2017)「談話研究からみた話し方教育への示唆―学習者は接続詞をどのように習得するか―」『習ったはずなのに使えない文法』くろしお出版 pp. 195-210
- 石島満沙子・中川道子(2004)「日本語母語話者の独話に現れる接続詞「で」について」『北海道大学留学センター紀要』8 北海道大学 pp. 46-61
- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 市川保子(1988)「接続詞の用法と文脈展開―作文指導のための一試案―」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』3 筑波大学留学生教育センター pp. 175-185
- 伊藤翼斗(2012)「発話冒頭における接続に関わる要素の順序:「で」を中心に」『間谷論集』6 日本語日本文化教育研究会 pp. 27-49
- 岩澤治美(1985)「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』56 日本語教育学会 pp. 39-50
- 宇佐美恵子(2013)「接続詞「で」の指導に関する実験的研究:インプット洪水・インプット強化・明示的な文法説明の効果」『第二言語としての日本語の習得研究』16 pp. 196-213
- 大石初太郎(1954)「日常談話の接続詞」『言語生活』36 国立国語研究所 pp. 37-42
- 大久保歩美(2016)「近世後期江戸語及び明治期東京語における「ソレデ」の用法」『論集 X』 pp. 103-119
- 大工原勇人(2010)「日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究―フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて―」博士論文 神戸大学大学院国際文化学研究科グローバル文化専攻
- 尾谷昌則(2015)「接続詞「なので」の成立について」『日本語語用論フォーラム』ひつじ書房 pp. 183-208
- 小野寺典子(2011)「ケーススタディー談話標識(ディスコースマーカー)の歴史的発達」『歴史語用論入門:過去のコミュニケーションを復元する(シリーズ・言語学フロンティア 3)』大修館書店
- 小野寺典子(2014)「談話標識の文法化をめぐる議論と「周辺部」という考え方」金水敏・高田博行・椎名美智編『歴史語用論の世界文法化・待遇表現・発話行為』ひつじ書房 pp. 3-27

- 小野寺典子(2024)『談話標識へのアプローチ—研究分野・方法論・分析例』ひつじ書房
- 加藤重広(2004)『シリーズ・日本語のしくみを探る 6 日本語語用論のしくみ』研究社
- 加納千恵子(1992)「読解指導の方法と過程—接続詞による予測・推測を利用した指導例—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』7 筑波大学留学生センター pp. 19-44
- 川口容子(1992)「接続表現の機能に関する一考察—ディスコースマーカー「but」「でも」の標すもの—」『日本女子大学紀要. 文学部』41 pp. 159-168
- 川島拓馬(2024)「大正～昭和前期の演説における接続表現の使用状況—雑誌と比較して—」『富山大学人文科学研究』80 富山大学人文学部 pp. 43-63
- 金久保紀子(1993)は「大学の講義における接続の表現」『日本語と日本文学』18 筑波大学国語国文学会 pp. 1-11
- 金水敏(1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6(4) 言語処理学会 pp. 67-91
- 串田秀也(2009)「聴き手による語りの進行促進—継続支持・継続催促・継続試行—」『認知科学』16(1) 日本認知科学会 pp. 2-23
- 黒岩浩美(1994)「文章の結束性について—連接関係の分析からみた学習者の問題点—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』09 筑波大学留学生センター pp. 73-87
- 栗原宜子(1968)「それから・すると・では」『たより』31 日本語教師達盟 pp. 28-36
- 権景姫(2003)「接続表現「で」の意味機能」『日語日文学研究』45 韓国日語日文学会 pp. 121-141
- 権景姫(2005)「転換の接続詞「で」について」『日本語学研究』12 韓国日本語學會 pp. 25-38
- 小出慶一(2008)「発話行動における「で」の役割:「で」のフィラー化をめぐって」『埼玉大学紀要(教養学部)』44(2) 埼玉大学 pp. 27-40
- 国語国立研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞:用法と実例(国立国語研究所報告 3)』秀英出版
- 近藤明日子(2021)「明治・大正期の書き言葉における文体と語彙—順接の接続詞を例に—」田中牧郎・橋本行洋・小木曾智信(編)『コーパスによる日本語史研究 近代編』ひつじ書房 pp. 115-136
- 近藤邦子(2004)「香港の大学における日本語学習者によるストーリーテリングの接続表現の問題点」『早稲田大学日本語教育研究』第5号 早稲田大学大学院日本語教育研究科 pp. 77-92
- 西條美紀(1999)『談話におけるメタ言語の役割』風間書房
- 阪倉篤義(1952)『日本文法の話』創元社
- 佐久間まゆみ(1992)「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学文学紀要』41 日本女

- 子大学 pp. 9-22
- 佐久間まゆみ(2002)「3 接続詞・指示詞と文連鎖」『日本語の文法 4 複文と談話』岩波書店 pp. 119-189
- 梶本総子(1993a)「会話構成単位と談話標識との関わり—「じゃ」を手がかりに」『日本語・日本文化研究』3 京都外国語大学留学生別科 pp. 105-120
- 梶本総子(1993b)「会話の構造から見た談話標識の機能—ソレデに関する一考察—」『STUDIUM』21 大阪外国語大学 pp. 15-34
- 梶本総子(1994)「談話標識の機能について—ソレデ・デを中心として—」『日本語・日本文化研究』2 京都外国語大学留学生別科 pp. 33-44
- 鈴木英夫(1968)「「不整表現」の実態とその意義」『国語と国文学』45(2) 筑摩書房 pp. 36-48
- 高橋淑郎(2001)「談話における接続詞「で」の機能」『國語學』52(3) 日本語学会 pp. 98-99
- 田窪行則・定延利之(1995)「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええと」と「あの(一)」」『言語研究』108 日本言語学会 pp. 74-93
- 田中章夫(1984)「接続詞の諸問題—その成立と機能—鈴木一彦・林巨樹(編)」『研究資料日本文法 第4巻 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院 pp. 81-123
- 多門靖容(1990)「接続詞と談話展開についての一視点」『人間文化:愛知学院大学人間文化研究所紀要』5 愛知学院大学人間文化研究所 pp. 247-261
- 塚原鉄雄(1968)「接続詞」『月刊文法』1(1) 明治書院 pp. 39-43
- 塚原鉄雄(1969)「接続の論理—接続詞と接続助詞—」『月刊文法』2(2) 明治書院 pp. 68-74
- 塚原鉄雄(1970)「接続詞—その機能の特殊性—」『月刊文法』2(12) 明治書院 pp. 10-18
- 張未未(2019)「日本語の雑談における「物語」の導入方法—日本語母語場面と日中接触場面の相違—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』26(2) 早稲田大学 pp. 179-190
- 堤良一(2015)「そんな感じ」はブレイクダウンか?」『談話とプロフィシェンシー』(鎌田修・嶋田和子・堤良一(編)) 平凡社 pp. 84-111
- 時枝誠記(1950)『日本文法口語篇』岩波書店
- 東郷雄二(2000)「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』7 京都大学 pp. 27-46
- 栃木由香(1989)「日本語学習者のストーリーテリングに関する一分析・話の展開と接続形式を中心にして」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』5 筑波大学留学生教育センター pp. 159-174
- 栃木由香(1994)「日本語の話しことばにおける接続と指示の表現—日本語中級学習者

- の発話分析にむけて」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』9 筑波大学留学生センター pp. 103-118
- 栃木由香(1995)「日本語中級学習者の話しことばのテキストの型—接続表現の使用を中心に—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』10 筑波大学留学生センター pp. 79-93
- 中島悦子(2011)『自然談話の文法—疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞』おうふう出版
- 永野賢(1959)『学校文法文章論:読解・作文指導の基本的な方法』朝倉書店
- 日本語記述文法研究会(2009)『現代日本語文法 7 第 12 部談話第 13 部待遇表現』くろしお出版
- 野村美穂子(1996)「大学の講義における文科系の日本語と理科系の日本語—「フィラー」に注目して—」『教育研究所紀要』5 文教大学教育研究所 pp. 91-99
- 萩原孝恵(2012)『「だから」の語用論—テキスト構成的機能から対人関係的機能へ—』ココ出版
- 橋本進吉(1959)『國文法體系論(講義集二)』岩波書店
- 蓮沼昭子(1991)「対話における「だから」の機能」『姫路獨協大学外国語学部紀要』4 姫路獨協大学外国語学部 pp. 37-153
- 浜田麻里(1991)「デハ」の機能—推論と接続語」『阪大日本語研究』3 大阪大学文学部日本学科(言語系) pp. 25-44
- 飛田良文(1992)『東京語の成立期について』東京堂出版
- 飛騨村遙(2005)「指示詞と接続詞のかかわり再考—「それ+で」から「それで」への連続性」『立教大学ランゲージセンター紀要』14 立教大学ランゲージセンター pp. 3-20
- 深川美帆(2007)「接続表現から見た上級日本語学習者の談話の特徴—日本語母語話者と比較して—」『言葉と文化』8 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻 pp. 253-268
- 深川美帆(2009)「日本語学習者の談話における接続表現の習得研究」博士論文 名古屋大学大学院 国際言語文化研究科
- 福元広二訳/Elizabeth Closs Traugott 著(2011)「文法化と(間)主観化」高田博行・椎名美智・小野寺典子(編)『歴史語用論入門:過去のコミュニケーションを復元する』大修館書店 pp. 59-70
- 保科孝一(1911)『日本口語法』同文館
- 松下大三郎(1928)『改撰標準日本文法』勉誠社
- 益岡隆志・田窪行則(1989)『基礎日本語文法』くろしお出版
- 宮内佐夜香(2014)「「ガ」・「ケレド」類を構成要素とする接続詞の発達について—近世後期江戸語・明治期東京語における推移—」小林賢次・小林千草(編)『日本語史の新視点と現代日本語』勉誠出版 pp. 620-603

- 百瀬みのり(2020)「日本語接続詞の通時的研究—日本語接続詞の成立と展開—」 博士論文 大阪大学(旧)文学研究科
- 百瀬みのり(2018)「指示詞系フィラーの出現位置—インタビュー談話における—」『待兼山論叢. 文学篇』52 大阪大学阪大学大学院人文学研究科 pp. 55-76
- 矢島正浩(2011)「時間的・空間的比較を軸にした近世語文法史研究—ソレダカラ類の語彙化を例として」金澤裕之・矢島正浩(編)『近世語研究のパースペクティブ 言語文化をどう捉えるか』笠間書院 pp. 56-82
- 山口堯二(1999)『日本語接続詞法史論』和泉書院
- 山田孝雄(1970)『日本文法論』宝文館
- 山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
- 山本貴昭(2004)「談話における接続詞「で」の用法—女性話者の談話を対象として」『国文学攷』181 広島大学 pp. 13-27
- 山森良枝(1990)「接続詞の二類型と談話の情報構造—「つまり」と「だから」を手がかりに」『日本語学』9(5) 明治書院 pp. 84-101
- 吉崎奈々(2021)「中国人上級日本語学習者の作文で産出された接続詞の分析—使用頻度、文脈展開と機能習得を中心に」『日本語教育方法研究会誌』日本語教育方法研究会 28(1) pp. 4-5
- 名嶋義直(2007)『ノダの意味・機能関連性理論の観点から』くろしお出版

<英文>

- Givón, T. (1979). On understanding grammar. New York: Academic Press.
- Hopper, P. J. (1991). On some principles of grammaticization. *Approaches to grammaticalization*, 1, 17-35.
- Hopper, P. J., & Traugott, E. C. (2003). *Grammaticalization* (Cambridge Textbooks in Linguistics). Cambridge: Cambridge University Press.
- Lehmann, C. (1995). *Thoughts on Grammaticalization*. Munich and Newcastle: LINCOM Europa.
- Matsumoto, Y. (1988). From bound grammatical markers to free discourse markers: history of some Japanese connectives. In *Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 340-351.
- Meillet, A. (1912). L'évolution des formes grammaticales. *Scientia*, 6(12).
- Onodera, N. O. (2004). *Japanese discourse markers*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Redeker, G. (1991). Linguistic markers of discourse structure. *Linguistics*, 29(6), 1139-1172.
- Schiffrin, D. (1987). *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, E. C., & Dasher, R. B. (2002). *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.

<辞書>

- 小学館(2003)『日本国語大辞典(第二版)』

<使用した教科書>

- 岡本牧子・氏原庸子(2010)『くらべてわかる初級日本語表現文型ドリル』ジェイ・リサーチ
- 岡本牧子・氏原庸子(2012)『くらべてわかる中級日本語表現文型エイ・リサーチ』ジェイ・リサーチ
- 清水崇文(2013)『中上級学習者のためのブラッシュアップ日本語会話—みがけ!コミュニケーションスキル』スリーエーネットワーク
- 小山悟(2008)『J.BRIDGE for Beginners vol.2』平凡社
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子(2011)『げんき I・II』The Japan Times
- スリーエーネットワーク(2012)『みんなの日本語初級 I・II』スリーエーネットワーク
- 水谷信子・松本隆・高橋尚子(2015)『わかる!話せる!日本語会話発展文型 125』ジェイ・リサーチ

<参考したウェブサイト>

国史大辞典・世界大百科事典-ジャパナレッジ

<https://japanknowledge.com/introduction/keyword.html?i=1932:~:text=さらに,明治時代を時期,ことが可能である%E3%80%82>(最終確認日:2024年4月1日)

馬場俊臣(2024)『接続詞関係研究文献一覧』北海道教育大学学術リポジトリ

[https://sites.google.com/view/baba-lab/接続詞関係研究文献一覧/接続詞関係研究文献一覧 csv 形式?authuser=0](https://sites.google.com/view/baba-lab/接続詞関係研究文献一覧/接続詞関係研究文献一覧csv形式?authuser=0)(最終確認日:2025年6月5日)

<コーパス>

国立国語研究所『日本語歴史コーパス』(CHJ)中納言 2.7.2 データバージョン 2024.03

国立国語研究所『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)中納言 2.7.2 データバージョン 2024.03

国立国語研究所中納言『昭和・平成書き言葉コーパス』(SHC)中納言 2.7.2 データバージョン 2024.03

宇佐美まゆみ監修(2021)『BTSJ 日本語自然会話コーパス(トランスクリプト・音声)2021年3月版』、国立国語研究所、機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」

謝辞

本論文の完成にあたり、多くの方々にご指導、ご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

まず、主指導教員である堤良一教授には、研究の方向性から細部に至るまで、終始懇切丁寧なご指導を賜りました。思い返せば、2016 年の交換留学時に堤教授と出会い、先生の日本語学の授業を受講したことが、私の研究人生の出発点でした。先生の魅力的な講義に深く感銘を受け、日本語言語学への興味を抱くようになり、この研究の道に進むきっかけをいただきました。その後の博士課程においても、研究に行き詰まった際には常に適切な助言をいただき、研究者としての姿勢についても多くのことを学ばせていただきました。先生との出会いから今日まで、一貫してご指導いただいたおかげで本論文を完成させることができました。深く感謝申し上げます。

副指導教員の宮崎和人教授には、専門的な知見から貴重なご助言をいただきました。研究の質的向上に向けて、多角的な視点からご指導いただき、論文の構成や内容の充実に大きく貢献していただきました。厚く御礼申し上げます。

同じく副指導教員の中東靖恵教授には、研究手法や分析方法について詳細なご指導をいただきました。また、研究倫理や学術的な表現についても丁寧にご教授いただき、研究者としての基礎を固めることができました。心より感謝いたします。

また、久保蘭愛准教授には、特に本研究の歴史的側面において貴重なご助言をいただきました。歴史研究の手法や史料の扱い方について詳細にご指導いただき、論文の学術的価値を高めることができました。深く御礼申し上げます。

研究室の先輩方、同輩、後輩の皆様には、日頃から活発な議論を通じて多くの示唆をいただきました。特に、研究発表の際には建設的なご意見をいただき、研究の改善に大いに役立ちました。

事務職員の皆様には、研究環境の整備や各種手続きにおいて、きめ細やかなサポートをいただきました。おかげで研究に専念することができました。

最後に、長期間にわたる研究生活を支えてくれた家族および未届夫の王永東さんに心から感謝いたします。精神的な支えがあったからこそ、この論文を完成させること

ができました。

本論文に関わってくださったすべての方々に、改めて深く感謝申し上げます。

令和7年5月

劉洋